



EXPO 2025
Theme
Weeks

EXPO2025 Theme Weeks Insight Report



テーマウィーク インサイトレポート

December 2025

EXPO2025 Theme Weeks Insight Report

目次

テーマウィークの意義 …… 4

8つのテーマ …… 6

テーマウィークの事業構造 …… 8

アジェンダ2025 主催プログラム …… 11

Agenda2025が示す未来社会のデザインとSDGs+Beyond - 荻田 修 …… 44

アジェンダ2025 共創プログラム …… 46

未来は予測するものでも待つものでもない 未来を自ら選び、つくり上げていく若者たちの力 - 佐久間 洋司 …… 50

アジェンダ2025 参加プログラム …… 52

登壇者の声 …… 56

Visionary exchange …… 58

トラックプログラム1: 公式参加者 …… 60

トラックプログラム2: 日本国政府、自治体等 …… 64

トラックプログラム3: シグネチャープログラム …… 68

Beyond SDGsの動的プロセスとしての「Better Co-being」- 宮田 裕章 …… 70

テーマウィークで多彩ないのちが高まりあう未来社会を模索 - 中島 さち子 …… 72

トラックプログラム4: TEAM EXPO 2025 …… 74

トラックプログラム5: 万博参加企業 …… 76

テーマウィークコネクト …… 78

テーマウィーク・プログラムの意義 - 橋爪 信也 …… 80

成果 …… 81

テーマウィークスタジオ …… 82

テーマウィークは、万博170年の歴史における一つの到達点 - 石川 勝 …… 84

万博の歴史から …… 89

推進体制 …… 90

テーマウィーク インサイトレポート

December 2025

大阪・関西万博のテーマは、「いのち輝く未来社会のデザイン」です。万博におけるテーマは、その万博の開催意義を表す、もっとも重要な存在です。以下の文章は、2019年12月27日に日本国政府が博覧会国際事務局（BIE）に提出した登録申請書に記載した、万博のテーマについて解説した文章です。この中に示されているように、大阪・関西万博のテーマには、人類共通の課題を解決するために国際社会が共創していくことを推し進めるという想いが込められています。

Designing Future Society for Our Lives

いのち輝く未来社会のデザイン

日本国政府は、誘致段階においてBIE加盟国に対し『いのち輝く未来社会のデザイン』をテーマとして提示し、多くの国々の支持を得ることができた。

21世紀に入り、人類は国際合意や国際協力、そしてそれぞれの国の努力によって、かつてないほど課題の解決を成し遂げてきた。

例えば、2015年を目標年として設定した開発分野における国際社会共通の目標、ミレニアム開発目標（以下、「MDGs」）は、「これまでの歴史で最も成功した貧困撲滅の取り組み」と言われる。これは、我々人類は望ましい未来を協力して描き、その達成に向けて共に努力を重ねることで、現実のものにすることができること、また、未来の姿を世界が共にデザインしていくアプローチが有効であること、を示している。

このMDGsの考え方を引き継ぎ、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて、2030年までの国際目標となる、持続可能な開発目標（以下、「SDGs」）が掲げられた。これも、国際社会が議論を重ねて合意した未来社会の姿であり、持続可能な未来に向けたあらゆる国々の社会・経済システムの変革を促すものになると期待されている。

2030年に向けて、我々の生活に劇的な変化をもたらす革新的な技術も進歩するだろう。人工多能性幹細胞（以下、「iPS細胞」）のようなライフサイエンステクノロジー、人工知能（以下、「AI」）、ロボティクスを含む、これらの革新的な科学技術は新たな時代を作るブレークスルーとなるだろう。こうした技術により私たちは不治の病の発見や治療、これまでとは異なる働き方や学び方を手にすることができると期待される。

一方で、世界の状況を見ると先進国と途上国との生活環境の格差は今なお大きく、「誰一人取り残さない」というSDGsの誓いを実現する道筋ははまだ途上である。これまで経済成長をけん引し、絶対的貧困の撲滅に貢献してきた資本主

義が、経済格差（所得格差や資産格差）を拡大させる結果をもたらしているかもしれない。

また、持続可能な未来社会に向けた解決策となり、本来は人々を幸せにするようなバイオテクノロジーやロボティクスも、人間社会とのつながりが置き去りにされると、不安を生み出す技術となるおそれもある。

かつてないスピードで私たちを取り巻く環境が変化する中で、我々は「幸福とは何か」、「自らのポテンシャルを最大限に発揮するためにはどうすべきか」、「それを支える社会はどうあるべきか」という深遠な問いを投げかけられている。

『いのち輝く未来社会のデザイン』というテーマは、人間一人一人が、自らの望む生き方を考え、それぞれの可能性を最大限に発揮できるようにするとともに、こうした生き方を支える持続可能な社会を、国際社会が共創していくことを推し進めるものである。

言い換えれば、大阪・関西万博は、格差や対立の拡大といった新たな社会課題や、AIやバイオテクノロジー等の科学技術の発展、その結果としての長寿命化といった変化に直面する中で、参加者一人一人に対し、自らにとって「幸福な生き方とは何か」を正面から問う、初めての万博になる。

近年、人々の価値観や生き方がますます多様化するとともに、技術革新によって誰もがこれまで想像しえなかった量の情報にアクセスし、やりとりを行うことが可能となった。このような進展は、大阪・関西万博が世界の叡智とベストプラクティスを大阪・関西地域に集約するのに役立ち、多様な価値観が複雑に絡み合った諸課題への解決策をもたらすはずである。

大阪・関西万博 登録申請書P11
「テーマ：いのち輝く未来社会のデザイン」より抜粋



人類共通の課題を解決するために世界の叡智を持ち寄る場

1994年の博覧会国際事務局（BIE）総会において、万博を人類共通の課題解決の場とする決議がなされました。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界中で猛威を振るった2021年、ドバイ万博は開幕を1年間延期するも未だ世界中で移動制限が敷かれている中で開催されました。この未曾有の危機に直面しながらも見事に成功を収めたドバイ万博では、1994年のBIE総会決議を踏まえた課題解決のための試みが随所に取り入れられていました。中でも、万博の歴史上初めて開催されたテーマウィークは、新たな時代の万博の意義を示す象徴的な出来事であったと言えます。

大阪・関西万博では、このドバイ万博のレガシーを継承し、さらに発展させて次の万博へと受け渡していくことが重要な役割であると考え、テーマウィークを実施することとしました。

1851年にロンドンにおいて第1回目の万博が開催されて以来、170余年に渡って万博は継承されてきました。その間、世界には何度かの大きな変化が訪れましたが、万博も時代の変化に合わせてその姿を変えてきました。しかしながら、半年間の長きに渡って世界が同じ場所に集うという万博の普遍的な価値は変わることがありませんでした。人間の生み出した文明が地球環境を脅かすまでに膨張し、分断や対立から未だに逃れる術を見いだせない人類にとって、世界が同じ場所に集う万博の存在は、より重要性を増していると言えます。テーマウィークによって、こうした万博の意義は一層際立ち、世界がより良い未来へと向かうための活力を生み出します。テーマウィークは、人類共通の課題を解決するために世界の叡智を持ち寄る場なのです。

8つのテーマ

テーマウィークのテーマは、SDGsなどで掲げられている人類共通の課題を大阪・関西万博のテーマ及びサブテーマを用いて8つの領域に編集しました。各テーマごとに「問い」を立て、テーマウィークで行う全てのプログラムを通じて目指すべき方向性を描き出すことを目標とします。



4/25 - 5/6



未来への文化共創
ウィーク

多様な文化が共鳴し、未来への文化が共創されるために、私たちは何をすべきか？

伝統芸能、歴史遺産、地域活性化、観光、アート、音楽、スポーツ、文化芸術、クールジャパン、マンガ・アニメ、eスポーツ など

5/15 - 5/26



未来のコミュニティと
モビリティ ウィーク

誰もがその人らしく生きられるコミュニティとは？

スマートシティ、デジタル田園都市、防災・復興、メタバース、宇宙、ロボット、EV・FCV、自動運転、空飛ぶクルマ、サイバーセキュリティ、MaaS など

6/5 - 6/16



食と暮らしの未来
ウィーク

全ての人々が食と暮らしに困ることがない未来はどのようにすれば実現できるのか？

フードロス、フードテック、食育、食文化、スマート農林水産業、サステイナブルファッション、エシカル消費 など

6/20 - 7/1



健康とウェルビーイング
ウィーク

一人ひとりのウェルビーイングが共鳴する社会をどう実現するか？

感染症対策、ウェルビーイング、ゲノム医療、再生・細胞医療・遺伝子治療、PHR、健康寿命、SBNR、安全な水とトイレ など

7/17 - 7/28



学びと遊び
ウィーク

AI時代において人は何を学べば良いのか？

生涯学習、EDTEC、知財活用、個別最適化学習、遠隔教育、若者自立、教育格差、STEAM、アントレプレナーシップ、世界の遊び など

8/1 - 8/12



平和と人権
ウィーク

あらゆる差別をなくし、互いを尊重し合う社会を実現するために、世界は何をすべきか？

飢餓、貧困、格差社会、人権侵害、児童労働・強制労働、人身売買、障がい者参加、ジェンダー平等、LGBTQ、女性の活躍推進、移民、人間の安全保障、多様性と包摂性 など

9/17 - 9/28



地球の未来と生物多様性
ウィーク

豊かで多様ないのちが住む地球を未来に残すために、私たちは何をすべきか？

気候変動、脱炭素、生物多様性、サーキュラーエコノミー、再生可能エネルギー、水素社会、ネイチャーポジティブ、森林破壊、海洋汚染、里山再生、淡水資源 など

10/2 - 10/12



SDGs+Beyondいのち
輝く未来社会 ウィーク

SDGsは達成できるか？そして、その先はどのような？

SDGs、ポストSDGs、いのち、未来社会、Society5.0 など

クロスカッティングイニシアチブ

8つのテーマと直交する切り口として、大阪・関西万博のコンセプトを踏まえた3つのクロスカッティングイニシアチブを設けました。



経済・イノベーション

地球的課題の解決をはかる際に、経済的効果を伴うことや及び先進技術を活用することなど、経済や技術からの視点です。



人口動態・少子高齢社会

急速な人口増加や、少子高齢化とそれに伴う人口減少など、人口変化を中心とした社会性からの視点です。



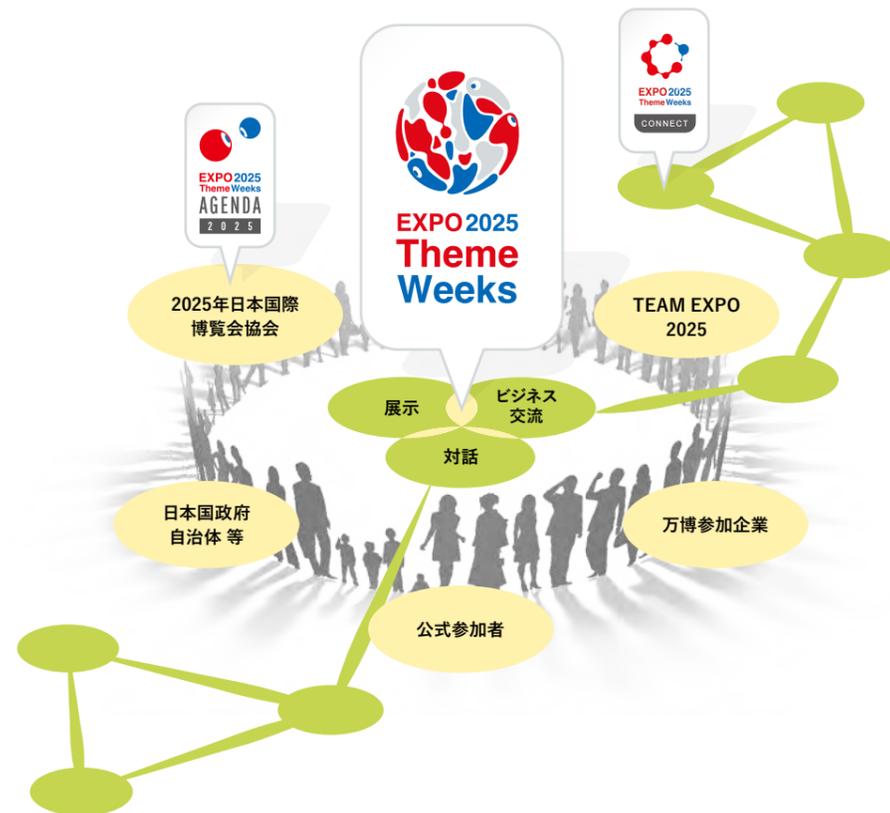
次世代・インクルージョン

課題解決の取り組みにおける次世代の参加や、多様な立場の人の参加など、人権や多様性など一人一人の幸福感を重視する新たな時代の価値観からの視点です。



「いのち輝く未来社会」を世界と共に

テーマウィークは、世界と共に「いのち輝く未来社会」を描くために、対話と展示とビジネス交流の3つのプログラムによって構成しました。また、テーマウィークをより意義あるものとして実現するために、万博の主催者だけでなく全ての万博参加者が主体的に取り組む仕組みと、世界中からアクセスでき閉幕後も映像を視聴することのできる仕組みを設けました。



対話と展示とビジネス交流

テーマウィークの中核となるプログラムは「対話」です。世界が半年間に渡って同じ場所で過ごす万博ならではの特性を活かし、国土や経済力の大小に関わらず全ての国や地域が意見を発信し、対話することのできる機会として対話プログラムを数多く実施することのできる仕組みを設けました。加えて、より多くの来場者がアクセスできる「展示」プログラムや、企業活動等を通じて具体的に行動する人々との出会いを創出する「ビジネス交流」の仕組みを設けました。

5つのトラック

万博の主催者だけでなく、世界の国や地域、国際機関、日本国政府、自治体、企業、市民団体など、全ての万博参加者がテーマウィークに主体的に取り組むことができるよう、万博の参加者ごとに5つのトラックに分類し、それぞれのパビリオン等にてプログラムが実施されました。

	トラック1	トラック2	トラック3	トラック4	トラック5
実施団体	公式参加者	日本国政府 自治体 等	2025年日本国際 博覧会協会 (アジェンダ2025) (テーマ事業)	TEAM EXPO 2025	万博参加企業
主な 実施場所	公式パビリオン	日本政府館 大阪パビリオン EXPOメッセ等	テーマウィークスタジオ EXPOメッセ シグネチャーパビリオン	TEAM EXPO パビリオン	民間パビリオン 未来社会ショーケース

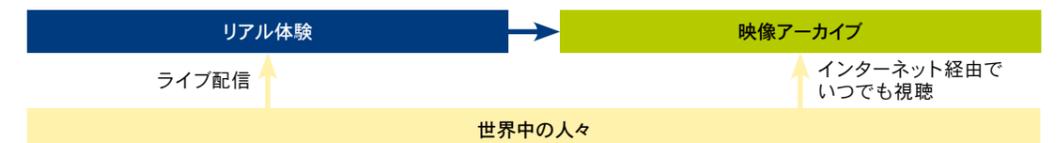
テーマウィークコネクト

テーマウィークの理念をより広く拡げていくために、万博会場外において開催される各種国際会議等とも連携する仕組みとして「テーマウィークコネクト」を設けました。



リアル体験、ライブ配信、映像アーカイブ

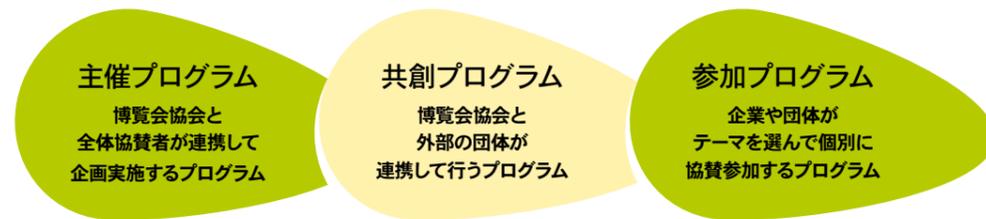
テーマウィークのプログラムは、万博会場内において観覧者としてリアル体験できるほか、インターネット経由でライブ配信を行います。さらに、テーマウィークで交わされた対話を広く伝えるために、万博閉幕後も映像アーカイブとして公開します。



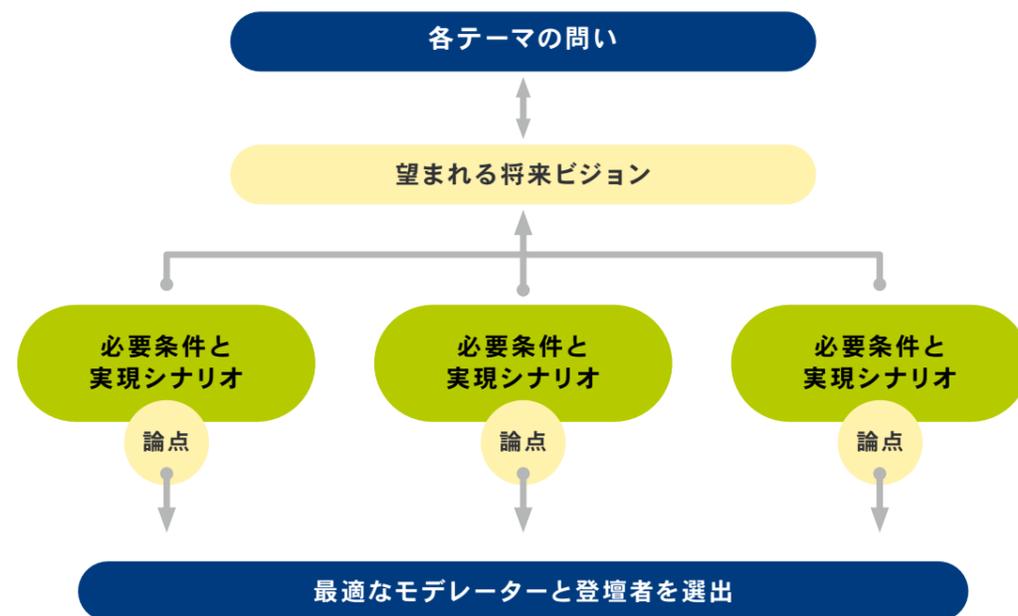
アジェンダ2025

アジェンダ2025は、2025年日本国際博覧会協会が主体となって、テーマウィークの8つのテーマを通して行うシリーズプログラムです。

博覧会協会と全体協賛者が連携して企画実施する主催プログラムと、テーマウィークの趣旨に賛同する外部の団体と博覧会協会が連携して行う共創プログラム、企業や団体がテーマを選んで個別に協賛参加する参加プログラムの3つのカテゴリで構成しました。



主催プログラムでは、各テーマの「問い」に対して、望まれる将来ビジョンを立て、それを実現するためのシナリオを構築します。そのシナリオに基づいて対話プログラムの論点を構築し、最適なモデレーターと登壇者を選出して、質の高いセッションの実現を目指しました。



AGENDA 2025 Organised Programme

アジェンダ2025 主催プログラム

未来への文化共創 ウィーク		学びと遊び ウィーク	
歴史文化の継承と発展	12	AI時代の学び・遊びのあり方	28
新たな文化の土壌づくり	15	学びへの公平なアクセス	31
未来に向けた多文化の共鳴	15	多様な個性を活かす学び・遊び	31
未来のコミュニティとモビリティ ウィーク		平和と人権 ウィーク	
リアルとデジタルが融合した社会のあり方	16	平和の構築・実現	32
持続可能な都市・地方への転換	19	人権の尊重・保障	35
デジタルを中心とした次世代のコミュニティ	19	労働市場における格差是正	35
食と暮らしの未来 ウィーク		地球の未来と生物多様性 ウィーク	
「エシカルリビング」の促進	20	気候変動への対応	36
100億人のための健康で持続的な食提供	23	自然資本の維持	39
食文化の継承・発展	23	循環経済の実現	39
健康とウェルビーイング ウィーク		SDGs+Beyond いのち輝く未来社会 ウィーク	
Well-being経営・教育	24	「いのち輝く未来社会」のデザインに向けた提言	40
サイエンス・テクノロジーの進展	27	8人のテーマ事業プロデューサーと考える「いのち」とSDGs+Beyond	43
Well-beingエコシステムの構築	27	新たな時代の万博とテーマウィーク	43

未来への文化共創 ウィーク

歴史文化の継承と発展



主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年05月05日(月) 10:00 ~ 12:00
開催場所 テーマウィークスタジオ

紛争、戦争、自然災害という社会の根底を揺るがす出来事が起きた国で活動する、世界的に注目される3人のアーティストがパネリストとして登壇。ウクライナの詩人 オスタップ・スリヴィンスキーさん、イスラエルのビデオアーティスト ルース・パティルさん、群馬県を拠点に活動する現代美術家・竹村京さんが、それぞれの創作活動について紹介しながら、「文化資源によって過去と現在をいかにつなぎあわせ、未来へと継承するか」という共通の課題意識について語り合った。

語りをコミュニティに取り戻す「言語的金継ぎ」

キャンベルさんはまず、スリヴィンスキーさんが2023年に上梓した証言集『戦争語彙集』(岩波書店刊)から一編のストーリーを紹介した。

その夜わたしは、戦争が始まって以来最も大きな爆発音を繰り返し耳にしなが、毛布やら枕やらをめいっぱい放り込んだ浴槽の中で眠りにつこうとしていました。

その昔、わたしは燃えるような恋をしました。初めてカルパティア山脈にある山小屋に二人で出かけていくと、秋はもう深まっています。浴槽と大して変わらないほど寝心地の悪い屋根裏部屋のベッドの上で二人一緒にうとうとしながら、わたしは耳を傾けていました。庭中の林檎の木から、果実が一個また一個、地面に落ちてきます。熟みぎった大きな林檎が夜通し、測ったような感覚で、とすつ、とすつ、と落ちてきます。わたしは幸せでした。

そして現在、わたしは爆発の音を聞きながら眠りにつこうとして、林檎の音を聞いたのです。庭の林檎の実だけがわたしたち皆のもとに落ちてくれば、いいのに、と心から思います。

——「林檎」 アンナ／キーウ在住



オスタップ・スリヴィンスキー さん

スリヴィンスキーさんはロシアによるウクライナ侵攻が勃発した当時、避難者が殺到する西部の都市リヴィウで生活情報の提供役として支援にあっていた。その体験のなかで人々が語った言葉にまつわるストーリーをウクライナ語のA～Zの順にまとめたのが『戦争語彙集』である。8カ国語に翻訳され、日本語版はキャンベルさんによって翻訳された。キャンベルさんは「人々の記憶の中にある生活の具体的な証拠——たとえば“リンゴ”という言葉が、戦禍においてどのように意味を変化させるのかを記録している作品」と紹介した。

「私がやっていることはいわば“言語的金継ぎ”



だ」とスリヴィンスキーさんは表現する。「感覚すらも失うほどのストレスにさらされ、私たちは言葉を失いそうになっていた。情報支援テントで避難者を出迎えると、食べ物・飲み物・寝る場所以上に『語りた』と、人々は物語から始めることを望んでいた。自分の役割は、聞き手として断片をまとめることだと感じた」

スリヴィンスキーさんは続けて「世界を語ること、理解すること、伝えようとするをやめてしまえば、そのコミュニティは抵抗する力を失う。それはコミュニティにとっての危機であり、語るこそが抵抗力になる。戦争によってバラバラになった現実を一つにしなければならぬ。『戦争語彙集』は、意味論的抵抗。私が著者なのではなく、語り手たちのストーリーが流れ込んで一つの河となった社会的プロジェクトだ」と語った。

虫の命と引き換えに、壊れたものに光を与える

現代美術家の竹村京さんは、絹糸を使って壊れた器などの日用品を縫い直す立体作品を手掛けている。東京藝術大学在学中、1300年前につくられた日本最古の刺繍『天寿国繡帳(てんじゅこくしゅうちょう)』に出合ったことをきっかけに絹糸をつかった作品制作を始めた。卒業後はドイツ・ベルリンに住み、前の居住者によって壊されたアパートの一室を修復した経験などを通して「バラバラに壊れたものを絹糸でつなぎあわせる」というスタイルを構築していった。



竹村 京さん

キャンベルさんと共に能登半島地震の被災地を訪問した時のことを振り返り、「一つの器が落ちてしまったことに対しては責任をとれると思っていた。しかし街どころか半島全体が崩れてしまったところに、アーティストとして何ができるのか考えさせられた」と吐露した。

竹村さんは近年、オワンクラゲの蛍光タンパク質をカイコの遺伝子に組み込むことで生み出された「蛍光シルク」という素材と向き合っている。「蛍光シルクはブルーライトを当てることで光るのだが、時間が経つと光は失われていく、つまり“生きている”とも言える。絹糸が虫の命と引き換えに生み出されるものであることを忘れずに、壊れたものに光を与えていきたい」と語る。

古代と現代の女性をつなぎ、「性と生殖に関する権利」を問う

パティルさんはイスラエルを拠点に、ドキュメンタリーとCGを融合させた映像作品に取り組んでいる。2024年に開催された現代美術の国際的祭典「第60回ヴェネツィア・ビエンナーレ」でイスラエルの代表出展者選ばれたが、「(ガザ地区を実効支配するハマスとの間で)停戦と人質の解放が合意されるまでパピリオンは開かない」という声明を発表し、会期を通して展示館を閉鎖した。キャンベルさんは「アーティストとしての使命感に則った行動に、大きく胸を打たれた」と回想した。パティルさんは「今はアートの時期ではない、状況が変われば再開するという意味だったが、責任者にはうまく伝わらなかった。いまだに戦争が続いているということが信じられない」と話す。



ルース・パティル さん

パティルさんが発表した作品「(M)otherland」は、イスラエルで出土した古代の女性の彫像に、モーションキャプチャ技術で自身の動きを投影したビデオドキュメンタリーだ。物語は、パティルさんががんリスクを高めるBRCA2遺伝子変異と診断され、卵子凍結を行った経験に着想を得ている。「イスラエルでは子供を産むということが他国以上に大きな意味を持ち、女性のアイデンティティ



世界を語ること、理解すること、伝えようとするをやめてしまえば、そのコミュニティは抵抗する力を失う

に重くのしかかっている。卵子凍結が国家的に推奨されており、費用も安い」と言う。

古代の女性の置物をアバター（分身）とすることで、時代を超えた普遍的な女性の苦悩が表現されている。パティルさんは「リプロダクティブ・ライツ（性と生殖に関する権利）が国家政策にどうつながっているのか、女性がたとえ母親にならなくても自分を認めることができるのか、問いかけたかった」と語る。

共通性を見つめ、文化資源を未来へつなげる

パティルさんは、竹村さんの作品における器という対象と、自身の作品における女性という存在の「脆弱性」に注目し、「脆弱性のあるものを修復し光を当てることは、戦争や破壊に対する反抗を示すことにつながる」と指摘した。

また、各々の創作活動を踏まえ「共通性」の重要性を強調した。「私はドキュメンタリー作品によって人々が直面する現実を映し出そうとし、スリヴィンスキーさんは象徴的な言葉＝メタファー（比喩）を使って人々の目に映る世界を描き出している。これは偶然の一致ではないだろう。私は多くのストーリーを重ねることでそこに共通する意味、『人間性』を見出すことに関心がある。分断する世界で、私たちは共通性を考えなければいけない。それをもとに未来に目を向けなければ、政治的なゲームに取り込まれてしまう」と警鐘を鳴らす。



ロバート キャンベル さん

スリヴィンスキーさんは「未来を見据えて記録をアーカイブすることは、どうして重要なのか?」というキャンベルさんからの問いかけに、『戦争語彙集』が果たす役割をもって答えた。「『戦争語彙集』の意義は2つある。まずはこの本をまとめることで、届かなかったかもしれない人々の声が世界に届い

たということ。次に、エビデンスという意義。この本はいずれ裁判が開かれたときに、戦争犯罪の証拠になるだろう。キャンベルさんは「戦争が終了したとしても、人々の心に平和が訪れるわけではない。『私たちは何をしたのか/されたのか』を『語ること/語らないこと』によって、次の暴力へのサイクルは大きく変化する」とうなずいた。

キャンベルさんは「今回の万博のテーマである『いのち輝く未来社会』に文化資源をどうつなげていくか。とても重い題材ではあったが、文化資源と渡り合い、人々のアイデンティティを表現することを共に考え、歴史文化の継承と展開について思いを一つにできた」とセッションを振り返った。



[登壇者]

ロバート キャンベル (モデレータ) 早稲田大学特命教授、早稲田大学国際文学館(村上春樹ライブラリー)顧問、2025年日本国際博覧会協会 理事、シニアアドバイザー、日本文学研究者

オスタップ・スリヴィンスキー PENウクライナ

ルース・パティル アーティスト

竹村 京 現代美術作家

*本記事は、ポストンコンサルティンググループのウェブサイトに「BCG Japan」に掲載されたものの一部を、許諾を得て掲載しています。

未来への文化共創 ウィーク

新たな文化の土壌づくり

主催 2025年日本国際博覧会協会

開催日時 2025年05月05日(月) 13:30 ~ 16:00

開催場所 テーマウィークスタジオ

2025年大阪・関西万博のテーマウィーク「新たな文化の土壌づくり」セッションでは、文化表現の可能性と未来に向けた共創の基盤について議論が行われました。モデレーターの片岡真実氏は、文化を価値観が交わる場と捉え、「不易流行」の視点から継承と変化の重要性を指摘しました。中国のルー・ヤン氏はデジタルと東洋思想を融合し、身体や精神を超えた共鳴空間を提示しました。料理人カイリー・クワン氏は、倫理とサステナビリティを基盤に地域と協働する食文化を紹介しました。裏千家の伊住禮次朗氏は茶の湯における「余白」の価値を説き、文化変容の契機を示しました。ホー・ツー・ニエン氏は多民族社会の歴史を再構成し、文化の土壌が交渉により形成されることを示しました。ヤン・ヘギュ氏はインスタレーションで歴史や権威を批評し、文化の可塑性を表現しました。ローレン・ボン氏は環境と文化を結ぶ実践を紹介しました。議論では、伝統の核は価値観にあり、余白や非言語的交感文化の変容を促すと強調されました。片岡氏は、見えないものを可視化し他者と共鳴する場こそ文化を更新する土壌であると総括しました。



[登壇者]

片岡 真実 (モデレータ) 森美術館 館長、国立アートリサーチセンター長

ルー・ヤン アーティスト

カイリー・クワン シェフ、コラボレーター、シドニーのパワーハウス・アンソシエイト、パワーハウス・バラマツク

伊住 禮次朗 茶道裏千家

ホー・ツー・ニエン アーティスト

ヤン・ヘギュ アーティスト

ローレン・ボン メタリポリックススタジオ、アーティスト

未来への文化共創 ウィーク

未来に向けた多文化の共鳴

主催 2025年日本国際博覧会協会

開催日時 2025年05月05日(月) 17:30 ~ 20:00

開催場所 テーマウィークスタジオ

2025年大阪・関西万博「未来に向けた多文化の共鳴」セッションでは、科学、建築、芸術、哲学など多様な分野の専門家が、社会課題と未来の可能性を「共鳴」を軸に議論しました。モデレーターの宮田裕章氏は、環境問題や格差といった課題に対し、文化やアートの役割を強調し、共鳴を「違いを前提にしながらつながりを見出すこと」と定義しました。建築家の藤本壮介氏は自然と調和する建築を提案し、共有空間が文化共存の基盤になると語りました。長谷川祐子氏は、アートが抑圧された声を可視化し社会を更新する力を持つと述べました。トマス・サラセーノ氏はクモの巣を例に環境共生を訴え、植物学者マンクーゾ氏は植物の知性から持続可能な都市像を提示しました。レアンドロ・エルリッヒ氏は体験型作品を通じ、多様な認識の存在と共感の可能性を示しました。討議では、建築・自然・非人間種・想像力といった多様な視点から共鳴が論じられ、宮田氏は多文化共鳴を「違いに影響し合い新たな価値を創造する動的プロセス」と総括しました。



[登壇者]

宮田 裕章 (モデレータ) 慶応義塾大学 医学部教授

藤本 壮介 株式会社藤本壮介建築設計事務所

長谷川 祐子 キュレーター、京都大学経営管理大学院客員教授

トマス・サラセーノ アーティスト

ステファノ・マンクーゾ フィレンツェ大学 教授、Pnat創設者

レアンドロ・エルリッヒ アーティスト、レアンドロ・エルリッヒ・スタジオ

未来のコミュニティとモビリティ ウィーク

リアルとデジタルが融合した社会のあり方



主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年05月17日(土) 13:30 ~ 15:30
開催場所 テーマウィークスタジオ

5月17日には2つ目のテーマ「未来のコミュニティとモビリティ」を議題とした3つのトークセッションが万博会場内のテーマウィークスタジオで行われた。

「人とアバターの共生社会」が目指すもの

「リアルとデジタルが融合した社会のあり方」のセッションでは、大阪大学大学院基礎工学研究科教授の石黒 浩氏がモデレーターを務めた。パネリストとしては、国立研究開発法人情報通信研究機構構監事などを務める土井 美和子氏、東京大学先端科学技術研究センター教授の稲見 昌彦氏、イタリア工科大学創設ディレクターのジュリオ・サンディーニ氏、シンガポール国立大学教授学部長のチェチリア・ラスキ氏が登壇。アバターは社会にどう受け入れられ、アバターによって社会はどう変わっていくかについて意見を交わした。

アバターとは、自分の分身として動かすことができるCG（コンピュータグラフィクス）キャラクター、またはロボットのことだ。現在、AIの発展によって、アバターは操作する人間の意図を汲み、半自律的な行動が可能な段階にある。万博パビリオンでも展示中の、人間に酷似したアンドロイド「ジェミノイド」は、操作をしなくても人との会話が可能だ。相手の表情などをカメラで読み取り、ジェスチャーを交えることもできる。

アンドロイド・アバター研究で知られる石黒氏（写真左）は、「人とアバターの共生社会」を作ることを目指していると語る。石黒氏が立ち上げたベン

チャー企業AVITAでは、アバター提供をビジネスとして展開。保険選びのWebサービスでは、生身の人間を相談役とした場合よりも、生成AIを組み込んだアバターを相談役とした方が高い成果を上げた例もあるという。また今後、車椅子利用者がCGのアバターを使い、遠隔でコンビニの接客業務を行うような活用方法も想定されている。アバターを利用すれば複数店舗で働くことができ、賃金の向上も期待できる。こうしたアバターの浸透によって、今後の人口減による労働力不足の改善や、差別の解消、社会の包摂性向上にも資すると石黒氏は述べる。



石黒 浩さん

ロボットの手・指がファッションに？

このように、現在アバターは労働力不足を補ったり、障害を克服したりする手段の一つとして見られることが多い。しかし、パネリストへの「今後、アバターの社会実装の担い手は誰になると思いますか？」という石黒氏の問いに対して、稲見氏から

は「ファッション業界が市場をリードしていくのでは」という全く違った角度の意見が飛び出した。

稲見氏は、人間の身体を拡張するロボットの身体を研究・開発している。セッションでは実際に「第6の指」を着けて登場した。これは筋肉で発生する微弱な電場を検出して動く人工の指で、小指の外に指を付け加える形で装着し、意志に合わせて動かすことができる。

稲見氏は、過去にブロック等で疑似的に「オリジナルの第6の指」をつくるワークショップを開催したところ、参加した子どもたちが第6の指をデコレーションする現象が起きたという。この事態は稲見氏にとっても予想外で、「もともと体の一部として機能するようにつくったものだったが、体の代替・拡張としての技術だけではない可能性を感じた」と語った。



稲見 昌彦さん

石黒氏は「たしかに義手、人工の指と聞くとハンディキャップのある人が使うものだと思いがち。しかし、一般の人もこうした技術をファッションとして取り入れるかもしれない。アバターがファッション化して広く取り入れられれば、価格も下がっていくかも」と納得。稲見氏は2対のロボットアーム（自在肢）をつけたダンサーのパフォーマンスなども紹介し、新しい表現手法としてのアバターの可能性を示した。

一方サンディーニ氏は、こうした意見は興味深いとしながらも「単に指を増やすのが目新しい、ファッションブルだ、というのではなく、機械を使った人の感情こそが重要だ」と指摘する。サンディーニ氏は、神経科学とエンジニアリング工学との融合や、ロボット制作を通じた人間理解を研究テーマとしており、人間とロボットのやり取りから関係

性が生まれることを重視している。そのバックグラウンドから、たとえば「指が増えたことで野球がうまくできた」など、アバターによってもたらされる刺激や体験が大切なのではないかとの見方を示した。

アバターは人になるのか？ 未来の人間の進化とは

アバターに対して多様な意見が出されるなかで複数のパネリストが共通して懸念を示していたのは、人間がアバター技術に依存してしまう、または、人とアバターの主従関係が逆転してしまう状態だ。稲見氏は「人間が機械に使われているのではなく、自分が主人公だと考えることが必要」と語り、サンディーニ氏も「アバターとのやり取りによって、人同士のやり取りが減ることは避けなくてはいけない」と述べる。



ジュリオ・サンディーニさん

一方、石黒氏は、将来的に人とアバターの間の境界線は消えていくだろうという見解を示した。これまでも最も進んだツールを使って能力の強化、つまり「進化」をしてきた人類にとっては、アバターやAIを受け入れることも進化だと石黒氏は語り、「人型のロボットやAIをパートナーとして使っていくようになることに、疑いの余地はないと思う。彼らを友人として見るかもしれない」と続ける。



チェチリア・ラスキさん





人間が機械に使われているのではなく、自分が主人公だと考える ことが必要

これを受け、タコをヒントに柔らかい素材で作ったソフトロボットの研究者であるチェチリア・ラスキ氏は「自律性を持ち、何らかの知性を持ったロボットだとしても『人間性』を持っているわけではないと思う」と意見を述べた。

知性あるロボットは社会の一部としては受け入れられるかもしれないが、ペットもしくは家電のような、人とは違う扱いになるのでは、と語る。対してサンディーニ氏は「人間性というのは関係性にあると思う」と述べ、今後もし人間のようなAIが出現した場合「やり取りの記憶を持っていて関係性が同定され、それを何か別の技術で確認できるのであれば、その関係性に嘘はないと思う」とロボットが人間性を持ちうる未来について考察を深めた。

さらにセッションでは、「AI時代において、ヒューマノイドの可能性は広がっていくか」「デジタルが融合した世界で都市とコミュニティはどのようになっていくか」といった質問が投げかけられ、これからの人間の在り方やその可能性を考えさせられる活発な議論が展開された。



土井 美和子 さん

[登壇者]

石黒 浩 (モデレータ) 大阪大学大学院基礎工学研究科教授、ATR石黒浩特別研究所客員所長

ジュリオ・サンディーニ イタリア工科大学ロボット工学・脳・認知科学ユニット

稲見 昌彦 東京大学 (総長特任補佐・先端科学技術研究センター 副所長 / 教授)

チェチリア・ラスキ シンガポール国立大学 学部長教授

土井 美和子 国立研究開発法人情報通信研究機構 監事、東北大学 理事、奈良先端科学技術大学院大学 理事

* 本記事は、ポストコンサルティンググループのウェブサイト「BCG Japan」に掲載されたものの一部を、許諾を得て掲載しています。

未来のコミュニティとモビリティ ウィーク

持続可能な都市・地方への転換

主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年05月17日(土) 10:00 ~ 12:00
開催場所 テーマウィークスタジオ

本セッションでは、都市と地域が直面する課題とその解決策を多角的に議論した。アンドレ・ロドリゲス・ポゼ氏は、拡大する都市と地方の格差を是正するには、財政移転に頼るのではなく、地方主導のボトムアップ型政策や人材育成、イノベーションが必要であると述べた。市川宏雄氏は、都市は「生き続けること」と「選ばれ続けること」が重要であり、国際的な比較指標を活用しながら包摂性や多様性を高めるべきだと指摘した。クリア・シャルビット氏は、ガバナンスや市民参加を含めた「場所に根ざした政策」の必要性を説き、中規模都市間の連携による持続可能性向上の事例を紹介した。オズゲ・オナー氏は、アムステルダムの実践から、人間中心の都市設計や15分都市構想、市民参加が持続可能性の基盤になると報告した。福澤知浩氏は、空飛ぶクルマが都市と地方を結ぶ新たな公共交通インフラになり得るとし、社会的受容と制度設計の重要性を強調した。全体討論では、都市と地方を対立ではなく連関としてとらえ、地域固有の強みを起点に未来像を構築する必要性が共有された。



[登壇者]

アンドレ・ロドリゲス・ポゼ (モデレータ) ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス 政治学教授

クリア・シャルビット 経済協力開発機構

福澤 知浩 SkyDrive株式会社 代表取締役CEO

オズゲ・オナー ケンブリッジ大学 准教授

市川 宏雄 明治大学名誉教授

未来のコミュニティとモビリティ ウィーク

デジタルを中心とした次世代のコミュニティ

主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年05月17日(土) 17:00 ~ 19:00
開催場所 テーマウィークスタジオ

デジタル技術が未来社会の共同体にどのような役割を果たすかを多角的に議論した。モデレーターの三宅陽一郎氏は、ゲームAIやメタバースの知見をもとに、デジタル空間が「共感」や「集合知」を媒介する新たな共同体の基盤となると述べ、人間中心の倫理観の必要性を強調した。川島優志氏は、NianticのARサービスを例に「場所の意味の再構築」とリアル空間での偶発的交流の価値を紹介し、デジタルは公共性を拡張する手段であると語った。ミョー ニエン・アング氏は、パンデミック下で顕在化したデジタル格差を指摘し、特に高齢者や脆弱層に向けた包摂的な設計と支援体制の重要性を訴えた。キャシー・ハックル氏は、空間コンピューティングやメタバースによって文化や国籍を超えた流動的なコミュニティが形成される一方、プライバシーや包摂的設計の必要性を強調した。松山歩氏は、X (旧Twitter) の「関心に基づくつながり」が新しい社会構造を生んでいると指摘し、公共性と自由のバランスを問うた。全体討論では、デジタルは人を空間や属性を超えてつなぐ可能性を持つが、その設計には倫理的配慮と人間中心の思想が不可欠であることが共有された。



[登壇者]

三宅 陽一郎 (モデレータ) 東京大学 生産技術研究所 特任教授

川島 優志 Niantic, Inc. ゲーム/パブリッシング部門 副社長

ミョー ニエン・アング 順天堂大学大学院医学研究科グローバルヘルス専攻准教授

キャシー・ハックル テック&ゲーミングエグゼクティブ、Spatial DynamicsのCEO、作家、基調講演者、未来学者、ポッドキャストの司会

松山 歩 X Corp. Japan 株式会社 代表取締役

食と暮らしの未来 ウィーク

「エシカルリビング」の促進



主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年06月16日(月) 17:00 ~ 19:00
開催場所 テーマウィークスタジオ

6月16日、第3弾の「食と暮らしの未来」ウィークの一環として、「エシカルリビングの促進」をテーマにしたセッションが万博会場内で行われた。エシカルファッションやサステナビリティを軸に国内外で活動する実践者6人が登壇。エシカルな社会は実現できるのか?社会、制度、経済、文化などのさまざまな側面から意見が交わされた。

「今、地球はエシカルな方向に進んでいるのか?」

エシカル (ethical) は直訳すれば「倫理的」だが、実際にはその内容は広範囲にわたる。今回のセッションのモデレーター、生駒芳子さんは女性ファッション誌『マリ・クレール』の元編集長で日本エシカル推進協議会の会長を務める。生駒氏によると、協議会では専門家による議論を通じて「エシカル基準」を策定しており、その項目は以下の8つに分類されている。

- 自然環境を守っている
- 人権を尊重している
- 消費者を尊重している
- 動物の福祉・権利を守っている
- 製品・サービスの情報開示をしている
- 事業を行っている地域社会に配慮・貢献している
- 適正な経営を行っている
- サプライヤーやステークホルダーと積極的に協働している

これらの項目は、取り組みの優劣を評価するためのもではなく、それぞれの実践者が自身の立ち位置を確認しながら持続可能な方向へ進むための指標として活用されている。こうしたエシカルの枠組みを前提としながら、セッションでは現代社会の方向性そのものを問う議論が展開された。



生駒 芳子 さん

「今、地球はエシカルな方向に進んでいるのか?」。生駒氏のこの問いかけに対し、迷うことなく「そうは思わない」と即答したのは、フェアトレード（発展途上国との公正な取引）のブランドを展開してきたピープルツリー創設者、サフィア・ミニー氏。ミニー氏は30年以上フェアトレードに取り組み、2004年に世界経済フォーラム（シュワブ財団）によって「世界で最も傑出した社会企業家」の一人に選ばれた。温暖化による気候危機が現実のものとなり、企業、政府、国際機関、そして市民社会にいたるまで、もはや「行動するしかない」局面



にあると述べたうえで、「50年後、100年後に事業や暮らしが持続可能であり続けるかどうかは、今の意思決定にかかっている」と強調した。



サフィア・ミニー さん

この現実について、生駒氏は「今は『ティッピングポイント（分岐点）』にある」と述べ、危機の中にこそ希望と連帯の可能性があると言った。「このイベントのように一人ひとりがどう思うかを共有する場を持つこと自体に意味がある」として、対話によって意思が揃う場の必要性に触れた。

一般社団法人unisteps共同代表の鎌田安里紗氏も「現状がエシカルに進んでいるとは言いがたい」としながら、「この問いを持ち続けることが出発点になる」と答えた。unistepsは、持続可能なファッションについて学ぶ「サステナブルファッション講座」の開催や、ファッション・繊維企業でつくる「ジャパンサステナブルファッションアライアンス」の事務局を担っている。



鎌田 安里紗 さん

「戦争や気候政策の後退といった厳しい現実を踏まえると、エシカルに進んでいるとは言いがたい。ただ、今日のように、それぞれの感覚や葛藤を持ち寄って話し合える場こそがとても重要だと感じる」。

エシカルを阻む構造と、広げるための試み

続く議論では「なぜエシカルな選択が広がりにくいのか」という構造的な問題にも焦点が当てられた。

ミニー氏は、現代の資本主義がもたらしている影響について、「人権や地球、生物多様性を犠牲にして利益を最大化するシステムが、過去40年間で定着してしまった」と指摘。経済成長を最優先する仕組みが続く限り、持続可能性との矛盾が解消されないという現状に警鐘を鳴らした。

オーガニックコットンの育種に長年取り組んできたサリー V. フォックス氏も、自らの経験から資本主義の変質を指摘した。「昔、ファッションブランドの利益率は20%でビジネスは成り立っていた。今は60%、80%が当たり前。資本主義そのものよりも『そのあり方』に問題がある」と述べた。フォックス氏は1980年代後半、繊維に自然な色合いを持ち、染色を必要としないカラードコットン（有色綿）の美しさに魅了され、大規模な有機栽培に特化したカラードコットンの品種改良をいち早く手掛けた。現在も日本の紡績会社と一緒に普及に努めている。



サリー V. フォックス さん

では、エシカルという価値観はどうすれば人々に届くのか?「エシカルという言葉には、どうしても堅苦しさがあ。道徳や倫理と聞こえてしまうと、人は距離を取ってしまう」と生駒氏が問題提起した。

これに対し、鎌田氏は「人が行動を変えるには、体感が必要だ」と強調する。自ら綿を育てる「服の種」プロジェクトや、生産現場に足を運ぶスタディツアーを通して、服づくりの工程に触れることが「頭ではなく体で理解するエシカル」につながるとい。 「糸を紡ぐ現場を見て、生地を染めるための水と熱を知ると、報告書やデータでは届かない腹



糸を紡ぐ現場を見て、生地を染めるための水と熱を知ると、 報告書やデータでは届かない腹落ちが起きる

落ちが起きる」と鎌田氏は語った。

エシカルの伝え方を考える上では、生活者の実感と同時に、購買行動につながっているかという現実的な視点も欠かせない。ファッションブランドのエシカル評価システム「Good On You」共同創設者のゴードン・レヌーフ氏は、「消費者は、エシカルだから製品を買うのではない。これが欲しいという感情で選んでいる」と語る。「Good On You」は「人・地球・動物」の3つの観点からブランドを5段階で評価するオーストラリア発のエシカル評価システムで、日本ではそのデータを活用した日本版プラットフォーム「Shift C」として展開されている。



ゴードン・レヌーフさん

「8割の人はエシカルなものを買いたいと思っているし、エシカルではない買い物をすると後ろめたさを感じると答えている。このような消費者心理の二面性（「エシカルでありたい」という理想と、「欲しいから買う」という現実のギャップ）があるからこそ、エシカルだから、というコミュニケーションではなく、デザインや質が良いからといった価値を伝えていくことが大切だ」とレヌーフ氏は言う。

こうした消費者行動のギャップに対し、フォックス氏は消費者の変化に希望を見出す。「人は、正しくてオーセンティック（本物）なものにこそエネルギーを感じる」と述べ、背景にある物語を知った顧客が、共感をもって他者に伝えていく——そうした小さな連鎖が、エシカルな選択を広げていく力になるとした。

AI利用の環境負荷を考える視点も大切

そして話題は、AIとエシカルの関係にまで及んだ。鎌田氏は「AIは便利だが、その裏では莫大な電力

が使われている」と指摘し、水の使用やCO2排出といった見えにくい環境負荷を認識した上で、使い方を考える必要があると述べた。フォックス氏も、「AIを一回使うごとにどれだけのエネルギーが消費されているかを数値化することで、より責任ある利用につながるのではないかと提案した。

セッションの最後には、「50年後の地球はどうなっていてほしいか」という問いが投げかけられた。登壇者からは、自然との共生、資源の再生、社会的連帯、民主的な対話など、さまざまな視点での未来像が語られた。表現や焦点は異なりながらも、いずれも持続可能で多様な生命が共に生きられる社会を志向する内容となっていた。



[登壇者]

生駒 芳子 (モデレータ) ファッションジャーナリスト、アートプロデューサー、伝統工芸開発プロデューサー、株式会社アートダイナミクス代表取締役社長、日本エシカル推進協議会会長

サフィア・ミニ 社会起業家、コンサルタント、アドバイザー

鎌田 安里紗 一般社団法人unisteps共同代表理事

ゴードン・レヌーフ Good On You共同創業者

サリー V. フォックス Vreseis Limited代表、オーガニックコットンブリーダー (1982年～)、所有商標Foxfibre® Colororganic®

*本記事は、ボストンコンサルティンググループのウェブサイトに「BCG Japan」に掲載されたものの一部を、許諾を得て掲載しています。

食と暮らしの未来 ウィーク

100億人のための健康で持続的な食提供



主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年06月16日(月) 10:00 ~ 12:00
開催場所 テーマウィークスタジオ

本セッションでは、人口増加や気候変動、栄養格差といった課題を背景に、持続可能で包括的な食の未来をいかに設計するかが議論された。冒頭、エメリン・フェルス氏は現行のフードシステムが限界に達していると指摘し、栄養と環境を両立させる全体的な変革と、多様な主体の協働の必要性を訴えた。シャクンタラー・ハラクシン・ティルステッド氏は、魚を中心とした栄養改善の重要性を強調し、女性や地域住民を巻き込む取り組みを紹介した。ジョアオ・カンパリ氏は、気候変動や生物多様性喪失に対抗するため「自然に基づく解決策」の導入を求め、消費者の食行動の変革と教育の必要性を説いた。小野郁氏は、味の素の事例を挙げ、栄養改善や食品ロス削減を通じて「健康と喜びの両立」を実現する企業の責任を強調した。ディスカッションでは、制度改革や金融支援、行動科学を取り入れた商品設計、栄養中心のシステム構築、教育の役割が共通課題として共有された。最後にフェルス氏は、地域の実践とグローバルな制度設計の両輪で進める必要があるとまとめ、本対話は「健康・地球環境・社会包摂」を同時に実現するための協働の重要性を再確認する場となった。



[登壇者]

エメリン・フェルス (モデレータ) 持続可能な開発のための世界経済人会議 (WBCSD) の農業・食品担当シニアディレクター
ジョアオ・カンパリ グローバルリーダー 食と農業の実践
WWFインターナショナル&チエア アクショントラック3 国連食料システムサミット
小野郁 味の素株式会社 執行役 コーポレート本部 サステナビリティ推進部 部長
シャクンタラー・ハラクシン・ティルステッド CGIAR栄養、健康、食料安全保障インパクトエリアプラットフォームのディレクター

食と暮らしの未来 ウィーク

食文化の継承・発展



主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年06月16日(月) 13:30 ~ 15:30
開催場所 テーマウィークスタジオ

本セッションでは、日本の伝統食文化の継承と発展を軸に、食が社会・自然・個人を結ぶ文化的基盤としていかに未来へ受け継がれるべきかが議論された。冒頭、外村仁氏は技術革新とローカル文化を結びつけた食の再構築の必要性を示し、持続可能性を支える「文化的変革」の重要性を強調した。アイネス・クック氏は、先住民料理が文化再生と癒しの力を持つと述べ、食がアイデンティティを取り戻す手段になると紹介。アナ・ロバト・フォント氏は、アンデス地域の知恵に基づく食文化教育の価値を示し、地域に根ざしたガストロノミーが持続可能性を高めると指摘した。林亮平氏は、日本料理が培ってきた季節感や素材への敬意を基盤に、伝統と革新を往復する姿勢の重要性を語った。酒井里奈氏は、発酵を軸に未利用資源を循環させる実践を紹介し、発酵が人・自然・地域をつなぐ文化的媒介となる可能性を提示。後半の議論では、食を通じた関係性の再構築やローカル知の再評価が共通課題として共有され、登壇者は食文化の包摂性と創造性こそが未来社会を形づくる鍵になるとまとめた。



[登壇者]

外村 仁 (モデレータ) Food Techエバンジェリスト、投資家
酒井里奈 株式会社ファーマンステーション 代表取締役
林 亮平 でのしま店主
アイネス・クック レストランター、著者
アナ・ロバト・フォント San Francisco de Quito University、研究開発責任者

健康とウェルビーイング ウィーク

Well-being経営・教育



主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年06月28日(土) 17:00 ~ 19:00
開催場所 テーマウィークスタジオ

第4弾のテーマは「健康とウェルビーイング (Well-being)」。

6月28日には「Well-being経営・教育」を議題にパネルディスカッションが開催され、BCGのシンクタンク、BCGヘンダーソン研究所 (BHI)の日本リーダー、苅田 修をモデレーターに、日本マイクロソフト社長の津坂美樹氏、米ボストン大学クレストロム経営大学院の研究准教授、コンスタンス・ヌーナン・ハドレー氏、ユニリーバ・ジャパン・カスタマーマーケティング社長のエド・ブリオラ氏、ミネルバ大学の学生でサステナビリティの観点から着物のリメイクブランド「u縁me」を運営する山口笑愛氏の計5人が話し合った。

ウェルビーイングは、身体的な健康にとどまらず、精神的、社会的にも良い状態にあることをいい、多様な個人がそれぞれ生きがいや幸せを感じられる社会を目指すなかで用いられる概念だ。企業でも、社員が心身共に健康で、やりがいや喜びを見出しながら日々の仕事に従事できる職場環境が求められている。

時間の使い方がウェルビーイングに影響

パネルディスカッションでは、最初に各人が自らのウェルビーイングに関する研究内容や企業での取り組みについて話した後、BCGの苅田が「組織へのエンゲージメント (貢献意欲、帰属意識) やウェルビーイングと、企業の業績をどう両立させるか。課題は何か」と問いかけた。

ビジネススクールで教鞭をとるハドレー氏は、「ウ

ェルビーイングを促進するのは簡単ではない」と切り出した。特に時間の使い方について、企業を対象とした研究を基に「リモートワークが可能になり、24時間いつでもどこでも仕事ができる。仕事の量やペースをどう調整するか。ミーティングをどうスケジュールするか。それが大きな影響を与える」と指摘した。



コンスタンス・ヌーナン・ハドレー さん

時間については、マイクロソフトの津坂氏も「ROI (Return on Investment、投資収益率) ではなく、ROT (Return on Time)、つまりかけた時間に対するリターンを意識している」と述べた。

「この会場にいる人で、時間があがり過ぎて困るという人はいないと思う。多くの人が過密なスケジュールでストレスを抱えてしまうのが現状だろう」と話し、ROTの改善の例として、ソフトウェアのエンジニアがAIを使ってコード (プログラム) を速く書けるようになり、空いた時間でよりよい仕事が

できるので満足度が75~80%も上がっていることを紹介した。

ユニリーバのブリオラ氏は「小さな取り組みでも大きな効果を挙げられる」と話した。例えば日本のユニリーバで金曜はミーティングをやめようという取り組みをしたが、それぞれの部署の事情などがあってなかなかうまくいかなかった。そこで、上司は金曜にミーティングを設定してはいけないが、部下は上司に対してミーティングを求めてもいい、というやり方にしたところ、うまくいくようになったという。「こうした小さな改善の積み重ねが大切」と強調した。

山口氏は学生の立場から「座学が多い日本の学校と違って、ミネルバ大学はディスカッションが中心。学生一人一人の意見が重要だと言われる。たとえ自分が何を言ったとしても受け入れてもらえる。それぞれの発言には意味があり、お互いに何かを学べると考えることで帰属意識が生まれ自信がついた」と語った。



山口 笑愛 さん

企業業績とウェルビーイングの両立に向けて

一方で、ウェルビーイングが高いパフォーマンスにつながらない場合とはどういうものか。

ハドレー氏は「心理的安全性を単に気楽でプレッシャーがない環境だと誤解する人がいる。企業のウェルビーイングの目的は、組織全体が繁栄することにある。つまり社員がやる気を出すのを後押しする取り組みなので、ウェルビーイングだから気楽でいいと思う人がいれば、それは間違いだ」と説明した。

津坂氏は「日本では、子供がいる女性の仕事を一

方的に減らしたり、標語を壁に貼ってコミットメントを示したりと、多様性やワークライフバランスに対する取り組みがうまくいかなかった過去がある。女性に聞くと期待しているのはそんなことでなく、リモートワークを認めるなど柔軟な対応を望んでいる。ウェルビーイングも全員が同じことを求めていると考えてはいけない。上の人間が思い込みで勝手に決めるのではなく本人たちにニーズを聞くことが大切だ」と述べた。



津坂 美樹 さん

さらに、世界的に少子高齢化が進む現状を踏まえ、苅田が「年齢が高い社員が増える一方、Z世代のような若い人もいる。すべての世代が高いエンゲージメントを持って共に働くことはできるか」と問題提起した。

これに対してブリオラ氏は「ジェンダーなどに比べて、世代の多様性は見逃されがちだ。世代ごとに、人生において何が大切かやコミュニケーションの仕方も違う。その違いを受け入れ、ギャップを超えて協働することが必要だ。年齢や経験の違う人たちが一緒に働くことでより豊かなことを達成できる」と期待を述べた。

ハドレー氏は「人口動態が変化し、キャリアパスとは何かを考え直す必要がある。すでに退職した人の中にも、仕事の量を減らしたいが、仕事自体は続けたいという人もいる。パートタイム、副業などさまざまな働き方がある。何歳になってもいろいろな可能性があり、キャリアパスをカスタマイズすべきだが、私たち研究者もまだそのためのよい仕組みを提示できていない」と、時代に追いついていない現状を説明した。





ウェルビーイングは必要なのか、なぜ大切なのか、という次元ではもはやなく、やるしかない時代だ

AI時代の働き方と人間の役割

ディスカッション後半では、急速に普及が進むAIについて意見を交わした。生成AIの登場に続き、自立型AIであるAIエージェントが注目を集めている。人間に代わってAIが仕事をこなすようになると、人間はどのような価値を提供できるのか。苺田は、個人も企業もAIエージェントを使うと、AI同士が直接やり取りして、人間には分からない言語（機械語）で話すこともありえるとして、米AIスタートアップのElevenLabsが公開している動画（What happens when two AI voice assistants have a conversation?）を紹介した。

動画を見たハドレー氏は「怖いと感じた。AI同士が会話していても人間には何を話しているか分からない。何をAIに任せべきかを考える必要がある。社員の指導をどれだけAIができるかという研究があるが、人間が入らないとうまくいかないという結果だった。AIを使うのはいいが、人間が関与しない世界にはなってほしくない」と意見を述べた。

ブリオラ氏は「AIを利用することで、これまで100かかっていた仕事が70になる。その空いた時間をどう使うか。知的活動に使えば、イノベーションが生まれて社会が進化する。企業であれば、空いた時間を社員の教育や勉強など価値を高めることに使えばよい」と話した。



エド・ブリオラさん

ディスカッションのまとめでは、ハドレー氏が「ウェルビーイングは仕事の外にあるのではなく、企業の事業の一部になっていく。社員のウェルビーイングを考えない人は昇進できないような世の中が望ましい」と期待を述べ、津坂氏が「ウェルビーイングは必要なのか、なぜ大切なのか、という次元ではもはやなく、やるしかない時代だ」と力説した。



苺田 修さん

最後に苺田氏が「ウェルビーイングと企業業績はつながっている。それを実現するためには、従業員への十分なケアが必要であり、テクノロジーを活用して成長へのマインドセットを育むことが大切だ」と締めくくった。



[登壇者]

苺田 修 (モデレーター) ポストンコンサルティンググループマネージング・ディレクター&シニア・パートナー

コンスタンス・ヌーナン・ハドレー VInstitute for Life at Work創設者、ボストン大学クエストロム・スクール・オブ・ビジネス・リサーチ准教授

山口 笑愛 2024年度未来世代アドバイザーボードメンバー、「サステナブル・ブランド・ジャパン」主催ユースコミュニティ第1期メンバー・縁me ファウンダー兼デザイナー

津坂 美樹 日本マイクロソフト株式会社 代表取締役社長

エド・ブリオラ ユニリーバ・ジャパン・カスタマーマーケティング株式会社 代表取締役社長 兼 ヘッド オブ カーバー・コリア

*本記事は、ポストンコンサルティンググループのウェブサイトで「BCG Japan」に掲載されたものの一部を、許諾を得て掲載しています。

健康とウェルビーイング ウィーク

サイエンス・テクノロジーの進展

主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年06月28日(土) 10:00 ~ 12:00
開催場所 テーマウィークスタジオ

2025年6月28日に開催されたセッション「サイエンス・テクノロジーの進展」では、急速に進化する科学技術が健康やウェルビーイングに与える影響について、多角的な議論が行われた。モデレーターは『サイエンス』誌のカイ・クプファー・シュミット氏で、iPS細胞研究の金子新氏、医療AI起業家チャリット・ボグラジ氏、AIソフトウェア開発者の浅川智恵子氏、免疫学者ダンミヤ・ラウイ氏が登壇。科学と社会の信頼関係、技術の倫理的課題、未来の医療像が共有された。クプファー・シュミット氏は「科学は物語と信頼の構築が不可欠」とし、パンデミックで顕在化した科学不信に触れた。ラウイ氏は樹状細胞を用いた個別化がん免疫療法を紹介し、AIによる最適化治療の可能性を提示。金子氏はiPS細胞から再生したT細胞による「次世代がん治療」の臨床試験構想を発表。ボグラジ氏はAI診断システムによる途上国発の医療革新を語り、浅川氏は視覚障害者の移動を支援するAIソフトウェアの社会実装に挑戦していることを述べた。ディスカッションでは「科学を社会に根ざすには誠実な説明と対話が不可欠」との共通認識が示され、科学者・技術者・ジャーナリストが「翻訳者」として市民と共に未来を描く意義が強調された。



[登壇者]

カイ・クプファー・シュミット (モデレーター) サイエンス誌 寄稿特派員
浅川 智恵子 IBM フェロー IBM Research/日本科学未来館館長
チャリット・ボグラジ Tricog Health Pte Ltd. 創設者、博士
金子 新 京都大学 iPS細胞研究所 教授、筑波大学 医学医療系 教授
ダンミヤ・ラウイ ベルギー・ブリュッセル自由大学免疫学センター教授 樹状細胞生物学・がん免疫療法研究室グループリーダー、フランダース生物工学研究所、ベルギー

健康とウェルビーイング ウィーク

Well-being エコシステムの構築

主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年06月28日(土) 13:30 ~ 15:30
開催場所 テーマウィークスタジオ

2025年6月28日に開催されたセッション「Well-being エコシステムの構築」では、世界の専門家や企業、学術機関、保険者らが参加し、データ活用を通じて多様な人々のWell-beingを向上させる方法を議論した。ICHOMのブライト氏は多角的なWell-being指標や患者中心の医療評価を紹介し、個人・制度双方における責任を強調。ペプシコのチー氏は従業員向けの包括的プログラムと「体験としてのケア」の重要性を示した。クルック氏は低所得国での経験を基に、医療制度の質改善と住民の信頼獲得の必要性を指摘。ライヒ氏 (AXA) は医療費高騰と資源のばらつき解消にデータ活用が不可欠と述べ、エラスムス氏は患者体験や予防重視の制度設計を訴えた。討論ではデータの「量より質」と文脈重視が共通認識として確認され、持続可能なWell-beingエコシステムには多様なステークホルダーの協働と共創が不可欠であるとの結論に至った。



[登壇者]

ジェニファー・L・ブライト (モデレーター) 国際健康アウトカム測定コンソーシアム (ICHOM) 会長&CEO
マーガレット・クルック博士 ワシントン大学医学部医療システムと医学、特別教授、クエストネットワークディレクター
ニルス・ライヒ AXAグローバルヘルスビジネスCEO
ダニエル・エラスムス Insight Actuaries CEO
ジェニ・チー 池貞儀 ペプシコ、グローバルベネフィット、シニアディレクター

学びと遊び ウィーク

AI時代の学び・遊びのあり方



主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年07月28日(月) 10:00 ~ 12:00
開催場所 テーマウィークスタジオ

第5弾は「学びと遊び」。7月28日には「AI時代の学び・遊びのあり方」と題したパネルディスカッションが開かれ、メディアアーティストで筑波大学准教授の落合陽一氏をモデレーターに、公立はこだて未来大学教授の美馬のゆり氏、科学者のタリン・カラーヌワット氏、人間とコンピューターの関係性を研究する東京大学教授の暦本純一氏、AIを使った英語教育アプリ「ELSA」のCEO、ヴァン・ディン・ホン・ヴ氏の5人が意見を交わした。

遊びが学びの原動力になる

はじめにモデレーターの落合氏が人類の発明の歴史を紹介した。狩猟採集から農耕への移行、産業革命、コンピューターの発明——人類史を振り返ると、発明や技術革新のサイクルは時代を追うごとに加速してきた。かつては数万年単位の時間を要していたが、産業革命以降は100年、50年と短くなり、コンピューターの登場後は数年単位にまで短縮されるようになったという。今後は生成AIの登場により、1年、3日、1日単位で大きな変化が起きる可能性もあると予想される。落合氏は「これまで人間は生きるため・暮らすために学んできたが、AIによって知識の獲得や作業の遂行が人の手を必要としなくなったら、何のために学ぶのだろうか」と問いかけた。

これに対し、公立はこだて未来大学の美馬氏は「遊びの中こそ学びの動機がある。たとえば万博の会場内を歩くと、たくさんのが色々な形で出てくる。『これはどうなっているの?』『あの素

材は何?』と、自分が楽しくて面白いなと思うことが学びの要素になるのでは」と話す。



美馬のゆりさん

東京大学の暦本氏も「土器に模様を付けたり、埋葬物に化粧したりするなど、人類は昔から"生きるため"以上の行動をとってきた。ネアンデルタール人が自己表現や求愛のために歌っていたという説も提唱されており、言語や文字が体系化するかなり前から遊びを原動力にした行動が見られていた。つまり遊びは人間の主たる原理で、それを組織化すると学びになるのでは」と同意した。

科学者のタリン氏はAI研究開発に取り組んでおり、2025年4月には江戸時代の古文風テキストで会話できるチャットボット「からまる」を公開した。AIに江戸時代の本を3000冊程度学習させ、ユーザーが「あなたの名前は何か」と現代の日本語で質問すると、「某(それがし)が名はから



まるにて候(そうろう)」のように、すべて古文で返答してくれる仕組みだ。ところが、タリン氏が実際にチャットボットを使う際は、「せっかくだから江戸時代の言葉で返そう」と思い、常に辞書を引きながら会話しているという。「AIを使っているはずなのに、逆に自分の方が学んでいる状況になっている」と冗談めかした。「たとえばゲームに勝ったらみんなそこで止めるかという、そうではなく、まだ遊んでいたいと思う。遊びは『知りたい』『できるようになりたい』という人間の欲望を自然に引き出す」と話した。



タリン・カラーヌワットさん

AI時代の学習はどう変わるのか

ヴ氏は、出身地のベトナムから渡米した際、「英語の読み書きはできても話すことができない」と、言語の壁に直面した経験からAIを活用した英語学習アプリ「ELSA」を開発した。美馬氏が「AIの教師と人間の教師にはどんな違いがあるのか」と尋ねると、「学習のモチベーションや興味は人それぞれだが、人間の教師だとすべてに対応しきれない。AIなら一人ひとりに合わせた内容を提供できる。先生の前で間違えると恥ずかしさを感じることもあるが、AIが相手なら気にせず学べるし、24時間いつでも勉強できる」と力を込めた。



ヴァン・ディン・ホン・ヴさん

一方で教える側の立場について、落合氏は自身や暦本氏が大学の50人規模のクラスで授業をしたり、1対1の個別指導を行ったりしていることに触れ、「さまざまな形の指導がある中で、AI時代に効率的に学ぶには、先生の役割はどう変わっていくか」と問いを投げた。



落合陽一さん

暦本氏は「関心も理解度もみんな異なるのに、授業で50人に一斉に同じことを話すのはたしかに非効率だ。AIを活用すれば、昔は貴族しか受けられなかったような個別の家庭教師による学びを誰でもツールとして利用できる。ただ、効率的に学ぶことばかりを追求するのには注意が必要だ」と警鐘を鳴らした。

"人間ならではの"を追求していく時代に

暦本氏によると、「サルは猿真似しない」という実験結果があり、人間の子どもは箱を開けてバナナを取るときに手順までそっくり真似をする一方、サルは結果だけを求めて動くという。「AIを使うときにパッパッと結果だけを求めるのは"サルの"になってしまう。一見効率が悪く無駄に見えるような学習にも、プロセスを大事にする人の本質がある」と説明した。

美馬氏も「特に学びにおいては寄り道や失敗から何かを見つけることもあり、効率だけで測るべきではない。いま広がっている"効率的利他主義"の考え方では、たとえば100万円寄付するときに、AIが評価した最も効率が良い団体に寄付することが推奨される。この方法だと、数値化できない価値は反映されず見落とされてしまう可能性もある。あるゴールに一直線で早く到達することだけが正しいわけではなく、ほかの道にも意味があることを忘れてはいけない」と危機感を示した。



学びとは、単なる知識習得ではなく、『自分にとって何が大切か』を探求し、問いを立てるための手段になる



厩本 純一さん

タリン氏も「効率ばかりを考えていると、クリエイティビティが生まれてこない。AIが与えてくれる情報をどう使うかは人間次第なので、人間だからこそその考え方やコミュニケーションの仕方は学び続けなければならない」と応じた。ヴ氏は「AIは解決策を導き出すことはできても、解決すべき課題を自ら設定することはできない。だからこそ学びとは、単なる知識習得ではなく、『自分にとって何が大切か』を探求し、問いを立てるための手段になる」と話した。落合氏はセッションの終盤、「色々な方向に話が散乱しつつ、みんなで和気あいあいと意見交換して楽しかった。このように最後は『楽しい』というのが学びにおいて重要になる。『楽しい』を起点に、AIを活用したり多様な文化に触れたりしていくことが大事だと思う」と締めくくった。



[登壇者]

落合 陽一 (モデレータ) メディアアーティスト

タリン・カラーヌワット Sakana AI株式会社 リサーチ科学者

厩本 純一 東京大学・ソニー・コンピュータサイエンス研究所

美馬 のゆり 学習科学者、学習環境デザイナー、公立はこだて未来大学・教授

ヴァン・ティン・ホン・ヴ Elsa Corp 共同創設者 & 最高経営責任者

* 本記事は、ボストンコンサルティンググループのウエブサイト「BCG Japan」に掲載されたものの一部を、許諾を得て掲載しています。

学びと遊び ウィーク

学びへの公平なアクセス

主催 2025年日本国際博覧会協会

開催日時 2025年07月28日(月) 13:30 ~ 15:30

開催場所 テーマウィークスタジオ

2025年7月28日に開催されたセッション「学びへの公平なアクセス」では、経済的・社会的背景を問わず質の高い教育への公平なアクセスをテーマに議論が行われた。モデレーター鈴木寛氏のもと、内田由紀子氏、アンドレアス・シュライヒャー氏、クリスティン・チョイ氏、パトリック・ニューエル氏、藤堂栄子氏、星友啓氏、西野真由美氏が登壇。教育格差やAI活用、包摂的教育などが多角的に論じられた。鈴木氏は国際協働と地域支援の必要性を説き、内田氏は「相互依存的ウェルビーイング」に基づく幸福教育を提唱。シュライヒャー氏は創造性や批判的思考の育成を重視し、チョイ氏は香港の個別支援策を紹介した。後半では、ニューエル氏が「AI=愛」の視点で人間性と技術の融合を語り、藤堂氏はAI教材による学習支援、星氏はオンライン教育の課題と自律学習支援、西野氏は生活力教育の重要性を指摘。結論として、テクノロジーと人間性の調和が未来の公平な教育の鍵とされた。



[登壇者]

鈴木 寛 (モデレータ) 東京大学教授 慶応義塾大学特任教授 前文部科学大臣補佐官

パトリック・ニューエル (モデレータ) TEDxTokyo 共同設立者、大学院大学至善館 教授、社会起業家

内田 由紀子 京都大学 人と社会の未来研究院 院長・教授

アンドレアス・シュライヒャー OECD Education and Skillsディレクター

クリスティン・チョイ博士 香港特別行政区政府教育長官

藤堂 栄子 認定NPO法人エッジ 会長

星 友啓 Stanfordオンライン高校校長、哲学博士、Education; EdTechコンサルタント

西野 真由美 東京家政大学・教授

学びと遊び ウィーク

多様な個性を活かす学び・遊び

主催 2025年日本国際博覧会協会

開催日時 2025年07月28日(月) 17:00 ~ 19:30

開催場所 テーマウィークスタジオ

2025年7月28日に開催されたセッション「多様な個性を活かす学び・遊び」では、教育・福祉・文化・テクノロジー分野の専門家が、多様性を軸とした未来の学びについて議論が行われた。中島さち子氏は、誰もが参加できるアート拠点「クラゲ館」の実践を紹介し、STEAM教育や「弱さを価値に変える」発想の重要性を提唱。自見はなこ氏は、子ども家庭庁設立の背景と課題を説明し、切れ目のない子育て支援と「子どもは0歳から120歳」という包括的視点を訴えた。福島智氏は、盲ろう者としての体験から、豊かなコミュニケーションこそ包摂の核であると強調。合田哲雄氏は、多様性と質を両立させる教育改革の方向性を示した。国際登壇者からは、ナセル氏がSDGsと教育の連携を、シリセナ氏が地域に根ざしたSTEAM教育を、リーバーマン氏がアートとテクノロジーの融合を、キム氏がユネスコの包摂的教育モデルを紹介。議論の総括として、制度・現場・文化が連携し、多様な個性が輝く社会の構築が未来の教育の鍵であると確認された。



[登壇者]

中島 さち子 (モデレータ) テーマ事業「いのちを高める」(2025年日本国際博覧会協会)

自見 はなこ 前内閣府特命担当大臣・参議院議員・医師

福島 智 東京大学先端科学技術研究センター 学際バリアフリー研究分野 特任教授

合田 哲雄 文化庁次長

マーヘル・ナセル 国際連合事務次長補兼国連パビリオン陳列区域代表

アヌスラ・シリセナ Tenom Innovation Center (TIC) 会長

ザック・リーバーマン アーティスト、MITメディアラボ教授

ソヒョン・キム ユネスコ・バンコク地域事務所及びアジア太平洋地域の国連調整事務所地域ディレクター

平和と人権 ウィーク

平和の構築・実現



主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年08月12日(火) 13:30 ~ 15:30
開催場所 テーマウィークスタジオ

今年は広島と長崎への原子爆弾投下、そして終戦から80年の節目にあたる。依然として世界で紛争や人種差別が絶えないなか、8月12日には「平和と人権」をテーマに3つのトークセッションが開かれた。そのなかから、「平和の構築・実現」を議題に行われたセッションの様子をレポートする。

パネリストとして登壇したのは、シリアから難民としてカナダに移住し「ピース・バイ・チョコレート」社を経営するタレク・ハドハド氏、アフガニスタンで女子教育を推進する非営利組織「LEARN Afghan」設立者のバシュタナ・ドラニ氏、国際協力機構（JICA）で平和構築を担う大井綾子氏、東京藝術大学学長の日比野克彦氏の4人。慶應義塾大学大学院教授の蟹江憲史氏がモデレーターを務め、それぞれの「平和」への考えを紹介しながら、持続可能な平和や人権の実現への道筋について意見を交わした。

シリア難民が経験から語る「相互理解」と平和構築のカギ

蟹江氏はまず、国境を越えた平和構築の共通基盤として「相互理解」を挙げた。相互理解を深めていくためにはどうしたらよいかと問いかけた。

ハドハド氏は、「相互理解とは、平和を全ての人類にとっての基本的な権利と考えた時に理解することができる」と語り始めた。ハドハド氏の家族はシリアでチョコレート工場を営んでいたが、内戦の激化により工場も家も失い難民となる。隣国レバノ

ンでの避難生活を経て、シリア難民を受け入れているカナダへ移住し、「ピース・バイ・チョコレート」社を創業した。世界中の平和構築プロジェクトに資金を提供する団体「Peace On Earth Society」を設立し、同社の売り上げの一定額を団体に寄付するなど、チョコレートを通じて平和を広めることを目指している。



タレク・ハドハドさん

「カナダは1つの場所に国連があるようだ」とハドハド氏は表現する。「私の住む町は5,000人ほどの小さなコミュニティだが、26の異なる言語が話されている。私たちは違いはあっても、似た部分を理解する力をもって生まれている。平和は誰もが生まれながらに持っているもので、分断や憎悪は後から教え込まれたものだ。それを手放すことが必要だ」と語った。

続いて、なぜカナダでは相互理解が可能なのかと

いう蟹江氏の質問に対し、「カナダには、多様性を大切に、世界中の人たちを歓迎する理念がある。カナダに来て傾聴という言葉を学んだ。私たちは困難に直面している人々の声にもっと耳を傾けるべきだ」と強調した。

気候変動を“共通の敵”ととらえて戦う

大井氏は現在、JICAで紛争地域の平和構築や政府開発援助（ODA）に従事している。蟹江氏とは事前に「もし大きな敵が外にいるならば、それに対抗するために互いに協力して戦うことができるのでは」と話していたという。

大井氏は「それには共通の利害が必要だ」と指摘し、気候変動を“共通の敵”と例えた。「6月にケニアにいたが、資源や水が足りなかったり、家を失ったりする人々を見てきた。ケニア、ウガンダ、南スーダンといった近隣諸国が共同して対応の枠組みを作っていくと立ち上がっている。このような枠組みを国際社会の中で拡大していくことができれば、すべての国が共通の敵に立ち向かうことができるのではないかと述べた。



大井 綾子 さん

「共通性を見出す」という観点からドラニ氏は、長年続く日本とアフガニスタンの関係を例に挙げた。ドラニ氏は、内戦とタリバンから逃れるためにアフガニスタンを離れ難民となり、パキスタンの難民キャンプで育った。セッションの冒頭ではアフガニスタンにおける平和について、「暴力がない状態だけではなく、水や教育、尊厳、そして未来があるということの意味する」と語った。

ドラニ氏は「日本はアフガニスタンをサポートする相手ではなく、再発展を共に進めるパートナーとし

て見ている。日本からの支援は90年代以降から人道支援や、農業、資源など、多くの分野にわたる。大切なのは他国を助けるだけではなく、その国の人の話をよく聞いて、すべての国を対等なパートナーとして扱うこと。日本はその好例」と考えを示した。大井氏もこれに同意し、「JICAも各国とパートナーとして協力している。その国における問題について一番よく知っているのは国民。何を實現したいのかは、その国の人々から発せられなければいけない」と付け加えた。



バシュタナ・ドラニ さん

人権と多様性をアートから考える

日比野氏は東京藝術大学に在学中から作家活動を始め、社会メディアとアート活動を融合する表現領域の拡大で注目を集めてきた。現在は母校である東京藝術大学の学長を務めながら「アートは生きる力」をテーマに研究、実践を続けている。冒頭では自身が考える平和と人権について、100人が同じりんごを描くと100通りの絵ができあがると例を挙げた。「一人ひとりの特性を認め合うことができるのがアートの特性であり、この特性が平和と人権を考えたときの社会基盤を築いていく可能性がある」とヒントを提示した。

蟹江氏が「人間は性善説に則って共通項を見出したり、人に親切にしたりするという意見がタレクさんなどからあった。人間の特徴をどう捉えるか」と問いかけると、日比野氏はアートを例に、時代とともに変化する人間の価値観を説明した。

「現在の私たち80億人は、過去100年の歴史や価値観を背負って生きている。AIの登場などにより価値観は今後さらに変化していくなかで、平和の描き方も変えていかなくてはならない。たとえば60色の





世の中のパワーバランスにとらわれるのではなく、常に異なる要素を取り込んでいくことが必要。新しい色が加わったときにどう受け入れるか、その寛容さが多様性につながる

絵の具があっても、1回もチューブを空けていない色がある一方、使い慣れた色はどんどん減っていく。使ったことがない色を試すと、しまった、と思う時もあるが、これまで描いたことがない絵が生まれることもある。慣れた方法を変えるのは勇気が要るが、新しい自分を発見しようと挑戦しなければ、世の中全体も変わっていかない。新しい価値を生み出すことが重要だ」と述べた。



日比野 克彦 さん

蟹江氏も、「世の中のパワーバランスにとらわれるのではなく、常に異なる要素を取り込んでいくことが必要。新しい色が加わったときにどう受け入れるか、その寛容さが多様性につながる」と応じた。

アフガンの女子教育に学ぶ若者の役割

ディスカッションの最後に会場からは、平和構築に若者や日本の企業はどのように参加できるかという質問が寄せられた。ドラニ氏は若者の役割について、自身が設立した「LEARN Afghan」の活動を例に答えた。タリバン政権下で女子の6年生以降の教育が禁止され、女性の就労も制限されているなかで、少女たちがタリバンの目を逃れて質の高い教育を受けられる「秘密の学校」を運営している。

「父親に2,000ドルを借りてLEARNを立ち上げた。リスクも大きかったが、教育へのアクセスを保障することはすべての子どもにとって不可欠という信念があった。1つの学校と、5台のタブレットだけで始めたが、現在はラジオを通じて600万人が勉強している。対面での教育も、7年生から12年生までの1,400人ほどの女子を対象に、14の地区で支援している。若者が信頼を得るのは容易ではないが、教育の権利を地域の価値として再建する必要があると訴え、理解を得ることができた。尊敬を基盤に

した価値を築くことが重要だ」と語った。

続いて大井氏は、日本企業が平和構築にどう関与できるかについて、「経済活動が社会をより平和に導く」と強調した。「経済的活動は雇用と所得を生み出す。アフリカ西部では若者が仕事をもらえず、他に生計を立てる術もなく過激派組織に加わることで暴力が広がり、地域の不安定化が進んでいる。民間企業が雇用を創出し、所得を生み出すことは極めて大切だ」と述べた。



蟹江 憲史 さん

蟹江氏は最後に「異なる価値観を持つ人々が多様なアイデアを共有できた意義ある対話だった。これからも、さまざまな絵の具を試してみましょう」と議論を締めくくった。



[登壇者]

蟹江 憲史 (モデレータ) 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、慶應義塾大学SFC研究所 xSDG・ラボ代表
タレク・ハドハド Peace by Chocolate創設者兼CEO
バシュタナ・ドラニ LEARN Afghan エグゼクティブディレクター
大井 綾子 独立行政法人国際協力機構 ガバナンス・平和構築部 平和構築室 室長
日比野 克彦 東京藝術大学・学長

*本記事は、ポストンコンサルティンググループのウェブサイト「BCG Japan」に掲載されたものの一部を、許諾を得て掲載しています。

平和と人権 ウィーク

人権の尊重・保障

主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年08月12日(火) 10:00 ~ 12:00
開催場所 テーマウィークスタジオ

2025年8月12日に開催されたセッション「人権の尊重・保障」では、戦争・差別・技術の脅威など現代社会の課題に対し、人間の尊厳を守るための道が議論された。全体を通じて「平和は制度ではなく尊厳と人権の保障に根ざすべき」との認識を共有。被爆者の金本弘氏は自身と姉の体験を通じ、核兵器を「絶対悪」と断言し、記憶の継承と行動を訴えた。中満泉氏は「平和・人間の安全保障・尊厳」の三柱を提示し、新技術の軍事利用に倫理的枠組みが必要と強調。近藤紘子氏は被爆体験から和解と共生の重要性を語り、芸術による記憶継承を紹介。西前拓氏は映像による証言記録の意義を述べ、「忘却は暴力の再生産」と警告した。ヴェリコ氏とエルマン氏は信頼の再構築と若者・女性の役割を強調。リチャード氏はAI兵器など新技術の人権リスクを指摘し、国際的規制を提唱。議論の結論は「記憶・信頼・対話」が人権と平和の基盤であり、市民一人ひとりの行動が未来を形づくるという点で一致した。



[登壇者]

中満 泉 (モデレータ) 国連事務次長・軍縮担当上級代表
金本 弘 日本被団協代表理事、愛知県原水爆被災者の会理事長
近藤 紘子 What Divides Us / エグゼクティブ プロデューサー
西前 拓 1FUTURE 共同代表
シンシア・ヴェリコ 国連人権高等弁務官事務所東南アジア事務所地域代表
イルワード・エルマン エルマンピースセンター
ユリス・リチャード 国連軍縮局 (UNODA) コンサルタント

平和と人権 ウィーク

労働市場における格差是正

主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年08月12日(火) 17:00 ~ 19:00
開催場所 テーマウィークスタジオ

2025年8月12日に開催されたセッション「労働市場における格差是正」では、グローバル化・デジタル化の進展やパンデミック後の社会変化の中で拡大する雇用格差をいかに是正し、持続可能で包摂的な社会を築くかが議論された。白波瀬佐和子氏は、不平等の是正は人権保障と社会正義の核心であり、企業は利益追求に偏らず人権尊重を経営の基盤に据える責任があると指摘。山田美和氏は、国連「ビジネスと人権に関する指導原則」に基づき、企業の人権デューデリジェンスや賃金格差の開示が重要と述べた。楠田倫子氏は、ロレアルのDE&I推進やインクルーシブ調達を紹介し、企業文化の変革が格差是正の鍵と説明。サビーナ・アルキレ氏は「多次元貧困指数 (MPI)」を用い、貧困の構造的要因に焦点を当てる必要性を示した。ナリタ・ナジリー氏は、メイバンクでの金融包摂とデジタル平等化の実践を紹介。フェリベ・ポーリエ氏は、若者を「変革の主体」と位置づけ、教育と雇用を結び政策の必要性を訴えた。総じて、国家・企業・市民社会・若者が協働する構造的変革が不可欠との認識で一致した。



[登壇者]

白波瀬 佐和子 (モデレータ) 国際連合大学 上級副学長、国際連合 事務次長補
山田 美和 独立行政法人日本貿易振興機構 (JETRO) アジア経済研究所新領域研究センター 上席主任調査研究員
楠田 倫子 日本ロレアル(株) ヴァイスプレジデント コーポレートレスポンスビリティ本部 本部長
サビーナ・アルキレ オックスフォード大学 貧困と人間開発イニシアチブ
ナリタ・ナジリー メイバンク・グループ・ヒューマンキャピタル副社長、マレーシアピープルエクスペリエンス&デジタルアドバンストメントの責任者、ヒューマンキャピタルディレクター(グループオペレーション担当)
フェリベ・ポーリエ 国連ユース担当事務次長補



地球の未来と生物多様性 ウィーク

気候変動への対応



主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年09月19日(金) 17:00 ~ 19:00
開催場所 テーマウィークスタジオ

大阪が猛暑日を記録したこの日、大阪・夢洲(ゆめしま)の会場に多様な分野の気候変動の専門家が集った。国際協力機構(JICA)から現在2027年国際園芸博覧会協会に出向中の見宮美早氏、三菱UFJフィナンシャル・グループのChief Regulatory Engagement Officer、石川知弘氏、サリー・ビューティー・ホールディングス取締役のレイチェル・R:ピショップ氏、ポスト石油戦略研究所所長の大場紀章氏、そしてハーバード・ケネディスクールの国際政治経済学実践教授 リカルド・ハウスマン氏(オンライン)が参加した。モデレーターはBCG シドニー・オフィスのパートナー&アソシエイト・ディレクター、ゲイツ・モスが務めた。

「一石二鳥」を狙える多彩な解決策

気候変動への対応は、いうまでもなく地球規模の巨大で複雑な課題だ。だが、モスはここではその脅威ではなく、パネリスト一人ひとりが自身の専門分野の視点で貢献できる実際の「手頃な」解決策について話そうと投げかけた。気候変動対策ではスピードとコストが重要であり、優先的に進めるべきは炭素削減の効果に対して低コストで実行できる施策である。

モスが紹介したのは自然が持つCO2吸収源としての力を活用する「自然ベースのソリューション」。続いて、交通や都市開発などの開発課題を解決するプロジェクトに気候変動への対応策を盛り込むJICAの「コベネフィット・アプローチ」(見宮氏)、堆肥化可能なプラスチックを使った低価格な消費者向け製品(ピショップ氏)、顧客企業のエネルギー転換(脱炭素移行)を財務面を含め支援する銀行の活動(石川氏)が次々と紹介さ

れた。オンラインで参加したハウスマン教授は途上国が希少資源を活用してエネルギー転換を新たな産業化の機会に変えるというアイデアを発表した。いずれも気候変動への対応を現実的に進めながら、それを自国や地域社会、人々にとっての利益につなげる一石二鳥、三鳥を狙える国家レベルでのアプローチだ。



ゲイツ・モス さん

身近な活動を変えることで成果が得られるソリューションとして会場の注目を集めたのが、エネルギー関連の技術に詳しい大場氏が紹介した米作における「間断かん水」だった。間断かん水は「田んぼを時々乾かす」水管理方法で、日本では「中干し(なかぼし)」と呼ばれる。土に酸素が入ることでメタンを生成する菌が減り、メタン排出をおよそ半減させられる。水の使用量も半分にできるうえ、稲の収量には影響がないという。この手法を活用したメタンクレジットの創出に、いま日本のエネルギー事業者が取り組んでいる。

「ベトナムやフィリピンなど東南アジアの水田でこの方

法を広げれば、水田由来のメタン削減だけで日本の石油産業全体の排出量に匹敵する効果が期待できる」と大場氏は語る。実際、現地ではすでにプロジェクトが始まり、日本のセンサー技術が導入されている。「田んぼの水位は目視での確認が難しい。センサーで状況を測定し、現地の農家にデータを共有する仕組みを構築している。日本の技術とマネジメントが、現場での実践を支えている」と大場氏。地味に見える取り組みだが、確実に成果を上げ、国境を越えて温室効果ガス削減に貢献している例だ。



大場 紀章 さん

鍵を握るのは消費者一人ひとり

経済性を備えた「手頃な」施策が数多くある一方、気候変動対策には巨額の資金が必要とされている。2021年の国連の報告書で温暖化対策に必要な年間投資額として8兆ドルという額が示された。世界の人口で割ると一人当たり1000ドル(約15万円)となる。パリ協定では資金の流れを排出削減に向けた流れと整合させることが合意されたが[1]「誰がコストを負担するのか、誰が支払うのかはそこには書かれていない」と石川氏は指摘する。

民間金融はその一翼を担うことを求められているが、石川氏は「問題は資金供給能力ではない。需要が先に生まれなければならない」と語った。技術を持つ企業はいつ大規模投資に踏み切るべきかを考えている。しかし、グリーンスチールやグリーンセメントなどの技術があっても、消費者の需要が確実でない限り、数十億ドル規模の投資はできないという。先の8兆ドルという金額に対し、世界の預金総額は100兆ドルだ。消費者のグリーン需要がグリーンな設備投資を生み、その設備投資が融資需要を生むことで、銀行は融資できるようになる。

しかし、消費者を動かすのは容易ではない。消費者向け産業で長くビジネスリーダーを務めてきたレイチェル・R:ピショップ氏は、気まぐれな消費者とうまく付き合い、ど

う協働できるかを考えることが、気候変動目標の達成に向けて極めて重要だと語る。



レイチェル・R:ピショップ さん

「消費者が望む商品は、グリーンでエコフレンドリー、リサイクル可能で、できれば堆肥化できるもの。しかし条件を満たした商品に多くの消費者が支払ってもいいと思う上乗せ金額はせいぜい10%増まで。それをどうやって実現するかを考えなければならない」と同氏は訴えた。

一方、大場氏は「気候変動に関心を持ってもらうには『おもしろさ』も必要。専門的な話だけでは一般の人はいってこれない。『やってみよう』『おもしろそう』と思えるきっかけづくりも大事だ」と消費者の好奇心や興味を引くことの重要性に触れた。

「誰が、どれだけ負担するのか」を超えて

参加者からの最初の質問は、「先進国の累積CO2排出とその責任について、どう考えるか」というものだった。石川氏によると、パリ協定では「共通だが差異ある責任(CBDR)」という考えが示され、先進国は途上国より大きな責任を持つが、それが10倍なのか5倍なのかは合意はされていない。同氏は、実際に誰が資金を出し、どう資金フローを作り、パリ協定の合意を現実の行動につなげられるのかは、「まだ解決していない課題であり、結局は私たち一人ひとりが責任を持たない限り、前には進まない」と語った。

見宮氏は、気候変動による人命の被害は途上国の方が甚大で、被害の質が異なること、さらに、助成金の確保は難しく、政府なのか民間なのかという問題を越え、結局は「誰が、どれだけ負担するのか」という国民全体の問題になると言う。

会場からも、途上国への支援につき「必要性は理解していても、国民的な合意形成が難しい。どうすればコンセンサスが得られるのか」という問題提起があった。見宮





『善をなして、同時に得もする』仕組みこそが最も成功する

氏は、「知らなければ考えることもできない」、つまり世界に関心を持つことが第一歩であること、また、身近な製品を通して世界はつながっていることを知ってほしいと語った。さらに、アフリカ諸国との関係は「一方的な援助」ではなく国ごとの開発段階に応じて「パートナーシップ」を築き一緒に移行を進める姿勢が重要だと示した。



見宮 美早さん

今、一人ひとりに何ができるか

「いくら抛出するか」「誰が責任を持つか」という議論に終わりはしない。国や企業、消費者が足並みをそろえてエネルギートランジションに踏み出すには何が必要なのか。

ラグビー日本代表の赤白ボーダーのポロシャツ姿で登壇していた石川氏は、「私たちがスーツやネクタイを着て、強いエアコンの効いた部屋にいるのはおかしい」としたうえで、「今日・明日から自分たちにできる行動を取ること。私たち自身の行動や文化を変えることも、技術や金融の議論と同じくらい大切だ」と訴えた。



石川 知弘さん

ビショップ氏は、人を動かすのは、具体的な利益や価値だと示す。先進国こそ気候変動によって失う資産が大きいが、人間にとって「失うリスク」は行動のきっかけにはなりにくい。保険に入るのを後回しにするのと同じだ。同氏

は「具体的な利益や価値が見えれば人は動く。炭素削減だけでなく、生活やビジネスに利益をもたらすプログラム——『善をなして、同時に得もする』仕組みこそが最も成功する」と強調した。



リカルド・ハウスマンさん (画面出演)

行動を促すべきは、先進国の消費者だけではない。ハウスマン教授は、途上国に「排出せずに開発せよ」と言っても人々の心は動かない、と指摘する。「世界の脱炭素にはあなた方の資源、労働力、創造力が必要だ、と伝えれば、彼らも気候変動対策を自分たちの成長や需要拡大につながるものとして積極的に取り組むようになる」

モスは、「国も企業も個人も状況は異なるが、どの立場にもこの課題に貢献できるチャンスがあり、同時に恩恵を受ける可能性がある。生態系の健康、自らの健康、気候変動対策による投資や雇用の創出——すべてはつながっている」と締めくくった。

[1] パリ協定 2条第1項 (c) Making finance flows consistent with a pathway towards low greenhouse gas emissions and climate-resilient development. (「資金の流れを、温室効果ガスの排出の少ない及び気候に強靱な開発への道筋と整合的なものとする」外務省「パリ協定(仮訳)」/環境省「パリ協定に関する資料」)

[登壇者]

ゲイツ・モス (モデレータ) ポストン・コンサルティング・グループ (BCG) パートナー

石川 知弘 三菱UFJフィナンシャル・グループ Chief Regulatory Engagement Officer

大場 紀章 合同会社ポスト石油戦略研究所 代表

リカルド・ハウスマン ハーバード大学グロース・ラボの創設者兼所長、ハーバード・ケネディスクール国際政治実践経済学ラフィック・ハリリ教授

見宮 美早 Green Expo協会 (2027年国際園芸博覧会協会)、サステナビリティ推進部長・兼・企画調整部部長 (レガシー・アクセシビリティ担当)・兼・国際部部長 (参加国支援担当)

レイチェル・R: ビショップ サリー・ビューティー・ホールディングス取締役、レイノルズ・コンシューマー・プロダクツの元社長

地球の未来と生物多様性 ウィーク

自然資本の維持

主催 2025年日本国際博覧会協会

開催日時 2025年09月19日(金) 10:00 ~ 12:00

開催場所 テーマウィークスタジオ

2025年9月19日に開催されたセッション「自然資本の維持」では、自然資本の維持を軸に、科学・政策・企業・市民社会が協働する必要性が共有された。高村氏は、生態系サービスの急速な劣化とネイチャーポジティブ実現の重要性を強調し、TNFDを通じた企業の責務を提示。ルゾンカ氏は、コスモエネルギーの森里海再生活動や再生可能エネルギー導入を紹介し、地域との共創の価値を示した。溝内氏は、荒地の再生や再生型農業支援を例に、自然資本への投資が地域経済の再生にも資することを説明。ヘルナンデス氏は、国際的な生物多様性危機の現状と枠組みの意義を述べ、科学と政策の統合を訴えた。デュ・トワ氏は、企業が自然関連リスクを戦略に組み込み、国際枠組みを活用してサプライチェーン全体で変革を進める必要性を指摘。討論では、協働、透明性、技術活用が未来への鍵であるとの認識が共有された。



[登壇者]

高村 ゆかり (モデレータ) 東京大学未来ビジョン研究センター
ルゾンカ 典子 コスモエネルギーホールディングス株式会社 常務執行役員 CDO COSMOエコ基金理事長
溝内 良輔 キリンホールディングス(株)アドバイザー
アナ・マリア・ヘルナンデス・サルガー 国際コンサルタント
ヤコ・デュ・トワ WWFスウェーデン 生物多様性・政策マネージャー コーポレートパートナーシップ・ファイナンス部

地球の未来と生物多様性 ウィーク

循環経済の実現

主催 2025年日本国際博覧会協会

開催日時 2025年09月19日(金) 13:30 ~ 15:30

開催場所 テーマウィークスタジオ

2025年9月19日に開催されたセッション「循環経済の実現」では、循環経済の理論と実践事例を通じ、持続可能な経済社会の構築に向けた多角的な議論が行われた。中井徳太郎氏は、従来型の大量生産・消費モデルの限界を指摘し、循環経済を経済そのものの変革と捉える必要性を強調。ケイト・ラワース氏は「ドーナツ経済学」を提示し、環境の上限と人間社会の基礎的ニーズを守る経済モデルの重要性を説いた。波戸本尚氏は日本の政策と地域実践の連携、太田昇氏は真庭市の木材資源循環事例、古賀沙織氏は企業による使用済み製品の再資源化、ラウル・バシン氏はインドでの制度・金融支援、ヴィーナ・サハジワラ氏は分散型技術と地域連携の重要性を紹介。ディスカッションでは、制度設計・金融支援・地域実践・技術革新・教育・国際協力など多層的な行動指針が確認され、循環経済は単なる環境政策ではなく、社会全体の持続可能性を高める未来投資であるとの共通認識が共有された。



[登壇者]

中井 徳太郎 (モデレータ) 日本製鉄株式会社顧問、元環境事務次官、公益財団法人三千年の未来会議代表理事
太田 昇 岡山県真庭市長
ヴィーナ・サハジワラ ニューサウスウェールズ大学 サステナブル材料研究技術センター サイエントピア教授
ラウル・バシン Baring Private Equity Partners India Pvt. Ltd マネージングパートナー
古賀 沙織 三菱マテリアル株式会社 金属事業カンパニー 資源循環事業部 事業開発部 企画室 室長 技術士(資源工学)
ケイト・ラワース Doughnut Economics Action Lab 共同創設者、著者
波戸本 尚 環境省大臣官房会計課長

SDGs+Beyond いのち輝く未来社会 ウィーク

「いのち輝く未来社会」のデザインに向けた提言



主催 2025年日本国際博覧会協会
開催日時 2025年10月12日(日) 16:30 ~ 18:00
開催場所 テーマウィークスタジオ

最終セッションのテーマは「SDGs+Beyond:いのち輝く未来社会」。2030年のSDGs最終目標年を前に、人類が直面する課題を振り返り、「2030年以降の未来社会をどうデザインするか」を考える場として、『「いのち輝く未来社会」のデザインに向けた提言』というパネルディスカッションが行われた。

慶應義塾大学大学院教授の蟹江憲史氏がモデレーターを務め、国連経済社会担当事務次長の李軍華氏、国連ジュネーブ本部Beyond Lab ディレクター兼チーフキュレーターのアヤドガン氏、2020年開催のドバイ万博副会長のタレク・オリベイラ・シャヤ氏、慶應義塾大学教授で大阪・関西万博テーマ事業プロデューサーの宮田裕章氏、大阪大学社会ソリューションイニシアティブ特任研究員の佐久間洋司氏、BCGのシンクタンク、BCGヘンダーソン研究所(BHI)の日本リーダーの荻田修の6人が登壇した。

SDGsの進捗と、いま直面する「転換点」

セッションの冒頭で李氏は、最新の「SDGs報告書2025年版」から「SDGsのターゲットのうち、順調に進んでいるのはわずか35%。約半数は停滞し、18%は後退している」という厳しい現状を示した。気候変動、紛争、格差拡大といった複合的な危機が、世界の進歩を妨げていると指摘しながらも、李氏は「日本や世界各地で、市民・企業・行政が協働し、新しい解決策を生み出している。希

望はそこにある」と述べた。

モデレーターの蟹江氏は、李氏の発言を受け、「グローバルな課題はローカルな実践によってしか解決できない」とし、自治体や企業、市民の協働の重要性を訴えた。



蟹江 憲史 さん

「文化」が社会にもたらす意義

その後、アジェンダ2025主催プログラムの企画統括者であるBCGの荻田が、これまでの127人の登壇者による24のプログラムを振り返り、「文化」「共感」「連帯」「共創」という4つのキーワードを提示した。「社会を変えるのは制度ではなく文化である」と語り、人と人が文化を通じてつながるときにこそ真の変革が生まれると強調した。蟹江氏は、「多くの方はSDGsに文化が含まれていないと考えがちだが、文化こそが社会を動かす手段

であり、共感を生む装置だ」と述べ、荻田の意見に賛同した。慶應義塾大学教授の宮田氏は貧困の解消を目指して食料を与えるだけでは十分ではなく、人々が自ら働き、生きる意欲を持てるように支えることこそが重要であると述べた。そのうえで、医療や健康、そしてウェルビーイングをSDGsの目標に組み合わせることの意義を伝え、「病気を治すことだけでなく、自然で健康的な暮らしを支え、そこから幸福を生み出すことが、真のウェルビーイングにつながる」と語った。



荻田 修 さん



宮田 裕章 さん

未来は待つものではなく、選び・創るもの

大阪大学の佐久間氏は、世界20か国以上から集まった120人を超える若者たちとともに未来を構想した経験を振り返りながら、「未来は待つものではなく、選び・創るもの」と強調。AIなどの先端技術を活用した平和構築のアイデアを紹介しつつ、「革新的な発想であっても、世界全体で共有し実現することの難しさも痛感した」と語った。続けて、「違いを起点に共通点を見出す」ことの重要性に触れ、「同質化ではなく、違いから出発すること。その違いこそがイノベーションの源泉だ」と述べた。



佐久間 洋司 さん

2020年開催のドバイ万博副会長のシャヤ氏は、「速く行きたければ一人でいけ。遠くへ行きたければ仲間と行け」というアフリカのことわざを引用し、現代はスピードと連帯の両立が求められる時代だと語った。また、「すべての国が同じペースでSDGsを達成することはできない」とした上で、目標ごとのタイムライン設計と、加速をもたらす技術導入の重要性を指摘した。



タレク・オリベイラ・シャヤ博士

2030年に向けた3つのS

国連ジュネーブ本部Beyond Labのアヤドガン氏は、「これからの社会はウェルビーイングを中心に再設計すべきだ」と語った。そして、「経済の枠組みそのものを見直す時期に来ている」と続けた。これまでの社会は成長やGDPなどの数字に偏りすぎていたが、これからは人や自然を含めた本当の豊かさをどう測るかが問われるという。アヤドガン氏は、「未来をつくる責任は誰か一部の人ではなく、私たち全員にある」と主張。国や企業だけでなく、市民や地域社会も含めて、それぞれがウェルビーイングを基軸にした社会をどう築くかを考えることの重要性を説いた。





未来をつくる責任は誰か一部の人ではなく、私たち全員にある



オズゲ・アヤドガン さん

セッションの最後では、李氏が「Share (共有)、Shape (形成)、Shine (輝き)」の三原則を提唱した。これは知識や経験を共有し (Share)、多様な主体が協働して社会を形成し (Shape)、その成果が人々の幸福として輝く (Shine) という行動指針である。李氏は「大阪・関西から発せられたこの理念は、分断の時代における希望の光であり、世界が共に歩む羅針盤となる」と締めくくり、聴衆の大きな拍手を受けた。



李軍華 さん



[登壇者]

登壇者
登壇者 (モデレータ) 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授、同大学Keio STAR (Sustainable and Transformative Actions for Regeneration)、副所長、SFC研究所xSDG・ラボ代表

李軍華 国連経済社会担当事務次長

苺田 修 ポストン コンサルティング グループ マネージング・ディレクター&シニア・パートナー

オズゲ・アヤドガン Beyond Lab ディレクター兼チーフキュレーター
タレク・オリベイラ・シャヤ博士 Gratiya Advisory創設者、マネージングディレクター、前2020ドバイ万博副会長

宮田 裕章 慶應義塾大学教授

佐久間 洋司 大阪大学社会ソリューションイニシアティブ 特任研究員、シェイプニューワールドイニシアティブ 代表

* 本記事は、ポストンコンサルティンググループのウェブサイトに「BCG Japan」に掲載されたものの一부를、許諾を得て掲載しています。

SDGs+Beyond いのち輝く未来社会 ウィーク

8人のテーマ事業プロデューサーと考える「いのち」とSDGs+Beyond



主催 2025年日本国際博覧会協会
 開催日時 2025年10月12日(日) 13:30 ~ 15:00
 開催場所 テーマウィークスタジオ

本セッションでは、8名のテーマ事業プロデューサーが集い、大阪・関西万博が提示した「いのち輝く未来社会」を多様な角度から総括した。宮田氏は、万博が答えを示す場から「問いを共有する場」へと転換した意義を述べ、複数の未来像“Futures”を提示。福岡氏は生命を「共生と利他の連鎖」と捉え、動的平衡の視点から社会の循環性を強調した。河森氏は、生命を“合体変形の連鎖反応”として体感する展示の意図を語り、人間中心主義を超えた視点を提示。河瀬氏は、境界を越える対話の実験を通じ、「いのちの再創造」を未来へ継ぐ重要性を強調した。小山氏は食を通じた感謝と倫理を提起し、「いただきます」が共生の文化を育むと説明。石黒氏はテクノロジーと人間の関係を再定義し、AIを“自己理解の鏡”と捉える視座を示した。中島氏は創造性の民主化を掲げ、多様な存在が共に協奏する場としてクラゲ館を構想。落合氏は「記憶を宿す素材」の価値から、物質と体験の循環というBeyondの理念を語った。総じて本セッションは、SDGsを超えた新たな価値観——文化・対話・創造性・循環——が未来社会を形づくるとの認識を共有した。



[登壇者]

宮田 裕章 慶應義塾大学教授
石黒 浩 大阪大学教授、ATR 石黒浩特別研究所客員所長
中島 さち子 音楽家、数学研究者、STEAM 教育家
落合 陽一 メディアアーティスト
福岡 伸一 生物学者、青山学院大学教授
河森 正治 アニメーション監督、メカニックデザイナー、ビジョンクリエイター
小山 薫堂 放送作家、京都芸術大学副学長
河瀬 直美 映画作家

SDGs+Beyond いのち輝く未来社会 ウィーク

新たな時代の万博とテーマウィーク



主催 2025年日本国際博覧会協会
 開催日時 2025年10月12日(日) 19:15 ~ 20:45
 開催場所 テーマウィークスタジオ

2025年10月12日に開催されたセッション「新たな時代の万博とテーマウィーク」では、SDGs+Beyondいのち輝く未来社会ウィークの締めくくりとして、万博が次代に果たす役割を総括した。石川氏は、テーマウィークが大阪・関西万博の「共創の基盤」であり、展示・対話・ビジネス連携を結ぶレガシー形成装置であると位置づけた。ピーターズ氏は、多様性と包摂を軸に、テーマウィークが各国に「共通言語」をもたらし、万博を競争から協働へと転換させた意義を強調。サンボド氏は、インドネシアの国家ビジョンと連動した実践が大規模な投資や環境協力を生み、「行動の触媒」として機能したと述べた。シャヤ博士は、ドバイから大阪、リヤドへと続くテーマウィークの継承を“地球規模の対話装置”と捉え、その発展を提案。橋爪氏は、万博を未来社会の実験場と位置づけ、テーマウィークが国際協働の知的インフラとして成熟したと総括した。全体として、万博は展示の場から共創と実践のプラットフォームへと進化し、新時代の万博モデルを提示した。



[登壇者]

石川 勝 (モデレータ) プランナー、プロデューサー、大阪・関西万博 会場運営プロデューサー
ローリー・ピーターズ 大阪関西万博 カナダ政府代表
レオナルド・A.A.テグ・サンボド インドネシア国家開発計画省、Bappenas 副大臣
タレク・オリベイラ・シャヤ博士 Gratiya Advisory創設者、マネージングディレクター、前2020ドバイ万博副会長
橋爪 紳也 大阪府特別顧問、大阪市特別顧問、大阪公立大学研究推進機構特別教授、大阪公立大学観光産業戦略研究所長、公益社団法人商業施設技術団体連合会会長、イベント学会副会長、IR*ゲーミング学会副会長、2025年日本国際博覧会協会テーマウィーク監修・アドバイザー、工学博士

Agenda2025が示す未来社会のデザインとSDGs+Beyond



荻田 修

ボストン コンサルティング グループ マネージング・ディレクター&シニア・パートナー

東京大学経済学部卒業。ノースウェスタン大学ケロッグ校経営学修士(MBA)。BCGヘンダーソン研究所(BHI)フェロー、BHI Japanリーダー。BCGマーケティング・営業・プライシング・プラクティス、ヘルスケア・プラクティス、及び消費財・流通・運輸プラクティスのコアメンバー。

1. 全世界的な視点での検討

「いのち輝く未来社会のデザイン」を理念に掲げた大阪・関西万博は、気候変動・格差・孤独・人口動態の変化といった人類共通の課題を共有し、その解決に向けた方向性を提示する「未来社会の実験場」として位置づけられています。

BCGは、今後の未来社会を考えるにあたり非常に重要な8つのテーマについて、世界の英知を結集して議論し、日本から発信する本取組みの意義に深く賛同し、シンクタンク機能を担うBCGヘンダーソン研究所を軸に、万博プロデューサー、博覧会協会、その他関係者と共にAgenda2025の企画立案・推進における中心的な役割を担わせていただきました。

Agenda2025では、8つのテーマごとにビジョンを設定し、そこにどう到達するのかという問いを立て、現状とのギャップを踏まえた必須要件を特定しました。その要件を基にセッションテーマを設定し、議論シナリオとして課題や主要論点を整理したうえで、各分野の第一人者であるアカデミア、政策立案者、国際機関、企業経営者、NPO代表、アーティスト、作家、シェフ、若者といった多様な方々を巻き込み議論を展開しました。

さらに、世界経済フォーラム年次総会(ダボス会議)やCOP(締約国会議)など最新の国際議論を参照しつつ、グローバルサウスの観点を組み込み、全世界的な視点に基づき検討を進めたこと

が特徴です。個別テーマに特化した国際会議は存在するものの、8つのテーマを横断的かつ包括的に扱い、未来社会の全体像を議論したことは万博ならではの取り組みです。これにより、世界に向けて新たな視点と方向性を提示する場となりました。

2. 討議を通じたキーメッセージとSDGs+Beyond

全8テーマ、24セッションにおいて、多様な新しい切り口、クリエイティブな提案がなされました。その詳細は、別の機会に詳述させていただきますが、テーマ横断で抽出されたキーメッセージを結晶化すると、次のようになります。

「世界の負を解消し、つながりの中で多様な文化とWell-being社会を次世代へ紡ぎ、"いのち輝く"多様な未来を築く」

このメッセージは万博の理念を具体化するとともに、個別テーマに共通する価値観を統合したものです。万博のサブテーマでもある「いのちを救い、力を与え、つなぐ」という営みは、単なる医療や社会基盤の整備を超えた未来社会の在り方を示します。

- ・いのちを救う:個の多様性を尊重し、先端医療へのアクセスと格差なき成長を通じて、シェアードバリューに基づく平和を実現する。
- ・いのちに力を与える:創造性と共感を培い、

自己実現を促し社会とのつながりを広げること、Well-beingと尊厳ある豊かさを達成する。
・いのちをつなぐ:誰もが参加できる共感・共創のコミュニティを築き、多様性と調和し、共鳴する文化を未来の世代へ継承する。

こうした未来を実現する原動力は3つのドライバーにあります。すなわち、未来に向かう心をつくる「包摂と共感」、未来に向かう術をつくる「科学と技術」、そして未来を形づくる「つながりと共創」です。これらは相互に補完し合い、いのちを守り、輝かせ、次世代へと紡いでいく社会デザインを可能にするものです。

またそのプロセスにおいては、未来をまさにそこにいるような感覚で五感で感じながら、未来に向かって何をしたいのかという問いを開くことが、多様な個の答えを引き出し、多元的な未来を形作る出発点となります。

Agenda2025の討議を通じて、SDGs(持続可能な開発目標)では網羅されていない6つの視点が新たに浮かび上がりました。

1. 文化:SDGsでは文化は遺産保護に限定されがちだが、人間の多様な個を尊重したうえで、文化を「動的な営み」として捉え直し、アート・食・暮らし・日常的な実践を通じて社会をつなぐ共鳴の装置として位置付ける。
2. 継承:SDGsが2030年までの行動計画であるのに対し、文化や価値観を紡ぎ直し次世代へ継承する「未来社会を継続するプロセス」を、半永久的な視野で進める。
3. 共感:SDGsのパートナーシップは制度的協力を重きを置くのに対し、人と人の共感や信頼を社会の基盤として、倫理的価値を出発点にした社会デザインを提示する。
4. つながり:SDGsは不平等是正や平和を掲げるが、孤独や断絶への直接的な言及はない。孤独の解消や社会的つながりの質的向上を目標

に設定する。

5. 共創:SDGsは協働を呼びかけるにとどまらず、技術・文化・ビジネス・市民参加を横断する新たな価値創造のプロセスそのものを社会の駆動力として捉える。
6. Well-being:SDGsが主に身体的健康や医療アクセスに焦点を当てているのに対し、孤独の克服、心理的安全性、自己実現、尊厳の保持といった人間の内的充実を含む包括的なWell-beingの必要性を強調する。

これらの視点は、SDGsの枠組みを補完し深化させるものです。とりわけ、経済成長のみにとどまらず、人間の幸福や文化的豊かさを軸に据えることは、国際社会の行動原理を「経済中心から人間中心へ」と進化させる意味を持ちます。経済とWell-beingを両立させるといふ新しい社会のあり方は、今回のAgenda2025から導き出された最も重要な示唆であり、従来の持続可能性の概念を一段深化させるものになります。

3. 未来社会の実装と継承

今回の提言の意義は、理念の提示にとどまらず、すでに次の行動へと接続し始めている点にあります。万博の議論には国連関係者や国際機関も参加し、ネットワーキングなどを通じて国際的枠組みとの連携が進んでいます。討議の成果の一部は政策検討や企業連携、技術実証へ展開されつつあり、今後も拡大が期待されます。

世界は今、気候変動、格差、不安定な国際秩序といった複雑な課題に直面しています。その中で、Well-beingと経済を両立させる未来社会のデザインは、世界の持続可能な発展に資する新たな方向性を示すものです。大阪・関西万博を契機に日本から発信されたこの営みは、国際社会の議論を深化させ、共感と信頼を基盤とする新しい社会像の構築へと直結していくものであり、私たちもその実現に向けて積極的に貢献していく責任を担っています。

SHAPE NEW WORLD INITIATIVE



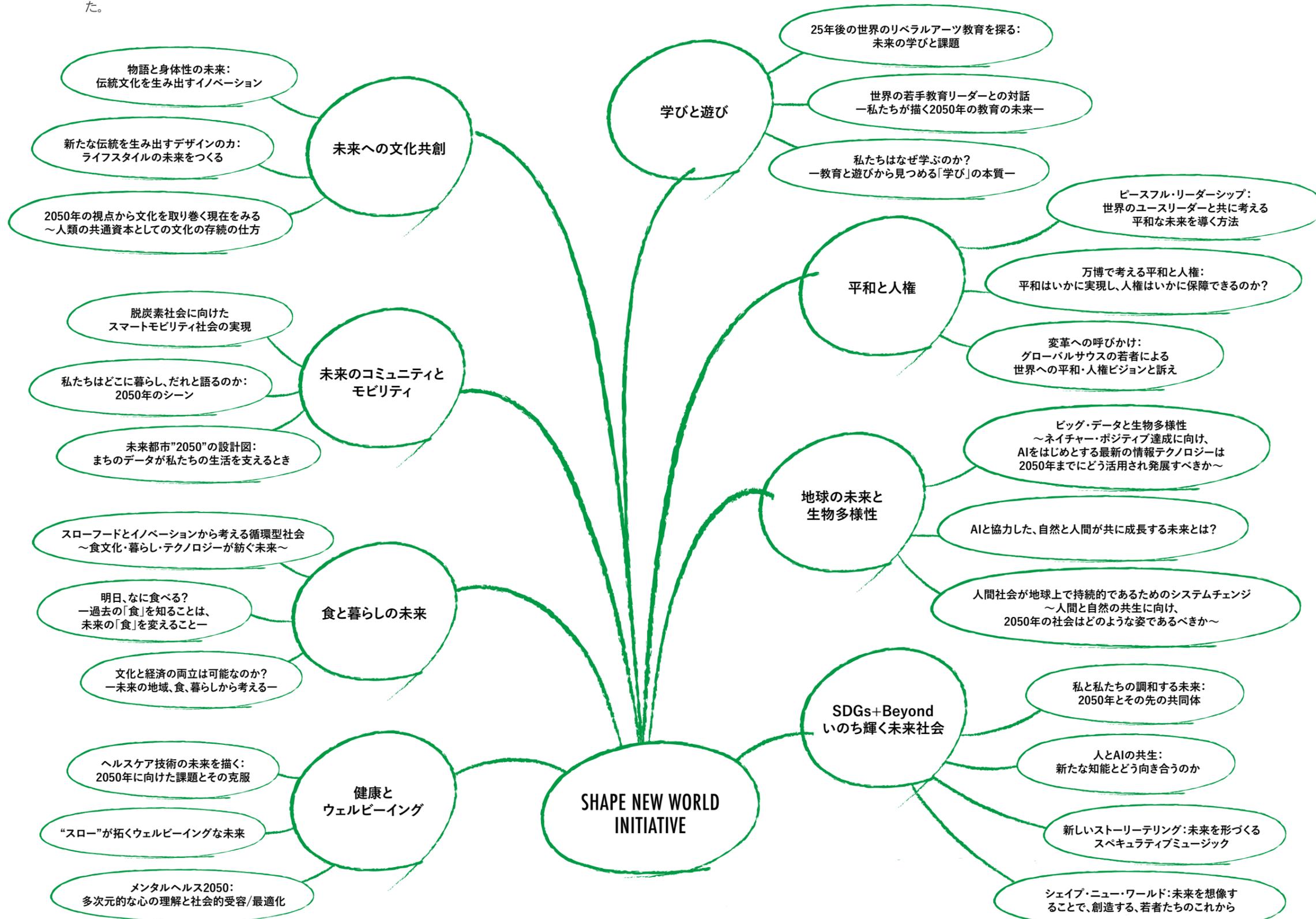
SHAPE NEW WORLD INITIATIVE STATEMENT

私たちはどのような未来に向かって進んでいるのでしょうか？
その様子は地図とコンパスのない
旅路にも似ているかもしれません。
綺麗な花を摘むために野原を歩き、
水を汲むために沢まで降りて、
見通しのいい丘を目指す頃には遭難しているかもしれません。
「良い未来」へ向かうためには、
正しい山登りが必要であり、
目指すべき山を決め、
その山頂に至るまでの適切な道筋を想定して地図を描き、
地図に沿ってコンパスを持って進む必要があります。

未来はまず想像することで、初めて創造することができます。
短期的な視座から研究開発や社会実装をしていると、
SF小説『すばらしい新世界 (BRAVE NEW WORLD)』のように、
高度な技術に恵まれながらも不幸な人々で溢れる
ディストピアに至ってしまうかもしれません。
フォワードの方向だけでなく、
良い未来からバックキャストした計画をつくる必要があります。
私たち自身のために、未来世代のために、
新しい世界をかたちづくる。
若者にはその責任と能力があると信じています。
すばらしい新世界へ！
「SHAPE NEW WORLD!」

138人

会期中実施されたシェイプ・ニューワールド・イニシアティブのプログラムには、世界中から138人の若者が登壇者として参加しました。



大阪・関西万博のテーマウィークでは、8つのテーマを相互に連携させていくための切り口として、ビジネスの力に光を当てる「経済・イノベーション」、世界に先駆けて日本が直面する地球規模の課題である「人口動態・少子高齢社会」、未来社会の担い手である「次世代・インクルージョン」の3つのクロスカッティング・イニシアチブを設定しました。その中の「次世代・インクルージョン」の取り組みとなるシェイプ・ニューワールド・イニシアティブは、「世界経済フォーラム」の20-30歳代の若者により構成されたグローバル・シェイパーズ・コミュニティの日本のメンバーが中心となって立ち上げた活動で、テーマウィークの全てのテーマにおいて、世界の若者による対話を実施しました。

“

私にとって伝統とは、技術や儀式、活動を通じて、先人たちと私たちをつなぐ糸、すなわち共有された歴史という概念です。



ガブリエル・ベルガラ二世 Multidisciplinary Designer and Creative Producer
未来への文化共創 ウィーク「新たな伝統を生み出すデザインのカ:ライフスタイルの未来をつくる アジェンダ2025共創プログラム」
2025.4.29

“

世界を変えるのは情報ではなく“感動”だ。私は美空ひばりのバーチャルヒューマンに心を揺さぶられ、人生が変わった。



ジューストー沙羅 Producer/Artist
未来への文化共創 ウィーク「物語と身体性の未来: 伝統文化を生み出すイノベーション アジェンダ2025共創プログラム」
2025.4.29

“

私たちはもっと柔軟に暮らす場所を選んで飛び回れるようになる。



今西 美音子 株式会社竹中工務店
未来のコミュニティとモビリティ ウィーク「私たちはどこに暮らし、だれと語るのか: 2050年のシーン アジェンダ2025共創プログラム」
2025.5.24

“

私たちは機能的であるだけでなく、包括的で多様性があり、人間中心の都市を創造することができます。



岩淵 文和 URBANIX株式会社、九州大学大学院都市設計研究室
未来のコミュニティとモビリティ ウィーク「未来都市「2050」の設計図: まちのデータが私たちの生活を支えるとき アジェンダ2025共創プログラム」
2025.5.24

“

まずはあなたの立場から、なぜこの食べ物をランチに選ぶのかという目的から始めましょう。それがあなたの人生におけるより広い哲学へと繋がっていくでしょう。



Lee Ayu Chuepa アカ・アマ・コーヒー
食と暮らしの未来 ウィーク「スローフードとイノベーションから考える循環型社会～食文化・暮らし・テクノロジーが紡ぐ未来～ アジェンダ2025共創プログラム」
2025.6.14

“

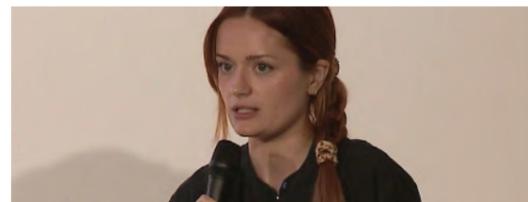
一般の人々が世界をより良い場所にするための手段となることができる。



岩本 涼 株式会社TeaRoom 代表取締役CEO
食と暮らしの未来 ウィーク「文化と経済の両立は可能なのか? -未来の地域、食、暮らしから考える- アジェンダ2025共創プログラム」
2025.6.14

“

より健康的な社会を作るためには、意思決定者が人々の生きた経験に基づいた証拠にアクセスできるようにすること。



カミラ・ミハルスキー ハビネス・リサーチ・インスティテュート(デンマーク)
健康とウェルビーイング ウィーク「メンタルヘルス2050: 多角的な心の理解と社会的受容/最適化 アジェンダ2025共創プログラム」
2025.6.21

“

教育の本質は、知識ではなく民主主義の基礎を築くことにある。



高島 峻輔 芦屋市長
学びと遊び ウィーク「25年後の世界のリベラルアーツ教育を探る: 未来の学びと課題 アジェンダ2025共創プログラム」
2025.7.26

“

AIの時代にあっても、私たちにとって最も必要なのは「共感力」である。



ウルスラ・リントヨウピ グローバルシェイパーズコミュニティ・ヘルシンキハブ、Tölö gymnasium, City of Helsinki
学びと遊び ウィーク「世界の若手教育リーダーとの対話 - 私たちが描く2050年の教育の未来- アジェンダ2025共創プログラム」
2025.7.26

“

誰もが自分の人生のリーダーであり、日々の行動に平和を取り入れることが大切だ。



デング・ダク・マルアル Global Shapers Community Kakuma Hub
平和と人権 ウィーク「ピースフル・リーダーシップ: 世界のユースリーダーと共に考える平和な未来を導く方法 アジェンダ2025共創プログラム」
2025.8.9

“

お金を寄付するのではなく、「時間」を寄付してください。それが、誰にとっても障壁のない、国境を越えたあなたのインパクトを生み出すでしょう。



ルラ・オデー ハリ社プロダクトマネージャー、グローバル・シェパーズ・コミュニティメンバー
平和と人権 ウィーク「変革への呼びかけ: グローバルサウスの若者による世界への平和・人権ビジョンと訴え アジェンダ2025共創プログラム」
2025.8.9

“

心地よくないかもしれない現実を自ら選ぶ勇気を持てるかどうか。これが平和や人権を考える上では大切なこと。



秋山 肇 筑波大学 人文社会系
平和と人権 ウィーク「万博で考える平和と人権: 平和はいかに実現し、人権はいかに保障できるのか? アジェンダ2025共創プログラム」
2025.8.9

“

私たちは人権、生物多様性、そして生態系に対する責任を負っています。それは国境で終わるものではありません。



ロウラ・キュロー スイス・コアリション・フォア・コーポレート・ジャスティス、ヘルン中央支部
地球の未来と生物多様性 ウィーク「人間社会が地球上で持続的であるためのシステムチェンジ～人間と自然の共生に向け、2050年の社会はどのような姿であるべきか～ アジェンダ2025共創プログラム」
2025.9.27

“

イノベーションは、物事が完璧ではない時に、それをうまく機能させようと努力するところから生まれます。



アナ・レイエス マスング・ジオリザーブ財団取締役顧問
地球の未来と生物多様性 ウィーク「ビッグ・データと生物多様性～ネイチャー・ポジティブ達成に向け、AIをはじめとする最新の情報テクノロジーは2050年までにどう活用され発展すべきか～ アジェンダ2025共創プログラム」
2025.9.27

未来は予測するものでも待つものでもない 未来を自ら選び、つくり上げていく若者たちの力



佐久間 洋司

シェイプニューワールドイニシアティブ 代表
世界経済フォーラム グローバルシェイパーズコミュニティ (大阪ハブ)
大阪大学 社会ソリューションイニシアティブ 特任研究員

未来は予測するものでもただ待つものでもなく、私たちが自ら選び、つくり上げていくものである。そうした考え方のもと、私たちはテーマウィークの共創プログラム「シェイプニューワールド」として、25のプログラムを開催してまいりました。世界経済フォーラムのグローバルシェイパーズコミュニティに選ばれた若者をはじめ、世界20か国以上から集まった33歳以下の120名以上の若者が一連のプログラムに参加し、八つの地球規模の課題に対応する24のプログラムを実施しました。さらにそれに一つを加えた、計25の共創プログラムにおける対話を通じて、私たちは2050年にどのような未来をつくりたいのかを多様な専門性とビジョンの観点から検討してきました。

国境や分野を越えて多様なネットワークを構築し、若者がフィジカルに集い、未来に向けた対話を行う。このような場は、大阪・関西万博だからこそ実現できた非常に貴重な機会であり、石川勝プロデューサーや日本国際博覧会協会をはじめ、テーマウィークを立ち上げられたすべての方々のご尽力なくしては実現し得なかったものです。これからの25年に責任を持ち、最前線に立って自ら世界を形づくろうとする若者が大阪に一堂に会したことは、万博の中でもこれ以上ない価値の一つであったと信じています。

私たちが過去を振り返るとき、歴史的に重要な転換点を見つけることは比較的容易です。ある重要な出会いや対話、たった一つの出来事が、その後

の歴史を大きく変えてしまう——いわゆるバタフライ・エフェクトの最初のきっかけを、後から見出して理解することもできます。一方で、私たちが現在を生きる中で、この瞬間やこの選択がどれほど未来を変えるのかについては、無自覚であることが多いのではないのでしょうか。私たちは常に、毎秒ごとに、どのような世界をつくるのかという分岐の瞬間を経験し続けているのかもしれませんが、それは恐ろしいことでもありますが、同時に希望に満ちたことでもあります。

私たちのステートメントにもあるように、未来へ進むことは山登りに似ています。地図もコンパスも持たず、無計画に目の前に見えるものだけを頼りに進めば、目指す山に登れないどころか、時には遭難してしまうことさえあります。高い山に登るためには、どの山を目指すのかを明確に定め、何を目印に進むのかを計画し、必要な道具を整えた上で登山に臨まなければなりません。それと同様に、私たちはどのような未来へ進みたいのかを明確に意識し、未来からバックキャストして行動していくことが必要です。

このたび、大阪・関西万博に際して設立されたシェイプニューワールドイニシアティブでは、未来社会デザインに係る調査研究（シェイプニューワールドプロジェクト）と、未来社会創成委員会（シェイプニューワールドコミッティー）という二つの具体的な取り組みを推進してきました。調査研究は、大阪大学と科学技術振興機構による共同研

究プロジェクトとして、国内アカデミアや各業界のトップランナーを招き、対話プログラムの基盤となる未来社会のデザインに取り組んできました。未来社会創成委員会は、グローバル・シェイパーズのメンバーと大阪商工会議所の共催によるテーマウィークに向けた議論の場であり、若者ならではの独創性と多様性に富んだ視点から、対話プログラムの具体的内容について検討を行ってきました。これら数年にわたる準備を経て実現したのが、シェイプニューワールドイニシアティブによる25の対話プログラム（シェイプニューワールドシンポジウム）です。

このように私たちは、未来を自ら選び形づくっていくという姿勢のもとで取り組みを深め、ネットワークを広げてきました。「シェイプニューワールド」という名称は、『一九八四年』と並ぶ有名なSF小説『すばらしい新世界』の英題『ブレイブニューワールド』に由来しています。目先の利便性の高い技術や、都合のよい社会制度の導入を繰り返した先には、もしかすると緩やかなディストピアが待っているのかもしれませんが、『すばらしい新世界』で描かれたように、一見幸福そうでありながら、現在の私たちがすれば望ましくない未来に到達してしまう可能性もあります。そのような未来ではなく、私たち自身の意思で2050年の未来を選び、形づくっていく——その強い決意を表明するために、「シェイプニューワールド」と名付けました。

この取り組みは、2025年から2050年へ向かう重要な旅路の第一歩です。大阪・関西万博、そしてテーマウィークからどのような未来が続いていくのかは、すべての参加者一人ひとりにかかっていると考えています。この取り組みを万博限りのものとせず、私自身もこの25年を全力で生き抜いてまいります。

最後になりますが、シェイプ・ニュー・ワールドの対話にご参加いただいたすべての皆様に、心より感謝申し上げます。このような貴重な機会を与えてくださったプロデューサーの石川勝様、日本国際博覧会協会の皆様、未来社会創成委員会の運営を担っていただいた大阪商工会議所の皆様、未来社会デザインに係る調査研究を推進いただいた大阪大学社会ソリューションイニシアティブおよび科学技術振興機構の皆様、多大なるご協賛を賜りました関西イノベーションセンター（MUIC）をはじめとする協賛企業の皆様、そしてすべての関係者の皆様に、改めて深く御礼申し上げます。



アジェンダ2025参加プログラムは、テーマウィークの趣旨に賛同する企業、団体、行政機関等が、自ら企画・制作するプログラムを持ち寄って行う取り組みです。さらに、協賛者としてテーマウィークの事業推進にも参画し、拠点施設であるテーマウィークスタジオの開設費用は協賛金によって賄われました。

未来への文化共創

世界と日本を変える力
～JICA海外協力隊と外国人材と共に地域を創る～
独立行政法人国際協力機構

日経 地方創生フォーラム

文楽の夕べ 特別編

株式会社日本経済新聞社



2025.4.25 世界と日本を変える力
～JICA海外協力隊と外国人材と共に地域を創る～
独立行政法人国際協力機構

健康とウェルビーイング

こどもの未来を育むために：母子手帳と母子保健分野
におけるデジタルソリューション
独立行政法人国際協力機構

健康とウェルビーイング: Myウェルビーイングから、
Ourウェルビーイングへ
DMG森精機株式会社

Action!セミナー「健康経営が拓げる組織と人の未来」

金融が支える健康経営・ウェルビーイング
株式会社日本経済新聞社

人生100年時代に向けて
—いのち輝く豊かな未来—
三井住友信託銀行株式会社



2025.6.23 人生100年時代に向けて
—いのち輝く豊かな未来—
三井住友信託銀行株式会社

未来のコミュニティとモビリティ

トークセッション「オートメーションでつくる未来の
ちょうどいい暮らし」
アズビル株式会社

未来に求められるモビリティの姿とは
未来を“まもる・つくる・つなぐ”テクノロジー
フィンテックの進化
株式会社日本経済新聞社

あなたの安全・安心な未来に向けた、災害大国である
日本だからこそその世界への提言
株式会社フォーラムエイト

リニア中央新幹線がもたらすインパクトの最大化
東海旅客鉄道株式会社



2025.5.21 リニア中央新幹線がもたらすインパクトの最大化
東海旅客鉄道株式会社

食と暮らしの未来

NIKKEI 食の未来シンポジウム

目指すべき未来のコンビニの姿

株式会社日本経済新聞社



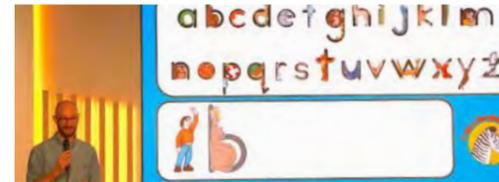
2025.6.9 NIKKEI 食の未来シンポジウム
株式会社日本経済新聞社

学びと遊び

NIKKEI THE PITCH スペシャルセミナー 遊びながら仕事を学ぶ
日経STEAM スペシャルセミナー

NIKKEI未来社会共創コンテスト 未来を拓くイノベーションセミナー

株式会社日本経済新聞社



2025.7.22 NIKKEI THE PITCH スペシャルセミナー
遊びながら仕事を学ぶ
株式会社日本経済新聞社

地球の未来と生物多様性

トークセッション「地球の未来とわくわくオートメーション技術」
アズビル株式会社

知られざる水と森の話
～気候変動時代の社会とイノベーション～
株式会社IHI

DOIC国際シンポジウム『脱炭素と再生可能エネルギー：持続可能な未来への変革』
株式会社文化資本創研

子どもたちとつむぐ水と空気～万博から未来へ～
サントリーホールディングス株式会社・ダイキン工業株式会社

私たちのアクションが地球を守る
—プラスチックと資源循環社会
公益財団法人地球環境センター

日経ビジネスイノベーションフォーラム「次世代エネルギーから始まる
未来社会の実現～大阪・関西万博 化けるLABO から世界へ発信～」

次世代エネルギー技術によるカーボンニュートラル社会への戦略
GXで創るいのち輝く未来の形

NIKKEIブルーオーシャン・フォーラム～みんな
と一緒に考える海の未来

株式会社日本経済新聞社



2025.9.21 子どもたちとつむぐ水と空気～万博から未来へ～
サントリーホールディングス株式会社・ダイキン工業株式会社

平和と人権

青少年の提言「平和構築と人権擁護」
国際ロータリー第2660地区

難民課題の解決を目指すビジネスアイデアコンテスト
チョコレート美味しく食べ続けるために、私たちができること
独立行政法人国際協力機構

DE&Iフォーラム
株式会社日本経済新聞社

平和と人権: Dialog and Imagination
DMG森精機株式会社

ミライの防災・減災
東京海上日動火災保険株式会社



2025.8.10 ミライの防災・減災
東京海上日動火災保険株式会社

SDGs+Beyond いのち輝く未来社会

再生可能エネルギーと再生医療で救う未来
GDS2025「デジタル社会の未来」

日経社会イノベーションフォーラム サーキュラーエコノミー
～未来を変える循環型社会～

第7回日経Well-being シンポジウム
日経・FT感染症会議in万博特別版 未来の感染症対策を次世代と語る

サステナブルなエネルギーを社会に
株式会社日本経済新聞社

第20回/2025年度 ロレアル-ユネスコ女性科学者 日本奨励賞 授賞式・
トークセッション-世界は科学を必要とし、科学は女性を必要としている-
日本ロレアル株式会社

JICAと考える SDGsと途上国のいま、そしてこの先
独立行政法人国際協力機構

世界がん撲滅サミット2025 in 大阪・関西万博
世界がん撲滅サミット2025実行委員会

都市型自動運転船による都市の水辺のイノベーション
株式会社竹中工務店

2050年 コントロールから解放される"自然社会"と人間
オムロン株式会社



2025.10.10 2050年 コントロールから解放される"自然社会"と人間
オムロン株式会社

“

私たちはどんどん豊かになっていくべきでしょうか？そうではないかもしれません。



フリッツ・フレンクラー f/p design CEO、ミュンヘン工科大学 (TUM) エメリタス・オブ・エクセレンス 未来のコミュニティとモビリティウィーク「トークセッション「オートメーションでつくる未来のちよどい暮らし」」
2025.5.16

“

地域の防災も「この指とまれ」でやりたい人がやれる仕組みづくりが必要。



福田 知弘 大阪大学 大学院工学研究科 環境エネルギー工学専攻 教授
未来のコミュニティとモビリティウィーク「あなたの安全・安心な未来に向けた、災害大国である日本だからこそその世界への提言」
2025.5.20

“

交通システムだけではない、非常に包括的な都市計画と過疎化や高齢化を含めた課題を解決する糸口になるのではないかと。



石黒 不二代 世界経済フォーラム 日本代表
未来のコミュニティとモビリティウィーク「リニア中央新幹線がもたらすインパクトの最大化」
2025.5.21

“

一人が成功すれば私たち全員が成功するのです。



ケネディ・テッティ・コフィー・ブライトソン ガーナヘルスサービス 家族保健局 局長
健康とウェルビーイングウィーク「こどもの未来を育むために：母子手帳と母子保健分野におけるデジタルソリューション」
2025.6.20

“

健康寿命を延ばす第一歩として、健康やかな睡眠というのがあるということをお伝えするのが私の役目だと思ふ。



柳沢 正史 筑波大学 国際統合睡眠医科学研究医学機構(WPI-IHIS)、株式会社S'UIMIN
健康とウェルビーイングウィーク「人生100年時代に向けてーいのち輝く豊かな未来ー」
2025.6.23

“

戦争に関して話すことがタブーであってはならない。青少年の皆様にはそれを議論できる強さと信念をもっていただきたい。



中井 伊都子 甲南大学学長
平和と人権ウィーク「青少年の提言「平和構築と人権擁護」」
2025.8.1

“

インクルージョンは一度達成して終わるものではなく、社会やテクノロジーの進化とともに更新し続けるプロセスである。



ルーツ・エイナルスドットティル 駐日アイスランド大使館アタッシェ
平和と人権ウィーク「DE&Iフォーラム」
2025.8.4

“

好きなことを突き抜けてみる。これもまた世界と繋がっていく大きな入口であると僕は痛感しています。



渡部 陽一 戦場カメラマン
平和と人権ウィーク「平和と人権: Dialog and Imagination」
2025.8.5

“

人類の無力さに直面するシーンも少なからずありましたが、だからといって我々は自然災害に対して引き続き無力であっていいのかという問題意識を強く持っています。



生田目 雅史 東京海上ホールディングス株式会社 専務執行役員、グループCDO東京海上レジリエンス株式会社 代表取締役
平和と人権ウィーク「ミライの防災・減災」
2025.8.10

“

森の中に妖怪が住んでいるというのは奄美大島です。ずっと紡がれてきた一種の文化であり、森に対するリテラシーの根源的なものになっています。



上田 社一 一般社団法人シンク・ジ・アース
地球の未来と生物多様性ウィーク「知られざる水と森の話 ~気候変動時代の社会とイノベーション~」
2025.9.20

“

皆さん一人一人の声なんて届いてないって思われるかもしれないけど届いているんですね。我々はその声をきっかけに物づくりを変えることができます。



佐久間 洋 株式会社ファーストリテイリング サステナビリティ部 部長
地球の未来と生物多様性ウィーク「私たちのアクションが地球を守るープラスチックと資源循環社会」
2025.9.21

“

技術開発や技術の試みも、社会との対話なしでは決して真の価値を創造することはできないということだと思います。



岩本 唯史 株式会社水辺総研
SDGs+Beyond いのち輝く未来社会ウィーク「都市型自動運転船による都市の水辺のイノベーション」
2025.10.8

“

人間は会ったことも見たこともない人にも、遠くにいる存在にも思いを向けることができる。目に見えない存在にも思いを向けることができ、それを仲間と一緒に共有できる。それが大きな特徴だと思います。



松本 紹圭 僧侶、武蔵野大学客員教授、世界経済フォーラムYoung Global Leaders Alumni
SDGs+Beyond いのち輝く未来社会ウィーク「2050年コントロールから解放される「自然社会」と人間」
2025.10.10

“

カーボンニュートラル燃料と電気は対立するものではなく、脱炭素を進める両輪です。



森下 健一 石油連盟 広報委員長、出光興産 常務執行役員
SDGs+Beyond いのち輝く未来社会ウィーク「サステナブルなエネルギーを社会に【第1部】カーボンニュートラル社会実現に向けた課題」
2025.10.10

「問い」に対する登壇者の声

テーマウィークスタジオにおいて行われた対話プログラムの登壇者より、各テーマの「問い」についてメッセージをもらいました。これらは万博期間中、テーマウィークのホワイエの壁に展示し、来場者に見てもらえるようにしました。

各テーマの「問い」

未来への文化共創 2025.4.25 - 5.6

多様な文化が共鳴し、未来への文化が共創されるために、私たちは何をすべきか？

未来のコミュニティとモビリティ 2025.5.15 - 5.26

誰もがその人らしく生きられるコミュニティとは？

食と暮らしの未来 2025.6.5 - 6.16

全ての人が食と暮らしに困ることがない未来はどのようにすれば実現できるのか？

健康とウェルビーイング 2025.6.20 - 7.1

一人ひとりのウェルビーイングが共鳴する社会をどう実現するか？

学びと遊び 2025.7.17 - 7.28

AI時代において人は何を学ばば良いのか？

平和と人権 2025.8.1 - 8.12

あらゆる差別をなくし、互いを尊重し合う社会を実現するために、世界は何をすべきか？

地球の未来と生物多様性 2025.9.17 - 9.28

豊かで多様ないのちが住む地球を未来に残すために、私たちは何をすべきか？

SDGs+Beyond いのち輝く未来社会 2025.10.2 - 10.12

SDGsは達成できるか？ そして、その先はどうする？



深刻な障害が一つ見えています。それは、国家やコミュニティ全体に広がる未来への恐怖です。人々は過去の(文化的・社会的)パターンを探求するばかりで、それを再設計したり、再検討したり、再考したりすることさえしません。有害な保守主義とポピュリズムが混ざり合い(そしてそれが腐り立てる)、文化の幸福な共創に対する私の信頼を非常に脆くしています。私たちはあらゆる方法でこれに立ち向かわなければなりません。



2025.5.5
未来への文化共創 ウィーク
歴史文化の継承と発展

オスナップ・スリヴィンスキー
PENウクライナ

Poster with handwritten text in English and Japanese, and a small image of a person. Title: 歴史文化の継承と発展 (Inherit & develop historical culture) 2025.5.5.

Poster with handwritten text in English and Japanese. Title: 持続可能な都市・地方への転換 (Transforming into sustainable region & cities) 2025.5.17.

Poster with handwritten text in Japanese. Title: 持続可能な都市・地方への転換 (Transforming into sustainable region & cities) 2025.5.17.

Poster with handwritten text in English and Japanese. Title: Let's BEE sustainable! (ハンガリー養蜂のインベーションとサステナビリティ) 2025.6.13.

Poster with handwritten text in English and Japanese. Title: We need to reinvent our food systems to become agile, inclusive & diverse. 2025.6.16.

Poster with handwritten text in Japanese and English. Title: Well being! 2025.6.20.

Poster with handwritten text in English. Title: The first step is cultivating empathy and an understanding that as humans anywhere in the world we face similar challenges and that we are all together in this. 2025.6.28.

Poster with handwritten text in English. Title: We explore the present of AI and imagine its future. 2025.6.28.

Poster with handwritten text in English. Title: Well-being 経営・教育 (Well-being management & education) 2025.6.28.

Poster with handwritten text in Japanese and English. Title: 遊びと好奇心がまずあり、学びがそれを拡張する。 2025.7.28.

Poster with handwritten text in English. Title: We need to go back to basics, A WORLD WITH LESS GROW. 2025.6.16.

Poster with handwritten text in English. Title: 食と暮らしの未来 ウィーク 食文化の継承・発展 2025.6.16.

Poster with a photo of a woman speaking and handwritten text in English. Title: 食文化の継承・発展 (Preserving & advancing food culture) 2025.6.16.

Poster with handwritten text in English. Title: I think the era of AI will remind us even more of what it means to be human & what it means to be alive & mean. 2025.7.28.

Poster with handwritten text in Japanese and English. Title: 平和と人権: Dialog and Imagination (Peace and Human Rights: Dialog and Imagination) 2025.8.5.

Poster with handwritten text in Japanese and English. Title: 人権の尊重・保障 (Respect & protection of human rights) 2025.8.12.

Poster with handwritten text in Japanese and English. Title: 人権の尊重・保障 (Respect & protection of human rights) 2025.8.12.

Poster with handwritten text in Japanese and English. Title: 人権の尊重・保障 (Respect & protection of human rights) 2025.8.12.

Poster with handwritten text in Japanese and English. Title: 平和の構築・実現 (Peace-building & realization) 2025.8.12.

Poster with handwritten text in English. Title: think globally, act locally -> your actions will change our nature positive world tomorrow! 2025.9.19.

Poster with handwritten text in Japanese and English. Title: いのちの輝く未来社会 (Life is amazing! Become an EARTH SAVER today!) 2025.9.28.

Poster with handwritten text in English. Title: We CAN achieve the SDGs! Bright Future is waiting for us. 2025.10.12.

Poster with handwritten text in English. Title: Yes, it may take more time than the original plan, but if each one of us is committed to achieve it, nothing is impossible. 2025.10.12.

Poster with handwritten text in English. Title: The Future is not something to wait or predict. The Future is something to chase and create. 2025.10.12.

アジェンダ2025関連プログラムとして、「Visionary Exchange」と題したビジネス交流を、会期中3回実施しました。万博の公式参加者のビジネス代表団、大学、科学者、政府関係者、アジェンダ2025主催プログラムのパネリスト、および日本の産学官等関係者が一堂に会し、テーマに沿ったディスカッションやネットワーキングを行いました。



国境ではなく課題でつながる時代。国益と地球益の交差点から、対話を実装へ結びつける行動を。

現在、国際社会は分断と対立のただ中にあります。一方で、気候変動や感染症など人類共通の課題は待ったなしです。いま必要なのは、対話を実装へとつなぐ私たちの行動です。歴史の転換点には、社会が「何に拠ってともに生きるのか」という根本が問われます。気候、健康、都市のあり方といった長い時間軸で複雑な課題は、一国では解けません。だからこそ、政策や技術に先立って、人と人が協働するための「価値観のインフラ」を再構築することが欠かせません。

その出発点として、2025年大阪・関西万博のテーマウィークで実施した「Visionary Exchange」は、包摂と協調、そして信頼という基盤の重要性を明らかにしました。万博という公共空間は、異なる背景の人々が交わり、新たな社会契約を模索する世界の交差点であり、また揺らぐ国際秩序のなかで、国益と地球益を交差させ、共通善を見いだす試みでもありました。

大切なのは、ここで終わらせないことです。多様なステークホルダーが議論を継続し、知見を共有し、協働を制度として定着させていく必要があります。今日の約束を明日の仕組みに変え、公開された検証と学び直しの循環を育てることが、分断の時代における最も強いレジリエンスになります。希望は抽象ではなく、更新され続ける約束の集合です。課題でつながる時代に、私たち一人ひとりが国益と地球益の交差点に立ち、語るだけでなく「続けてつくる」責任を引き受け、行動していきます。



[モデレーター]

稲田 誠士

大阪・関西万博 アジェンダ2025 アドバイザー
外務省及び内閣官房を経て外資系コンサルティングファームに勤務後、世界経済フォーラムの上級職やユーシア・グループの日本代表を歴任。現在は大阪・関西万博アジェンダ2025アドバイザーを務めるほか、FGSグローバルほか複数社のアドバイザーを務める。

未来のコミュニティとモビリティ

2025年05月16日(金) 10:30 ~ 13:30 EXPOサロン 総出席者数:93名(10ヵ国・機関)

「コミュニティとは何か」という根源的な問いに立ち返り、目指すのは、誰もがその人らしく生きられる社会である。レジリエンスの土台はハードの整備だけでなく、相互理解と支え合いを育む「価値観のインフラ」にある。都市とモビリティは国境を越えて接続する時代の共通課題であり、リアルとデジタルの融合は、人間の感覚と関係性の再設計を促す。技術と人間性の調和を起点に、包摂性と強靱性を両立する実装へ踏み出す。

[登壇者]

アリ・アル・マドファエイ アラブ首長国連邦 アブダビ民間防衛庁
クラレンス・チュア シンガポール経済開発庁シニアヴァイスプレジデント
ルーカス・サヴィカス リトアニア共和国 経済・イノベーション大臣
アシーシュ・カンナ 太陽に関する国際的な連盟(ISA)事務局長
サラ・シャープレス 英国(グレートブリテン及び北アイルランド連合王国)運輸省首席科学顧問
ジョシュア・ツェン シンガポール・Blind Mice Media共同創業者
ヘンリー・ツァン カナダ・アサバスカ大学准教授



健康とウェルビーイング

2025年06月27日(金) 10:30 ~ 13:30 EXPOサロン 総出席者数:140名(14ヵ国)

健康は「病を治す」から、「よりよく生きる」という生のあり方へと広がっている。公平なアクセスと予防への投資、生活・教育・環境といった社会的決定要因への統合的対応が鍵となる。人材の再配置とデジタル活用、共同責任の枠組みを整え、個別化医療と公衆衛生を両輪として進める。AI時代に広がるウェルビーイングを、制度と実践で支える転換が始まっている。



[登壇者]

パウロ・ガデラ オズワルド・クルス財団、2030アジェンダのためのフィオクルス戦略(EFA2030フィオクルス)、ブラジル
ビエール・ヴァン・ダム アントワープ大学ワクチンポリス・ワクチン評価センター所長
アリタ・ダブニカ リガ工科大学自然科学部バイオマテリアル・バイオエンジニアリング研究所 准教授、理学博士、ディレクション・リーダー
カルメン・ファン・ヴィルステレン ライフサイエンス・ヘルスケア分野トップセクター議長、オランダ
ヤクブ・フラフカ マサリク大学健康経済・政策・イノベーション研究所(HEPII)所長、チェコ
田中 倫夫 アストラゼネカ社メディカル本部長、英国
シャルメヌ・ガウチ マルタ厚生省公衆衛生監督官兼衛生規制局長
マルワン・アル・カービ シェイク・シャバウト・メディカル・シティ、ピュアヘルス・エンティティ・カンパニー最高経営責任者、アラブ首長国連邦
イオネスク・オクタヴィアン ルーマニア マイクロテクノロジー研究開発国立研究所

地球の未来と生物多様性

2025年09月18日(木) 10:30 ~ 13:15 EXPOサロン 総出席者数:121名(9ヵ国・機関)

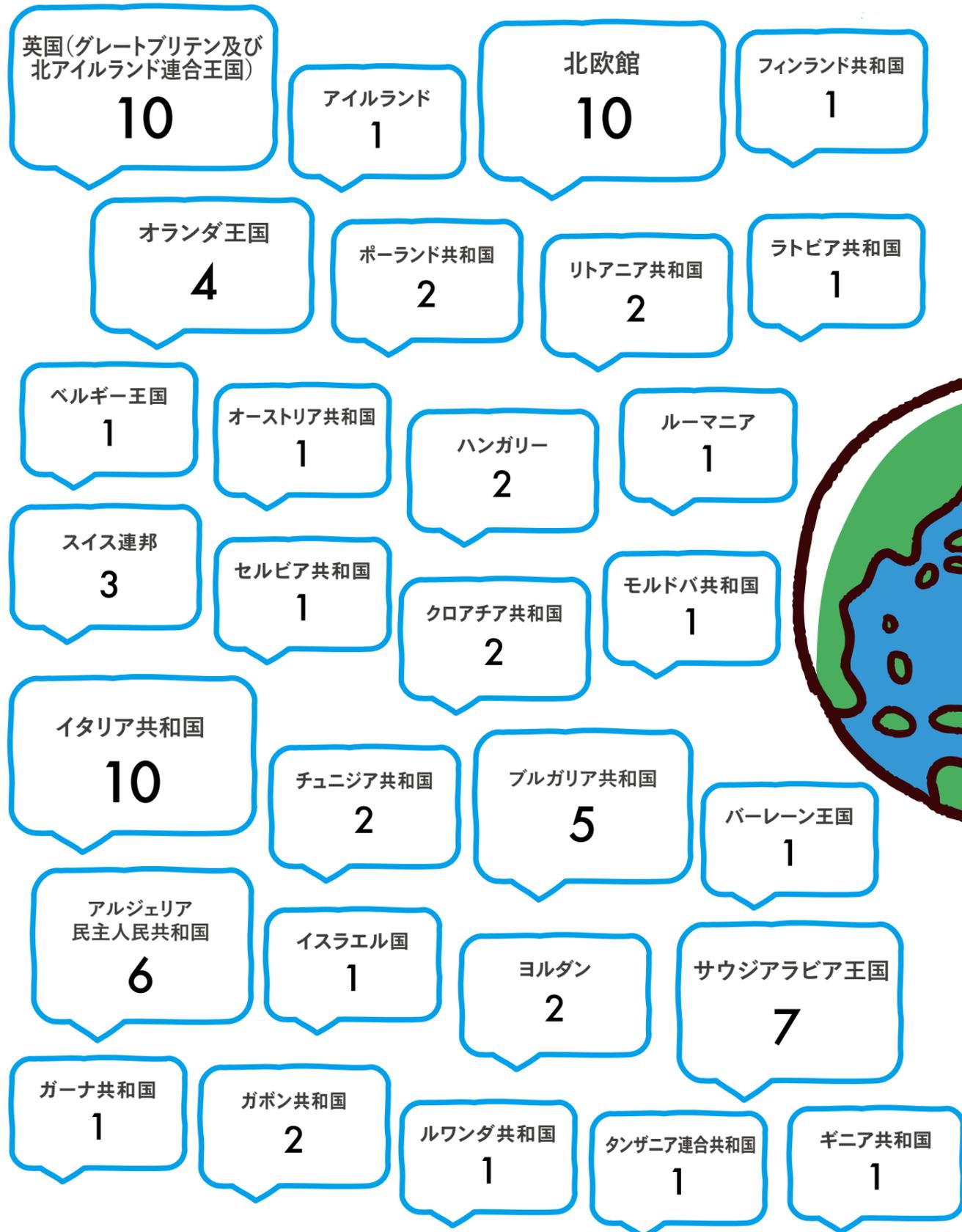
エネルギー・気候・生物多様性を一体で捉え、供給(技術)と需要(行動)、主権と地球公共財の二軸で同時に見る視座を提示する。原子力、分散型再生可能エネルギー、カーボンマネジメントなどの選択肢を、理念対立ではなく、科学的根拠と制度設計で統合する。都市と自然の再統合を含む実例から、共通善を再定義する実装の道筋が見えてきた。



[登壇者]

ペーテル・シーヤールトー ハンガリー外務貿易大臣
マラク・タラル・アルノリー サウジアラビア エネルギー省 持続可能性および気候変動に関する上級顧問
アレクサンドロ・ベヴィトーリ サンマリノ共和国 労働・経済計画・A.A.S.S. 関係・生態系移行・技術革新大臣
レイア・アルダマニ UAE Pure Health 最高サステナビリティ責任者
イアン・オハラ 工学部長補佐、クイーンズランド大学工学部長、クイーンズランド・バイオフィューチャーズ産業大使
イボンヌ・テイ テマセク・ショップハウス、テマセク・トラスト、ゼネラルマネージャー
ジェローム・L・モンテマヨール ASEAN生物多様性センター事務局長

大阪・関西万博に参加する国や国際機関に対しても、開幕前の早い時期からテーマウィークへの参加を呼びかけてきました。その結果、たくさんの公式参加者が参加を表明し、テーマごとに独自のプログラムを企画、自らのパビリオンやテーマウィークスタジオを用いて、地球的課題についての国際的な対話が実現しました。さらに、近年の万博において一段と存在感が際立つようになってきたビジネス交流も数多く実施されました。



189件

会期中、会場内において実施された公式参加者のトラックプログラムは、189件に上りました。





マグロの刺身一切れ一切れに、漁師たちの闘いの物語、子供たちを学校に通わせ、地域社会を豊かにし、そして自分たちの暮らす海を守る家族の物語が込められています。



ティラ・コマリグ インドネシアマグロコンソーシアムの戦略リーダー
未来への文化共創 ウィーク「鮪! - 世界マグロデー インドネシアのマグロ漁業における伝統、歴史、持続可能性を探る」
2025.5.2



私たちに必要なのは、十分な食料ではなく、私たちの土地と文化に根ざした尊厳のある食料です。



ヴィタ・ダタウ インドネシア・ガストロノミー・ネットワーク創設者
食と暮らしの未来 ウィーク「食料主権のための地域食糧システム」
2025.6.9



平和を戦争がない状態と定義するのではなく、暴力がない状態と定義する。これを今一度考えてみる事が非常に重要じゃないかなと思っています。



三輪 敦子 関西学院大学 総合政策学部 教授
平和と人権 ウィーク「パネルディスカッション:ジェンダー、尊厳、そして社会的包摂」
2025.8.4



日本 大分県で生まれた「一村一品」の理念は、世界中の地域社会が持続可能な開発を達成するよう促してきました。チュニジアは 職人技 生物多様性 そして何世紀にもわたるオリーブオイル文化の伝統を通してこの理念を深く共有しています。



チュニジア共和国パビリオンとして チュニジア共和国パビリオン
地球の未来と生物多様性 ウィーク「チュニジア一村一品デー:ルーツと翼」
2025.9.25



彼は伝統技術で昔のものを作るんじゃなく、技術を持つ人を集めて、そこから何が生まれるか、次の未来にどう進化するかを考えたんだ。



辻井 博行 造園家
未来への文化共創 ウィーク「過去から学び、未来へ:ものづくりを通じた創造性をつながり」
2025.5.4



ここに集まる私たちは、言語、風景、伝統も異なりますが、その根底には社会バランス、未来のために賢く備えることへの深い尊敬と言う非常に深遠なものを共有しています。



ソフィー・ローデ デンマーク内務・保険大臣
健康とウェルビーイング ウィーク「北欧の健康 EXPO - ライフサイエンス・デイズ ~Part I~」
2025.6.25



停戦合意や和平交渉のテーブルに女性の席はほとんど用意されておりません。女性がリーダーとして可視化されないと言う構造的な課題が反映されているのではと思います。



上川 陽子 衆議院議員、大学女性協会(JAUW) 静岡支部
平和と人権 ウィーク「政治における女性たち - Part I -」
2025.8.7



私たちは遺産や伝統から学び直し、土地特有の新しい類型を創造しなければなりません。それが気候変動や水の安全性にとっても重要だからです。



アナスタシア・シンツィナ アラル文化サミットプログラム責任者
地球の未来と生物多様性 ウィーク「生態系の再生:アラル海から世界へ」
2025.9.28



私たちが持続可能な未来を築くためには、進歩が人々の生活向上と地球の保護の両方に関わっていることを理解する必要があります。



ジュン・シェル・カバル=レヴィラ メトロパシフィック・インベ
ストメンツ・コーポレーション (MPIC) チーフ・ファイナンス・オフィサー
未来のコミュニティとモビリティ ウィーク「私が望む未来:ASEAN、日本、そしてその他地域に広がる、スマートで持続可能かつ包摂的なコミュニティ」
2025.5.25



介護者であるならば、まず自分の世話をすることが非常に重要です。そうすることで他の人の世話をより良くすることができるのです。



アリソン・セクラール サンドラ・A・ロットマン認知神経科学
講座、バイクレスト老年医療センター研究教育アカデミー
学長兼チーフサイエンティスト、Centre for Aging + Brain
Health Innovation (CABHI) 学長兼チーフサイエンティスト
健康とウェルビーイング ウィーク「高齢化と認知症の未来: 認知症を克服/
より良い健康と幸福のためのテクノロジーを加速する組織的アプローチ」
2025.6.26



文化遺産は単なる国家の資産ではなく、人権であり、全ての方々が自らの伝統に触れて、年長の方から学び、誇りを持って次世代に伝えるという権利があります。



ヌハ・アルシャリフ WRTH 研究・知的財産部門ディレクター
平和と人権 ウィーク「人間国宝を讀める:多様性を尊重し、平等を推進する」
2025.8.8

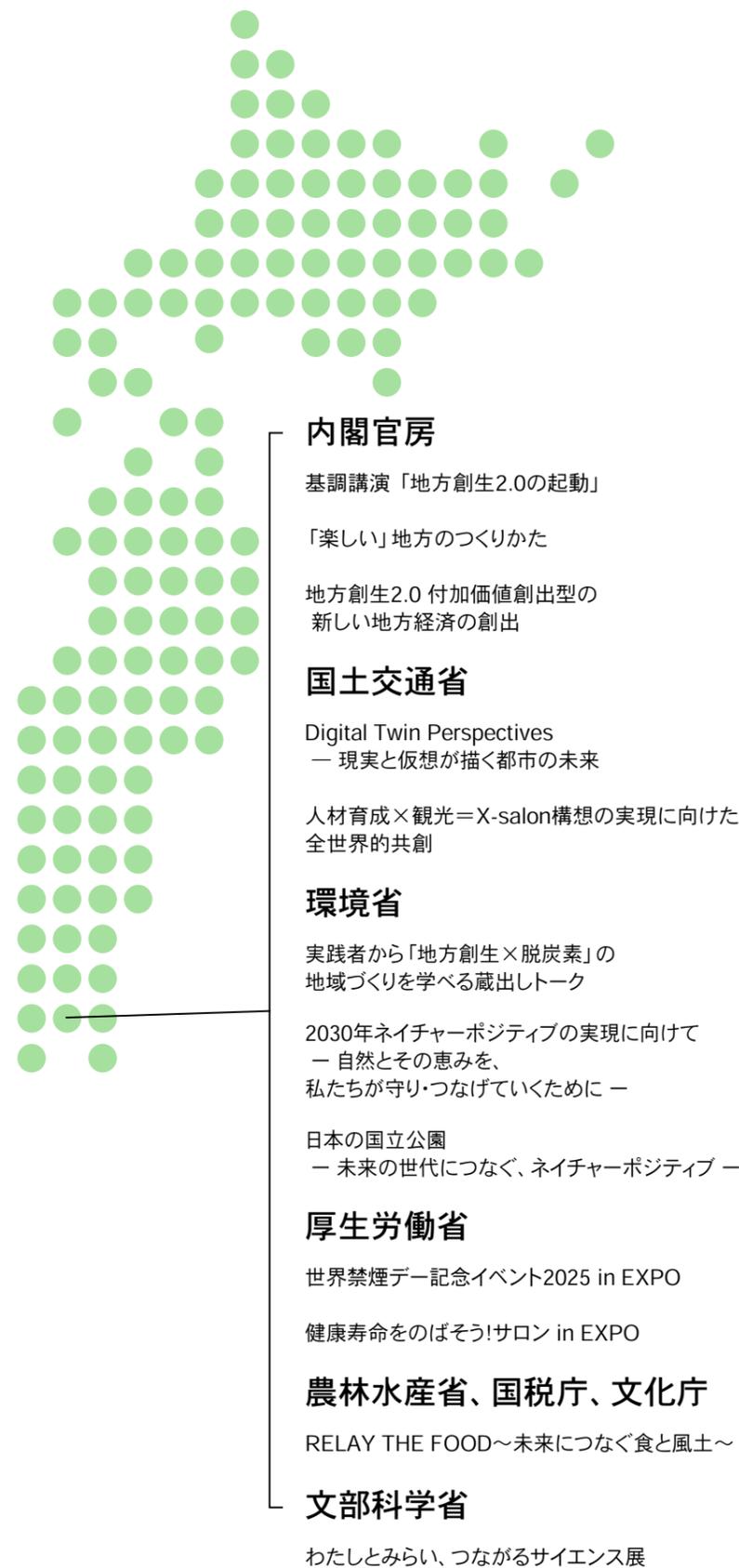
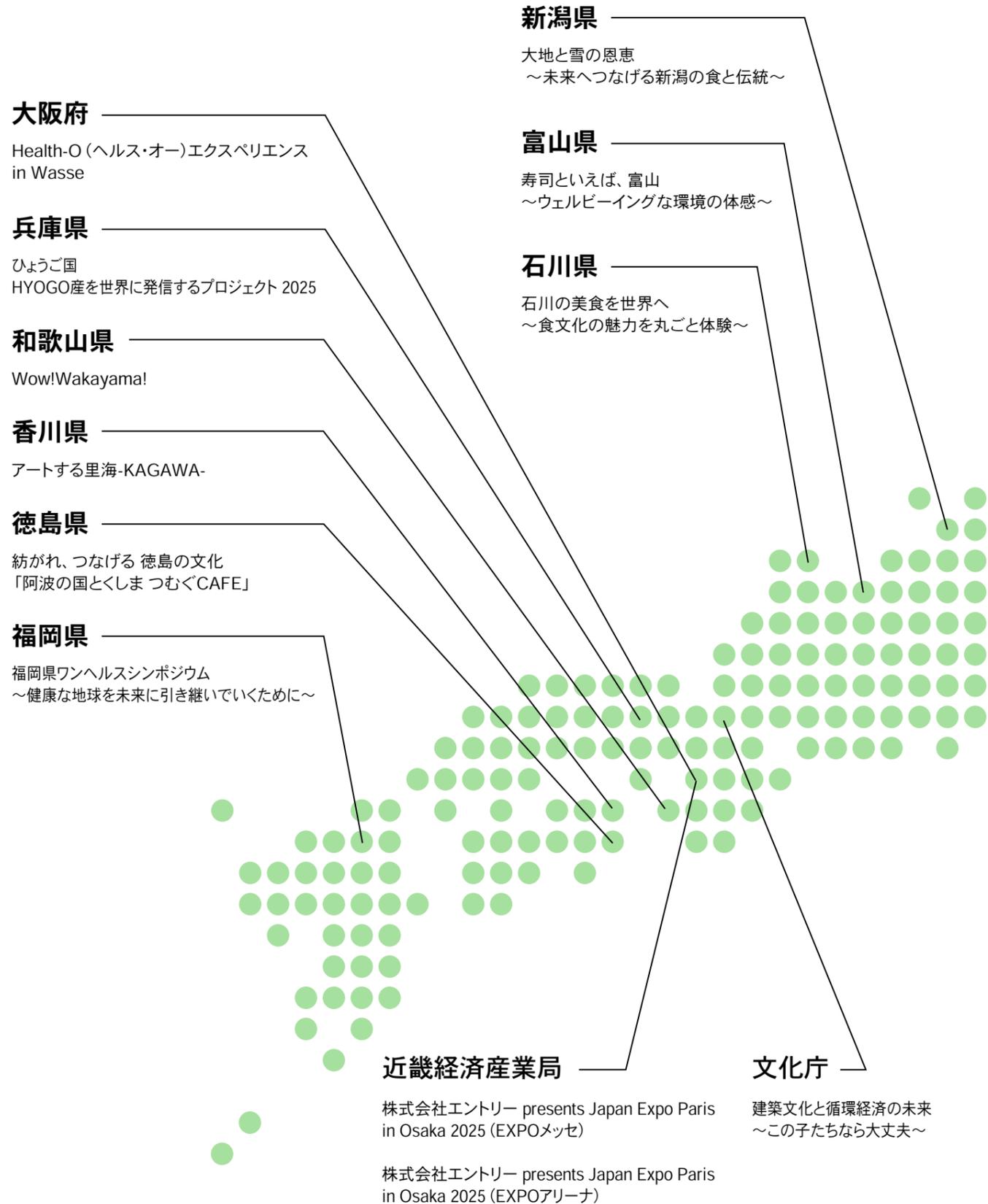


持続可能性とは、地球資源を自分たちのより良い生活のために使う権利があるということですが、もっと重要なのは、次世代のためにより多くの機会を与えられるべきだということです。上海万博はその後も企画を続けています。



伍江 同済大学
SDGs+Beyond いのち輝く未来社会 ウィーク「より智慧的に、より藝術的に、より思いやりを持って:都市更新の未来」
2025.10.9

大阪・関西万博を主催する日本国政府や自治体も、ホスト国、ホストシティとしてテーマウィークに積極的に参加しました。日本国政府においては、万博推進の調整役として役割を果たしてきた内閣官房が2022年12月にアクションプランにテーマウィークの実施を掲げ、各省庁への働きかけを行ってきたことで、多くの省庁からの参加を得ることが出来ました。また、自治体においても、全国知事会等の機会を通じてテーマウィークの主旨説明や参加の呼びかけを行ってきたところ、開催地である大阪府市以外の全国の自治体から数多くの参加を得ることが出来ました。他にも、大学等からの参加も実現し、テーマウィークは、まさにオールジャパンでの取り組みとなったわけです。



内閣府

Cool Japan Showcase Anime Manga Tourism Festival

地方創生SDGsフェス

エンタングル・モーメントー[量子・海・宇宙]×芸術

こども家庭庁

国連を支える世界こども未来会議
FUTURE SUMMIT みらい総会

総務省

Beyond 5G ready ショーケース

経済産業省

PHR連携が生み出す、新時代のウェルネス体験

デジタル学園祭2025

未来をつなぐeスポーツの力
ー JAPAN ESPORTS CONNECT ー

「科学漫画サイババル」シリーズとコラボ!
循環経済を楽しく学べる「サーキュラーエコノミー研究所」

復興庁・経済産業省

東日本大震災からのよりよい復興
(Build Back Better)

中小企業庁

未来航路 ー 20XX年を目指す中小企業の挑戦の旅 ー

資源エネルギー庁

水素パーク!!

特許庁

SDG sに向けた知財活用の促進等に関する国際フォーラム

特許庁、近畿経済産業局

明日を変える知財のチカラ
～想いを届ける、世界をよくする～

未来への文化共創
CO-CREATING CULTURES FOR THE FUTURE



Wow!Wakayama!
和歌山県
2025.4.30 - 5.3 EXPOメッセ



株式会社エントリー presents Japan Expo Paris in Osaka 2025
Japan Expo Paris in Osaka 実行委員会
2025.4.26 - 4.27 EXPOメッセ

食と暮らしの未来
NECESSITIES OF LIFE:
FOOD, CLOTHING AND SHELTER



石川の美食を世界へ～食文化の魅力を丸ごと体験～
石川県
2025.8.27 - 8.31 EXPOメッセ



RELAY THE FOOD ～未来につなぐ食と風土～
農林水産省、国税庁、文化庁
2025.6.7 - 6.8, 6.14 - 6.15 ポップアップステージ西

学びと遊び
LEARNING AND PLAYING



デジタル学園祭2025
一般社団法人デジタル人材共創連盟
2025.7.19 - 7.20 EXPOメッセ



人材育成×観光=X-salon構想の実現に向けた全世界的共創
X-salon構想共創チーム
2025.7.17 テーマウィークスタジオ

地球の未来と生物多様性
THE FUTURE OF EARTH AND BIODIVERSITY



2030年ネイチャーポジティブの実現に向けてー
自然とその恵みを、私たちが守りつなげていくためにー
環境省 自然環境局
2025.9.19 - 9.23 ギャラリーWEST



アートする里海-KAGAWA-
香川県
2025.9.26 - 9.29 ギャラリーWEST

未来のコミュニティとモビリティ
THE FUTURE OF COMMUNITY AND MOBILITY



Beyond 5G ready ショーケース
総務省総合通信基盤局電波部移動通信課新世代移動通信システム推進室
2025.5.26 - 6.3 EXPOメッセ



実践者から「地方創生×脱炭素」の地域づくりを学べる蔵出しトーク第1部「
シティ×モビリティ」プレイヤー達が描く脱炭素ビジョンの「交差点」を探る
環境省大臣官房地域政策課
2025.5.21 テーマウィークスタジオ

健康とウェルビーイング
HEALTH AND WELL-BEING



寿司といえば、富山～ウェルビーイングな環境の体感～
富山県
2025.6.27 - 6.29 EXPOメッセ



健康寿命をのばそう! サロン in EXPO
厚労省
2025.6.22 テーマウィークスタジオ

平和と人権
PEACE, HUMAN SECURITY AND DIGNITY



国連を支える世界こども未来会議 FUTURE SUMMIT みらい総会
一般財団法人ピースコミュニケーション財団
2025.8.6 - 8.7 EXPOメッセ



国連を支える世界こども未来会議 FUTURE SUMMIT みらい総会
一般財団法人ピースコミュニケーション財団
2025.8.6 - 8.7 EXPOメッセ

SDGs+Beyond
いのち輝く未来社会
SDGS+BEYOND FUTURE SOCIETY FOR LIFE



地方創生SDGsフェス
内閣府 地方創生推進事務局
2025.5.28 - 6.1 EXPOメッセ



SDGsに向けた知財活用の促進等に関する国際フォーラム
特許庁総務部
2025.10.4 テーマウィークスタジオ

大阪・関西万博開幕の5年前、2020年は新型コロナウイルス感染症の世界的な大流行により、社会は大きな停滞を余儀なくされていました。大阪・関西万博では、この2020年にプロデューサーが就任し、万博の計画づくりを本格的に開始させた訳ですが、世界的なパンデミックの中、大勢の人が集まる万博を計画することは困難な道程でもありました。そうした背景もあり、万博のテーマを実現するために行うテーマ事業には特に力を注いで取り組んできました。大阪・関西万博では、万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」を実現するために、8つのテーマ事業を実施することとし、そのために各分野で活躍する8人のクリエイターをテーマ事業プロデューサーに起用しました。プロデューサー発表と同時に公表した「大阪・関西万博の理念とテーマ事業の考え方」には、8つのテーマ事業の意義が明確に示されています。このテーマ事業の意義は万博会場において一際存在感を放つ8つのシグネチャーパビリオンへと昇華していきましたが、テーマウィークにおいてもその意義を反映した複数の対話プログラムを実現させました。

大阪・関西万博の理念とテーマ事業の考え方

私たちのいのちは、この世界の宇宙・海洋・大地という器に支えられ、互いに繋がりがあって成り立っている。その中で人類は、環境に応じて多様な文化を築き上げることにより、地球上のいたるところに生活の場を拡大した。その一方で、人類は、利己を優先するあまり、時として、自然環境をかく乱し、さらには同じ人類の他の集団の犠牲の上に、不均衡な社会を作り上げてきてしまったのも事実である。そして今、生命科学やデジタル技術の急速な発達にともない、いのちへの向き合い方や社会のかたちそのものが大きく変わりつつある。

いのちそのものを改編するまでの高度な科学を築き上げた私たちには、人類が生態系全体の一部であることを真摯に受けとめるとともに、自らが生み出した科学技術を用いて未来を切り開く責務があることを自覚し、行動することが求められる。自然界に存在するさまざまないのちの共通性と相違性を認識し、他者への共感を育み、また多様な文化や考えを尊重しあうことによって、ともにこの世界を生きていく。そうすることによって、私たち人類は、地球規模でのさまざまな課題に対して新たな価値観を生み出し、持続可能な未来を構築することができるにちがいない。

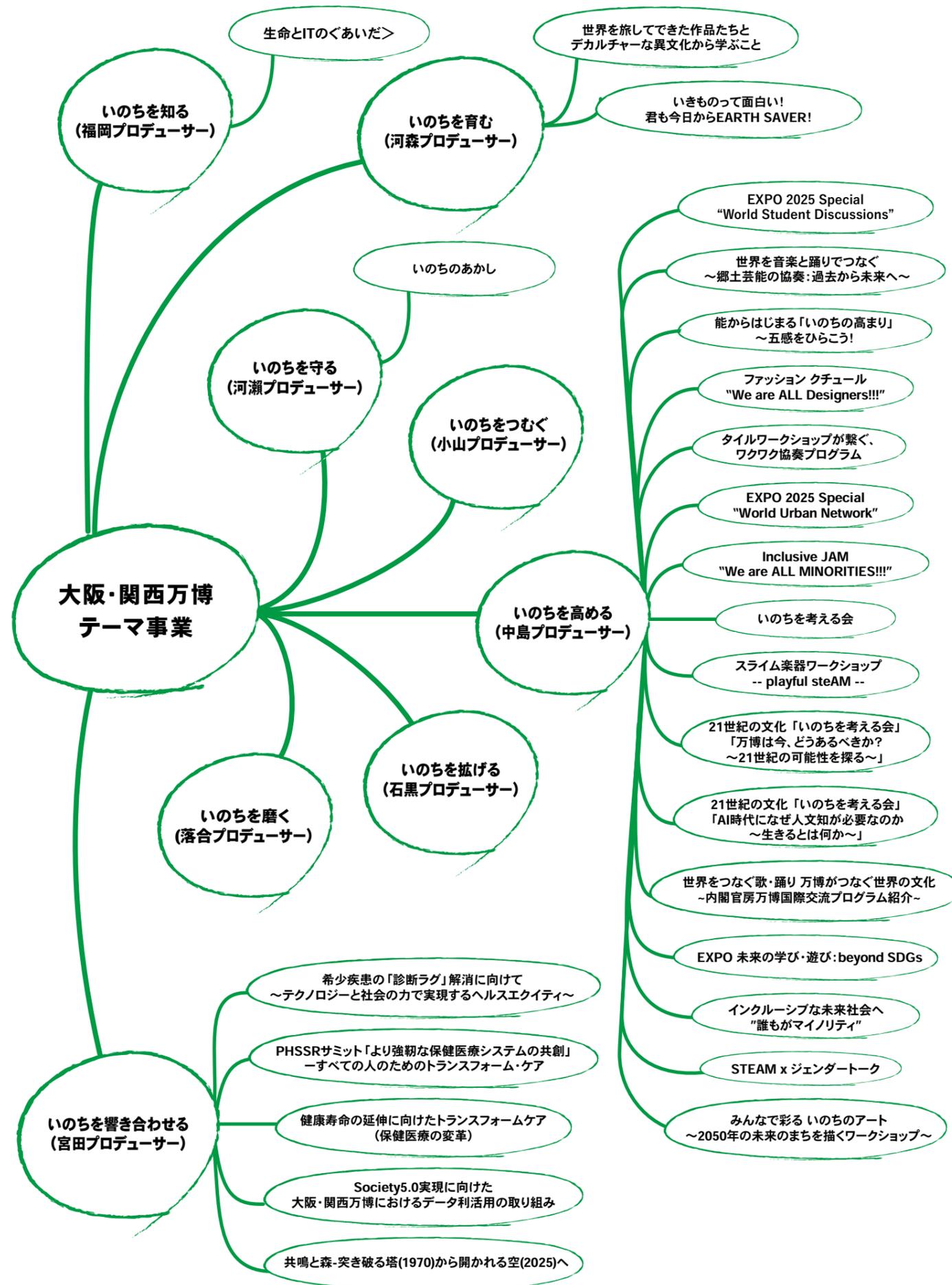
このような信念に基づいて開催しようとする2025年大阪・関西万博は、2020年以来、新型コロナウイルス感染症の地球規模での拡大という未曾有の局面に立ち会うことになった人類にとって、このような局面だからこそ見えてくる人類の可能性を確認し、新たないのちのありようや社会のかたちを検証し提案する、2度とない機会を提供する場となった。

2025年日本国際博覧会協会は、一人ひとりが互いの多様性を認め、「いのち輝く未来社会のデザイン」を実現するため、以下の8つのテーマ事業を設定することとした。

- 「いのちを知る」
生命系全体の中にある私たちの「いのち」のあり方を確認する。
- 「いのちを育む」
宇宙・海洋・大地に宿るあらゆる「いのち」のつながりを感じ、共に守り育てる。
- 「いのちを守る」
危機に瀕し、人類は「分断」を経験する。「私」の中の「あなた」を認めるいとなみの行方に、多様ないのちが、それぞれに、護られてゆく未来を描く。
- 「いのちをつむぐ」
自然と文化、人と人とを紡ぐ「食べる」という行為の価値を考え、日本の食文化の根幹にある「いただきます」という精神を発信する。
- 「いのちを拓げる」
新たな科学技術で人や生物の機能や能力を拡張し、「いのち」を広げる可能性を探求する。
- 「いのちを高める」
遊びや学び、スポーツや芸術を通して、生きる喜びや楽しさを感じ、ともにいのちを高めていく共創の場を創出する。
- 「いのちを磨く」
自然と人工物、フィジカルとバーチャルの融和により、自然と調和する芸術の形を追求し、新たな未来の輝きを求める。
- 「いのちを響き合わせる」
個性あるいのちのいのちを響き合わせ、「共鳴するいのち」を共に体験する中で、一人ひとりが輝くことのできる世界の模式図を描く。これらのテーマ事業から得られる体験は、人びとにいのちを考えるきっかけを与え、創造的な行動を促すものとなるに違いない。他者のため、地球のために、一人ひとりが少しの努力をすることを始める。その重なり合い、響きあいが、人を笑顔にし、ともに「いのち輝く未来社会をデザインすること」につながっていく。
- 世界の人びとと、「いのちの賛歌」を歌い上げ、大阪・関西万博を「いのち輝く未来をデザインする場」としたい。
- これは、いのちを起点に、世界の人びとと未来を共創する挑戦にほかならない。

2020.7.13

公益社団法人2025年日本国際博覧会協会



Beyond SDGsの動的プロセスとしての「Better Co-being」

— アジェンダ2025の知的レガシー



宮田 裕章

大阪・関西万博テーマ事業プロデューサー 慶応義塾大学教授
1978年生まれ。慶応義塾大学 医学部教授。2003年東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻修士課程修了。同分野保健学博士(論文)。早稲田大学人間科学学術院助手、東京大学大学院医学系研究科 医療品質評価学講座助教を経て、2009年4月東京大学大学院医学系研究科医療品質評価学講座 准教授、2014年4月同教授(2015年5月より非常勤)、2015年5月より慶応義塾大学医学部医療政策・管理学教室 教授。2020年12月大阪大学 招へい教授就任。

Beyond SDGsの「プロトタイプ」としてのテーマウィーク

2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)の中核的な知的活動であった「アジェンダ2025」は、単なる国際会議の連続ではありませんでした。それは、2030年を期限とする現行の持続可能な開発目標(SDGs)の「次(Beyond SDGs)」に来るべき、新たなグローバル・アジェンダを模索するための**リビングラボ(生きた実験室)**であり、その「プロトタイプ」を構築する試みでした。SDGsが「貧困の根絶」や「飢餓の解消」に代表されるように、人類社会が存続するための「土台(Baseline)」、すなわち物質的・量的・制度的な課題解決に主眼を置いていたのに対し、7つのテーマウィークは、その土台の上で「いのちが真に輝く」とはどうか、という問いを立てました。言い換えれば、SDGsの枠組みでは捉えきれなかった内面的・質的・関係的な側面、すなわち「人間性の核心」へと焦点を移行させる試みだったと言えます。

この「Beyond SDGs」をめぐる世界規模の対話と知的な集約のプロセスを通じて、未来社会をデザインするためのOS(オペレーティング・システム)として機能しうる、**6つのキーワード(新基軸)**が浮かび上がりました。

対話から浮かび上がった6つのキーワード

1. Well-being (内面的充実)

SDGsが「健康や福祉」(SDG3)において主に「身体的健康」や「医療アクセス」に焦点を当てて

いたのに対し、本提言は「幸せの追求(内面的側面)」へと議論を拡張します。これは、SDG3の定義を遥かに超えるものであり、「孤独の克服」「心理的安全性」「自己実現」「尊厳の保持」といった内面的な充実を含む包括的な概念です。

2. 共感(Empathy)

SDGsが「パートナーシップ」(SDG17)において主に「制度的な協力」や「資金・技術移転」を重視したのに対し、本提言はそれに先行する倫理的な感受性を中核に据えます。それは、制度の前提として、人と人とのミクロな「共感や信頼」を社会の基盤に据え直す、「社会デザインの出発点」としての感受性です。これは「個の尊重」(1.1章)や、AI時代に人間が学ぶべき「人間らしさ」(2.1章)の核でもあります。

3. 文化(Culture)

SDGsが主に「文化遺産の保護」(SDG11.4)に見られるような、静的な「遺産保護」の側面から文化を捉えていたのに対し、本提言は文化の定義そのものを根本的に書き換えます。それは、分断を超えて他者と出会うための「動的な共鳴の装置」としての再定義です。文化は、論理や制度、言語を超える「共感と想像力を通じて人々を結びつける」社会の基盤インフラそのものとして位置づけられます(3.2章)。

4. つながり(Connection)

SDGsが「包摂的社会」(SDG10,16)において主に制度としての「包摂」を目指したのに留まらず、本提言は「社会的つながりの質」そのものを問い、「孤独や断絶をどう超えるか」を扱う明確な目

標とします。これは「孤独なきWell-being社会」(序章)の実現と直結し、7つのテーマウィーク全てに通底する核心的な課題として認識されました。

5. 共創(Co-creation)

SDGsが「協働(Collaboration)」(役割分担)を呼びかけたのに対し、本提言は、異なる主体が互いの前提を揺さぶり合いながら、予測不能な新価値を生み出す「プロセスそのもの」を社会の駆動力として位置づけます。これは、技術・文化・ビジネス・市民参加といった異なるセクターが「横断」し、化学反応を起こす「共感と共創の空間」(3.1章)の創出を意味します。

6. 継承(Succession)

SDGsが「2030年まで」という「行動計画」としての期限を持つことに対し、本提言は、価値観や物語を未来世代へと「紡ぎ直す」という、より長期的な時間軸を導入します。これは、単なる形式の「保存」ではない「動的な継承」(3.2章)であり、将来世代との対話と責任を含む視点です。

時代精神との共鳴と、本提言の核心的意義

ここで強調しておきたいのは、本提言の独自性が、これら6つのキーワードをゼロから「発明」したと主張する点にあるのではない、ということです。むしろ、これらの価値観は、国連が主導する「未来のための協定(Pact for the Future)」や、OECDの「Well-beingフレームワーク」など、世界の主要な議論においてすでに立ち上がりつつある時代精神そのものです。

例えば、国連の議論ではすでに「共感(empathy)」や「帰属意識(belonging)」、「文化間対話(intercultural dialogue)」が平和の礎として重視されています。OECDもまた、「社会的つながり」や「共感」を測定可能なWell-beingの構成要素として位置づけ始めています。

この時代精神を踏まえた上で、本提言が提示する核心的な意義は、これらの価値観を個別の「目標リスト」として並べるのではなく、それら全てを包括し、万博の理念である「多様にして1つに響き合う未来」を実現するための、一つの動的なOSとして再定義する点にあります。

それが、「Better Co-being」というコンセプトです。

結論:「Better Co-being」—「いのち輝く未来」の動的プロセス

「Better Co-being」は、従来の「Well-being」という言葉が持つ「個人の幸福な状態」という静的なニュアンスから脱却し、「より良く共に生きる」ための絶え間ない動的なプロセスへと、そのパラダイムを転換させます。

ここで問われているのは、「私が幸福かどうか」だけではなく、「多様な他者や自然、技術、未来世代と、どのような関係の質を編みながら共に在るのか」という問いです。これは、本提言が「人間中心主義を超え、自然や非人間的存在との共生を取り入れる」(3.2章)や、「アバターや身体拡張技術」(3.1章)との関係性、そして「将来世代との対話」(4.2章)にまで踏み込んだことと完全に一致します。

SDGsが「何を(What)」達成すべきかという目標(Goals)のリストであったとすれば、「アジェンダ2025」の知的レガシーは、「多様にして1つに響き合う未来」という理念のもと、「いかにして(How)」私たちは分断から「共鳴」を生み出し、多様性を保ったまま「共創」し続けるか、という「プロセス」と「価値観」そのものを提示するものです。

万博というリビングラボは、この「多様にして1つに響き合う未来」という動的プロセスの試行そのものであり、そこで見出された6つのキーワードは、そのプロセスを駆動するエンジンとして機能します。この「動的プロセス」への視点の転換こそが、既存のグローバルな議論に対して、大阪・関西万博とアジェンダ2025が提示しうる独自の知的レガシーであると考えています。

引用文献

1.Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development | Department of Economic and Social Affairs, <https://sdgs.un.org/2030agenda> 2.Pact for the Future - United Nations Summit of the Future, <https://www.un.org/en/summit-of-the-future/pact-for-the-future> 3.Towards an overarching conceptual framework for social and demographic statistics1 - UN Statistics Division,https://unstats.un.org/UNSD/Website/statcom/session_56/documents/BG-3f-Towards%20and%20overarching%20conceptual%20framework%20for%20social%20and%20demographic%20statistics-E.pdf 4.General Assembly Seventy-eighth session 76th plenary meeting Thursday, 2 May 2024, 10 a.m. New York - the United Nations, <https://docs.un.org/en/A/78/PV.76?direct=true> 5. Recognition - An OECD Perspective - NYU Center on International Cooperation, https://cic.nyu.edu/wp-content/uploads/1662/65/oeudpaper_recognition_-_an_oecd_perspective_.pdf 6.mental-health-framework.pdf,<https://www.ucop.edu/student-equity-affairs/programs-and-initiatives/mental-health-framework.pdf> 7.Child Well-Being in an Unpredictable World | Unicef, <https://www.unicef.org/innocenti/media/11111/file/UNICEF-Innocenti-Report-Card-19-Child-Wellbeing-Unpredictable-World-2025.pdf>

テーマウィークで 多彩ないのちが高まりあう未来社会を模索



中島さち子

大阪・関西万博テーマ事業プロデューサー、音楽家、数学研究者、STEAM教育家、ジャズピアニスト・数学研究者・STEAM教育家・メディアアーティスト
株式会社steAm CEO・株式会社STEAM Sports Laboratory 取締役
音楽・数学・STEAM・教育・メディアアートなどの分野で、国内外で多彩な活動を展開する。著書に『人生を変える「数学」そして「音楽」』『音楽から聴こえる数学』（講談社）絵本『タイショウ星人のふしぎな絵』（文研出版、絵：くすはらじゅんこ）他、CD「Rejoice」、"希望の花"、"妙心寺退蔵院から聴こえる音"他。国際数学オリンピック金メダリスト（日本人女性唯一）。

「テーマウィーク」は、ドバイ万博で生まれた、世界中の人々が地球的課題を共有し、対話と共創によって「いのち輝く未来社会」を生み出すための祝祭的実験です。世界中が半年間集う万博において、多様な出会いと対話、そして協奏（遊びや体験）を生み出すこと。国や立場、世代や文化の分断を越え、互いの声を聴き、いのちを高めあいながら、未来を共につくる—その精神がテーマウィークの根底にミyakミyakと流れています。

クラゲ館チームはこのテーマウィークの考え方に深く賛同し、文化・教育・平和・人権・地球・多様性を横断し、音楽や芸能、科学やアート、若者や市民の探究をつなぐ多彩なテーマウィークの企画を展開してきました。

Women's Pavilion "WA"では2日間終日で8つのトークを行いました。テーマウィークスタジオでは、5日間x2トークを開催（Agenda 2025 を含む／日英）。さらにはクラゲ館でも、テーマウィークとしては異色ながらも8回のワークショップ・トークを行いました。他クラゲ館が実施した多くのイベントにもこのテーマウィークの精神が流れているという過言ではないと思います。

開幕直後の4月26日（WA）には「21世紀の文化いのちを考える会」「世界をつなぐ歌・踊り」を開催（未来への文化共創ウィーク）。山極壽一氏、鈴木寛氏、ウスビ・サコ氏、カナダ館政府代表ローリー・ピーターズ氏らや音楽家と共に、AI時代の

人文知と文化協奏の意義を語り合い、KURAGE Bandや山本能楽堂と共演。問いといのちの協奏の場としての万博のはじまりを祝いました。前日のクラゲ館では、山本能楽堂による能の装束や楽器に触れる体験型ワークショップが行われ、伝統芸能が未来の創造教育へとつながる瞬間が生まれたと同時に、KURAGE Band による韓国、チベット、セネガル、日本など世界の"文化"を音楽や踊りで体感する瞬間を生み出しました。

6月クラゲ館では皆でオリジナルなトートバッグなどをデジタルの力で多彩に生み出す「ファッションチュール:We are ALL Designers!」（食と暮らしの未来ウィーク）や、サウジアラビア館との伝統織物ワークショップ"Power of Play"（健康とウェルビーイング）を開催し、創造性の民主化を实践。7月のテーマウィークスタジオでは、世界中のYMCAリーダーが集った「World Urban Network」（健康とウェルビーイング）や、特にクラゲ館の主たるテーマの一つ「学びと遊び」ウィークでは、教育と多様性を主題として多くの当事者や文科省や世界の教育関係者が集い躍動的な議論が交わされた「Inclusive JAM:We Are All Minorities!」（7月27日）、翌日「AGENDA2025」では自見はなこ参議院議員、盲聾の福島智教授、国連・ユネスコ関係者、MITメディアアーティストらとともに、「多様な個性を生かす学び・遊び」を議論。違いや弱さを価値に変えていく、私たち

は皆マイノリティ!と力強く楽しく発信。7月18日には病院で入院中のこどもたちや全国の福祉施設をつなぎ、クラゲ館ツアーとともに、みんなでものづくり!万博に来られなくても"万博を創る"に多くの方が参画してくれました（6月21日にも同様内容をキッズアートプロジェクトとして先行実施）。平和と人権ウィーク開始日8月1日（WA）には、文化とインクルージョン、STEAM×Genderにまたがる4セッションを日英織り交ぜて実施。優れた文化芸術者や車椅子アーティスト、福祉関係者、イタリアやクロアチア、リベリアの方が集い、人権や文化について語りました。阿波木偶箱回しやリベリアの盲目のシンガーとKURAGE Bandの共演では、珠玉の多文化が芸能によって溶け合いました。午後のSTEAMトークでは、資生堂、OECD、ロボット研究者らが登壇し、オーストラリア、ヨルダン、マレーシアからも登壇。今年資生堂とsteAmの共催で実施した"STEAM Girls Award"の報告とともに、女性の探究と多様性の価値、理系×文系、感性×論理の融合を語り合いました。8月4日クラゲ館では、steAm 大学生若手チームによる「スライム楽器ワークショップ」が開かれ、子どもたちが自らスライムを導体に音を奏でる体験を通して、遊びと科学が融合する学びの姿を体感。その夜の「いのちを考える会」（テーマウィークスタジオ）では、LGBTQ+活動家、脳科学者、文学者、先住民リーダーら（マオリやバカ族、カナダのメティス）や元国立民族学博物館館長吉田憲司氏が集い、人間の尊厳と文化の多様性について深く語り合いました。

8月7日は「World Student Discussions」として、世界中の高校生・大学生が平和と人権をテーマに議論し、次世代の国際的な教育ネットワークを構築。また、クラゲ館では、9月19日（地球の未来と生物多様性ウィーク）AIや折り紙を用いて未来社会を描く創造的ワークショップを開催し、10月4日「EXPO未来の学び・遊び:Beyond SDGs」（SDGs+Beyondいのち輝く未来社会ウィーク）では、鈴木寛教授と中島にて "卒近代の学び・遊び"を提案し、アートを基調とした、新しい学際的・創造的なSTEAM教育のあり方と社会のビジョンを提示しました。

こうしてクラゲ館のテーマウィークは、分断を超えて世界をつなぐ「出会い・対話・協奏」の場として、多様ないのちの輪を広げてきました。文化や科学、アートや教育、老若男女、障害の有無、国籍の違いを超えて響き合うこれらの営みこそが、未来の遊び・学び、未来社会・文化の土壌だと信じます。今後も、クラゲチームは万博後も、これまでに築いた国際ネットワークを活かし、世界中のいろんな立場の方をつなぐ場を生み出し、教育、福祉、医療、ビジネス、芸術、政治が重なり合い、いのちを高め合う社会のモデルを具体化していきます。万博で生まれた出会いの火花が、分断を越えて灯り合い、やがて世界を照らす希望の光となるように。

大阪・関西万博では、「共創」を合い言葉に多彩な取り組みを行っています。その中の一つが「TEAM EXPO 2025」です。TEAM EXPO 2025は、市民団体や学生サークル、企業、自治体など、さまざまな人々が、大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」の実現に向けて、アイデアや活動の発信、交流などを行う取り組みです。万博開催時には約2,300の活動と、それらの活動を支援する430のパートナーが集まりました。

そして、このTEAM EXPO 2025もテーマウィークに参加し、会場内のTEAM EXPO パビリオンにおいて多彩なプログラムが実施されました。

世界を変えるのは何か? ~ベストプラクティスに学ぶ未来へのヒント~
大阪・関西万博ベストプラクティス

若者主導の未来社会デザイン:「Co-Lab Gears」~全世界・全世代・大共創時代に向けて~
株式会社リンクアンドモチベーション

共感に基づく経済、共助の社会を創る - みんなでどうつくるか、語り合おう
大阪大学社会ソリューションイニシアティブ

「科学技術と多様な文化の対話」
副題「持続可能な未来を拓く共感」
ファラデーセミナー実行委員会(日本)

-地球の未来を考える- 気候変動、脱炭素のため企業が取り組むこと
アジア太平洋トレードセンター株式会社

新化する起業家の育成と中高生を中心とした起業家予備軍への起業機運醸成事業
公益社団法人関西ニュービジネス協議会

TAKANAWA GATEWAY CITYのまちづくりを通して、人々の100年先の心豊かな暮らしに向けた
「地球益」の実現に取り組むプログラム
JR東日本(TAKANAWA GATEWAY CITY)



フューチャーライフ ビレッジ



共感に基づく経済、共助の社会を創る
- みんなでどうつくるか、語り合おう
大阪大学社会ソリューションイニシアティブ
2025.6.8 TEAM EXPOパビリオン



「科学技術と多様な文化の対話」
副題「持続可能な未来を拓く共感」
ファラデーセミナー実行委員会(日本)
2025.9.17 TEAM EXPOパビリオン



- 地球の未来を考える -
気候変動、脱炭素のため企業が取り組むこと
アジア太平洋トレードセンター株式会社
2025.9.17 TEAM EXPOパビリオン



世界を変えるのは何か?
~ベストプラクティスに学ぶ未来へのヒント~
大阪・関西万博ベストプラクティス
2025.10.7 テーマウィークスタジオ



新化する起業家の育成と中高生を中心とした起業家予備軍への起業機運醸成事業
公益社団法人関西ニュービジネス協議会
2025.10.10 TEAM EXPOパビリオン



TAKANAWA GATEWAY CITYのまちづくりを通して、人々の100年先の心豊かな暮らしに向けた「地球益」の実現に取り組むプログラム
JR東日本(TAKANAWA GATEWAY CITY)
2025.10.11 TEAM EXPOパビリオン



若者主導の未来社会デザイン:「Co-Lab Gears」~全世界・全世代・大共創時代に向けて~
株式会社リンクアンドモチベーション
2025.10.12 TEAM EXPOパビリオン

現代の万博は、経済外交やビジネス交流の場としての色合いを強めています。大阪・関西万博では、早い段階から企業や団体に参加を呼び掛け、パビリオンや未来社会ショーケース、テーマ事業やイベント、運営、会場整備への協賛等、多彩な機会を設けたことで、数多くの企業・団体の参加が実現しました。そして、それらの企業・団体もテーマウィークに参加し、多彩なプログラムを実施しました。

女性×健康×キャリア 第1部 地球女性からだ会議® / 女性の健康フレンドリー宣言企業2025授賞式
一般社団法人シンクパール

女性×健康×キャリア 第2部 働くことの未来を描く: ウェルビーイングとともに by サクヤワーキングコミュニティ
サクヤ ワーキング コミュニティ

「だれもがトイレ内で生理用品をとれる社会を!」考えるシンポジウムとワークショップ
大阪大学MeWプロジェクト

みんなで考える、未来の“食と農業” ~未来の種は、いまにある~
株式会社クボタ

住友館 テーマウィーク
住友館

次世代アグリキッズが未来を創る KUBOTA AGRI KIDS SUMMIT
株式会社クボタ

第4回全国高校生英語プレゼンテーションキャンプ GEM Talks 2025
5 Crowns Japan

教育を通じたエンパワメント CWAJ 女性が女性を支える~パネルディスカッション~
一般社団法人 CWAJ

女性が輝く「めがねのまちさばえ」~女性のエンパワメントがよりよい世界をつくる~
鯖江市

知れば知るほど納得!ジェンダード・イノベーション
国立大学法人お茶の水女子大学

インクルージョンと対話:対話が拓く未来の可能性
筑波大学

「親子で考えよう!ジェンダーワークショップ」
株式会社ポーラ

真のダイバーシティとWA!?!~多様な人・理念・価値観が集まる大学キャンパスを舞台として~
関西大学

女性リーダーが目指す教育・街とは? 「WA812」で世代を超えて声を挙げ、アクション宣言しよう①
経済界のダイバーシティを加速するには? 「WA812」で世代を超えて声を挙げ、アクション宣言しよう②
分野横断ナレッジシェア大会 「WA812」で世代を超えて声を挙げ、アクション宣言しよう③
株式会社 羽生プロ

いのちのあかし
大阪・関西万博テーマ事業 いのちを守る(河瀬プロデューサー)

未来をつくるジェンダー意識-若者が考える"性別役割"のいま
内閣府男女共同参画局

e-メタン・バイオガスWEEK
一般社団法人日本ガス協会

“

自分が心から納得した選択こそ正しい正解になると思います。



塚田 雅子 伊藤忠商事株式会社 開発・調査部 関西開発調査室リーダー
未来への文化共創 ウィーク「女性×健康×キャリア 第2部 働くことの未来を描く:ウェルビーイングとともに by サクヤワーキングコミュニティ」
2025.4.27

“

「地球は子孫から借りているものである」と言われますが、そうであればこれを綺麗にしてお返しするのは当然だと思います。



工藤 禎子 株式会社三井住友銀行 代表取締役兼 副頭取執行役員
健康とウェルビーイング ウィーク「住友館 テーマウィーク」
2025.6.25

“

「教育」という風に考えると時間がかかってしまいます。産業界が突っ走ると教育も追いついてきます。



吉平 健治 株式会社Interbeing 最高技術責任者、株式会社シンクパール 取締役 Chief Development Officer (CDO)
未来への文化共創 ウィーク「女性×健康×キャリア 第1部 地球女性からだ会議®/女性の健康フレンドリー宣言企業2025授賞式」
2025.4.27

“

循環という言葉を使うのは簡単ですが、その中に自分も入って循環の中の担い手になることはとても大切です。



野口 伸 北海道大学大学院農学研究院 農学研究院長
学びと遊び ウィーク「次世代アグリキッズが未来を創る KUBOTA AGRI KIDS SUMMIT」
2025.7.25

“

食べ物しかり地球環境しかり健康しかり、家族とか友人もなくなるとその大切さみたいのはやっぱり想像できないので、それをいかに想像するかがより楽観的なユートピアにつがるんじゃないか。



石川 伸一 公立大学法人宮城大学 食産業学群 食と暮らしの未来 ウィーク「みんなで考える、未来の“食と農業” ~未来の種は、いまにある~」
2025.6.8

“

理学療法士は体の勉強をされていて体を動かすトレーニングができるのだけど、仕事の80%はコミュニケーションです。



遠藤 謙 ソニーコンピュータサイエンス研究所 シニアリサーチャー、一般社団法人xDiversity理事
平和と人権 ウィーク「インクルージョンと対話:対話が拓く未来の可能性」
2025.8.2

テーマウィークコネクトとは、万博会場で開催される、テーマウィークの「8つのテーマ」に関連した地球規模の課題解決に向けた取り組みです。テーマウィークの会場外関連プログラムとして、日本全国から参加することができるようにしました。テーマウィークコネクトにより、地球規模の課題解決に向けて、全国一丸で取り組むことで万博開催の意義を広く普及させていくことを狙いました。

EDIX (教育総合展) 関西
EDIX実行委員会 (企画運営:RX Japan株式会社)

新価値創造展 in 未来モノづくり国際2024
独立行政法人中小企業基盤整備機構

大阪・関西万博 テーマウィークイベント
国際ロータリー第2660地区ロータークラブ

**「大阪・関西万博で世界に伝えたいこと
ー持続可能な社会と経済とはー」**
独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所/
アジア太平洋研究所(APIR)

EDIX (教育総合展) 東京
EDIX実行委員会 (企画運営:RX Japan株式会社)

2025年度 人工知能学会全国大会 (第39回)
一般社団法人人工知能学会

第5回 サステナブルマテリアル展(高機能素材Week内)
高機能素材Week事務局 (RX Japan株式会社)

EDIX (教育総合展) 大阪
EDIX実行委員会 (企画運営:RX Japan株式会社)

Japan Health
Japan Health 実行委員会

国際ウェルネスツーリズムEXPO
RX Japan 株式会社

**オランダ万博プログラム「食の未来」- シンポジウム
「未来の食と健康」**
在日オランダ王国大使館、東部オランダ開発公社
(Oost NL)

Global Healthcare Challenge (GHeC)
独立行政法人日本貿易振興機構(ジェトロ)、経済産業省

インターフェックス Week
インターフェックスWeek 事務局 (RX Japan株式会社)

IVS 2025
IVS KYOTO実行委員会

**社労士会主催「ビジネスと人権デュー・ディリジェンス」
シンポジウム～人権尊重の課題と持続可能な社会の実現～**
大阪府社会保険労務士会

WebX Fintech EXPO powered by SBI Group
一般社団法人WebX実行委員会

都市イノベーションの未来を創るAIソリューション
Startup Island TAIWAN

Time For Peace
国連パビリオン、ピースポート

関西アフリカビジネスフォーラム
独立行政法人日本貿易振興機構(ジェトロ)、経済産業省

創造的復興サミット
兵庫県

オートモーティブ ワールド
オートモーティブワールド 事務局
(RX Japan株式会社)

SMART ENERGY WEEK ～スマートエネルギー WEEK～
RX Japan株式会社

**大阪・関西万博「平和と人権ウィーク」イベント
「責任あるバリューチェーンの明るい未来に向けて:
ビジネスリーダーが語る人権尊重の実践」**
国際労働機関 (ILO) 駐日事務所・経済産業省

第7回RD20国際会議
国立研究開発法人 産業技術総合研究所

LNGバリューチェーンとカーボンニュートラル社会
大阪ガス株式会社

KYOTO 地球環境の殿堂 国際会議・未来会議
「KYOTO地球環境の殿堂」運営協議会、京都環境化学術フォーラム

水素関係会議
資源エネルギー庁水素・アンモニア課

持続可能燃料関係会議
資源エネルギー庁燃料供給基盤整備課

第7回カーボンサイクル産学官国際会議2025
経済産業省、国立研究開発法人新エネルギー・
産業技術総合開発機構(NEDO)

**Innovation for Cool Earth Forum 第12回年次総会
(ICEF2025)**
経済産業省、国立研究開発法人新エネルギー・産業技
術総合開発機構(NEDO)

Local X STAGE 2025
近畿経済産業局

森とエネルギーとわたしたち
一般社団法人日本ガス協会／電気事業連合会

第1回京都会議
一般社団法人京都哲学研究所

BPCラウンドテーブル2025 in 大阪
大阪ビジネスパートナー都市交流協議会

**未来を変える選択を。今、私たちができること。
～大阪・関西万博をきっかけとして作るサステナビリティ
レガシーとは～**
EY Japan株式会社



Japan Health
Japan Health 実行委員会
2025.6.25 - 27



Global Healthcare Challenge (GHeC)
独立行政法人日本貿易振興機構(ジェトロ)、経済産業省
2025.6.25,26



Time For Peace
国連パビリオン、ピースポート
2025.8.10



関西アフリカビジネスフォーラム
独立行政法人日本貿易振興機構(ジェトロ)、経済産業省
2025.8.23

テーマウィーク・プログラムの意義



橋爪 紳也
2025年日本国際博覧会テーマウィーク・プログラム監修/アドバイザー
大阪公立大学研究推進機構特別教授 工学博士

1 テーマウィーク・プログラムの意義

2025年10月13日、2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）の閉幕にあたって、「大阪・関西万博宣言」が公表されました。そこにあって「SDGs+Beyond」で締めくくられた8つのテーマウィークを軸とする議論の場が果たした役割が特記されました。宣言文では、国内外の有識者や政府・企業関係者から来場者までを含む多様なステークホルダーが、あらゆる「いのち」の固有の輝きを解き放つ未来社会とはどうあるべきか、この世界に脈々と受け継がれてきた貴重で多様な「いのち」を未来に残すために我々は何をすべきか、といった問いに関して活発な対話が行われ、複層的な議論を重ねたことを評価しています。従来の博覧会では、出展者ごとのプログラムに終始しがちでした。対してテーマウィーク・プログラムでは、主催者、参加国、企業、市民団体などが特定の主題のもとで連携しながら、対話や交流を行います。新たな方法論の意義が認められたということだと考えます。

2 ドバイ博から大阪・関西万博へ

大阪・関西万博におけるテーマウィーク・プログラムは、先行して実施されたドバイ国際博覧会のテーマウィーク・プログラムを継承するものです。ドバイ博は「心をつなぎ、未来を創る」をテーマに掲げ、2021年10月に開幕しました。世界的なパンデミックのもと、1年間、会期を遅らせてにも関わらず、コロナ禍での開催となりました。リアルで博覧会の機運醸成をはかることができないなかで、世界中の専門家、オピニオンリーダー、関係者がリモートで集う「バーチャル・プレ・エキスポ・トーク」が企画されました。主要テーマに関して、60カ国以上と80以上の国際機関が参加、平均45分の対話が100回以上、実施されました。この試みが博覧会場のリアルな会場でのテーマウィーク・プログラムに継承されました。企画にあたっては、文化交流と多様性への理解を重視する「文化分野」、自然との調和を促進する環境管理のベストプラクティスを紹介する「持続可能性」、社会的包摂と公平性を焦点にエンパワーメントを促進する「社会開発」、経済成長と協働によるイノベーションに取り組む「経済分野」の4分野を主要なトラックとして、プログラムが構成されました。ドバイ博のテーマウィーク・プログラムでは、「社会と

環境のテーマ」の枠組みで、気候と生物多様性、食料・農業と生活、都市開発と農村開発、寛容と包摂性、知識と学習の5テーマ、「つながりとウェルビーイングのテーマ」の枠組みで、旅行とつながり、宇宙探査、グローバル目標週間、健康とウェルネス、水の持続可能性の5テーマ、あわせて10のテーマウィークが設定されました。6か月の会期中に会場内外で、142カ国が関与する229件のイベントが行われ、1万9千人以上が対面で、2,900万人以上がバーチャルで参加しました。会場内で展開されたテーマウィーク・プログラムのスタンプリューも人気を集めていました。

3 万博を越えて繋がる

大阪・関西万博では、ドバイ博のテーマウィーク・プログラムの理念と方法論を参照しつつ、独自の主題設定を加味しながら、8つのテーマに沿った事業を展開しました。いずれのテーマにおいても充実した議論がなされましたが、なかでも8月上旬から中旬に設定された「平和と人権ウィーク」は、大阪・関西万博独自のプログラムとして評価されて良いものです。国連パビリオンなど会場内の各所で、平和と人権の尊重の重要性を主題とするシンポジウムや催事が多く実施されました。第二次世界大戦の終結から80年の節目にあたる年次であるからこそ、意義のある主題であったと考えます。世界各地でさまざまな課題が顕在化するなか、人と人とのリアルな国境を越えた対話が重要であることは言うまでもありません。そこにあってテーマウィーク・プログラムは、政府、企業、市民社会、そして地域社会など、多様なステークホルダーを結集し、包括的で影響力のある対話を促進する機会を用意します。さらに博覧会の期間中に交わされた対話を契機として、地球規模の課題に対する具体的な解決策が生み出され、変革をもたらす新たなムーブメントが起きることも想定されます。私はドバイ博から理念と方法論を継承したテーマウィーク・プログラムこそ、大阪・関西万博のもっとも重要なソフトレガシーであると考えます。次の国際博覧会で、さらに未来の国際博覧会にあって継続して実施されることで、テーマウィーク・プログラムが国際博覧会において不可欠な対話事業として定着することを期待しています。

プログラム数

429 件

トラック1: 公式参加者 189件
トラック2: 日本国政府・自治体等 50件
トラック3: 2005年日本国際博覧会協会 129件

[内訳]

主催プログラム 27件 (内、VISIONARY EXCHANGE 3件)
共創プログラム 25件
参加プログラム 49件
シグネチャープログラム 28件

トラック4: TEAM EXPO 2025 7件
トラック5: 万博参加企業 19件
テーマウィークコネクト: 35件

参加者数

7,030,265 人

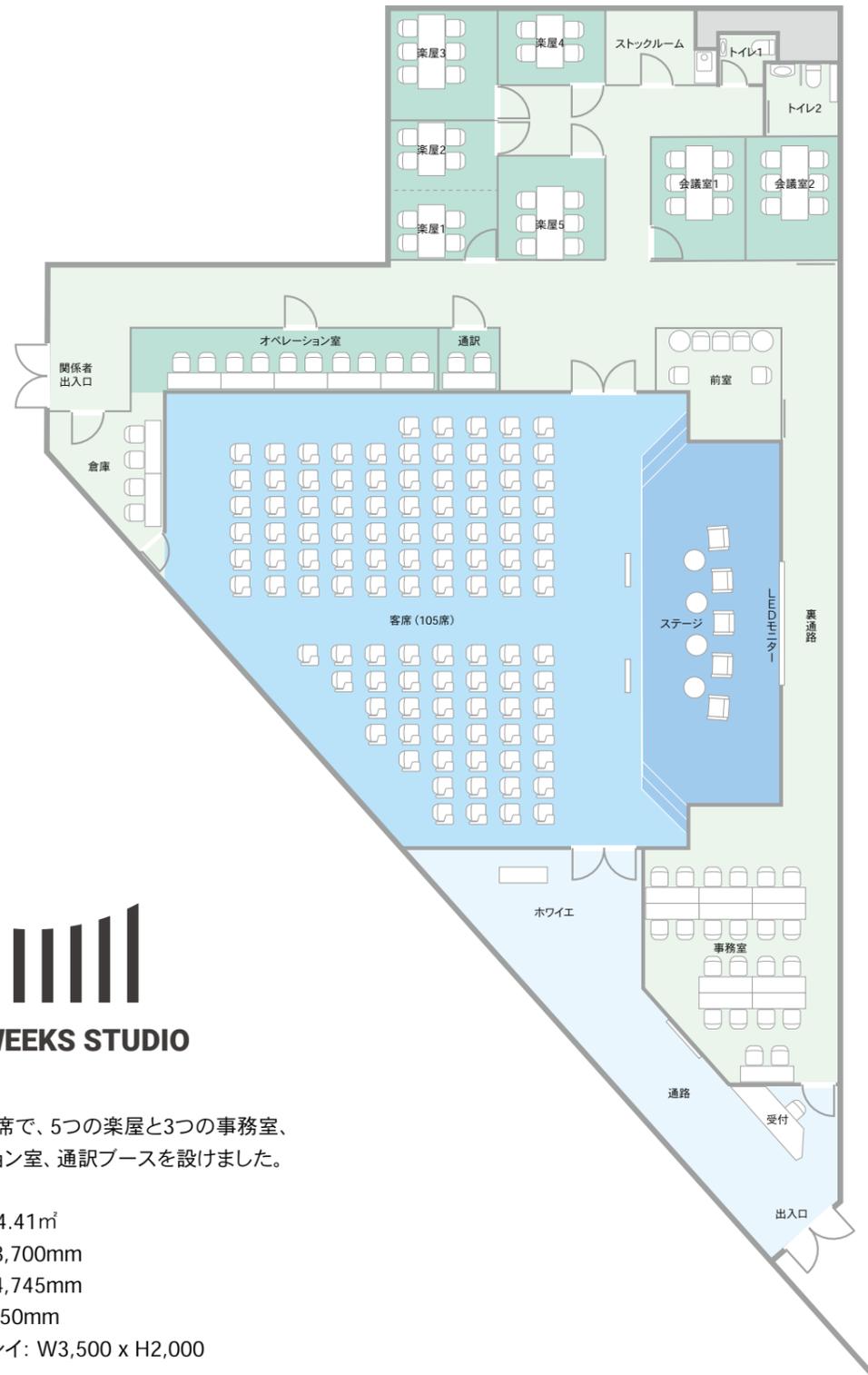
リアル参加者数 1,608,543人
- テーマウィークスタジオ 11,975人
- パビリオン 185,654人
- EXPOメッセ 1,076,198人
- その他会場内施設 91,600人
- 会場外 243,116人
バーチャル参加者 5,421,722人
- ライブ配信視聴者 リアルタイム 86,832人
- アーカイブ映像視聴者 アーカイブ 3,467,027人 (2025年11月末時点)
- ウェブレポートアクセス数 1,867,863人 (2025年11月末時点)

登壇者数

2,653 人

アジア:1,772人 (内、日本:1,488人)
欧州:514人
アフリカ:95人
中東:94人
北米:86人
中南米:66人
大洋州:26人

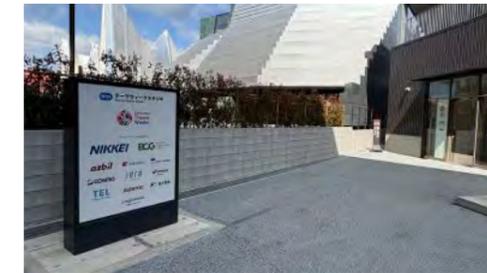
テーマウィークの数多くの対話プログラムを実施するための拠点として、「テーマウィークスタジオ」を万博会場内に設けました。8つのウィーク期間中、一日を午前、午後、夜と3つの時間帯に分けてプログラムを行いました。テーマウィークスタジオは、客席で一般の万博来場者や招待客が観覧できるほか、ライブ映像をバーチャル万博でも配信しました。



THEME WEEKS STUDIO

客席数は105席で、5つの楽屋と3つの事務室、オペレーション室、通訳ブースを設けました。

延床面積：484.41㎡
 客席天井高：3,700mm
 諸室天井高：4,745mm
 ステージ高：450mm
 LEDディスプレイ：W3,500 x H2,000



テーマウィークスタジオ入口



EXPOメッセ「WASSE」入口



テーマウィークスタジオ ステージ



テーマウィークスタジオ オペレーション室



テーマウィークスタジオ 事務室



プログラム開演時には、8つのテーマと問いを伝える約1分間のオープニング映像を上映しました。



テーマウィークスタジオ 客席

テーマウィークは、万博170年の歴史における一つの到達点



石川 勝
大阪・関西万博 会場運営プロデューサー、プランナー、プロデューサー
株式会社シンク・コミュニケーションズ代表取締役
1963年札幌市生まれ。プランナーとして、イベントプロモーション、文化・商業施設開発、コミュニケーションデザイン分野で実績を積み、2004年株式会社シンク・コミュニケーションズ設立。博覧会や展示会を数多く手掛け、2005年愛知万博ではチーフプロデューサー補佐として基本計画策定に従事、ロボットプロジェクト、愛・地球広場、極小に入場券をプロデュースした。

テーマウィークの誕生

2022年1月、私はドバイ万博の会場を訪れました。目の前に現れたのは、アラベスク模様が施されたアル・ワスル・ドームを中心に、花びらのように広がる美しくとても機能的な会場でした。まだコロナ禍の真っ最中だということを忘れてしまうほどに、会場には大勢の人が溢れ、にぎわいに満ちていました。個人的でスケール豊かなパビリオン、華やかなイベント、綿密に計画された会場運営、どれも素晴らしい出来映えでした。そして、その中において、もっとも私の心捉えたのが、テーマウィークとの出会いだったのです。テーマウィークは、万博に参加する世界中の国々と地球的課題の解決に向けて連携することを目的としたプログラムです。予め定めた10のテーマについて、会期中のおよそ1週間の期間、会場全体でそれぞれのテーマについて対話やビジネス交流を行っていました。私は多くの博覧会を体験してきましたが、ドバイ万博で見たこのテーマウィークはこれまでに見たことがありませんでした。そして、この素晴らしい取り組みを、大阪・関西万博が引き継ぎ、さらに発展させて次の万博へと受け渡すことが、自分の使命のように思えたのです。帰国するなり早々に、各分野で万博に関わるステークホルダーに働きかけたところ、すぐに多くの支持をいただくことができました。こうして、大阪・関西万博におけるテーマウィークがスタートラインについたのです。

プロジェクト始動

博覧会協会に担当部門が置かれ、プロジェクトが正式に始動すると、私たちはまず最初にテーマを決める作業から着手しました。テーマの設定にあたっては、幅広い領域に渡る課題を10個以内にまとめることを目標としました。テーマ事業プロデューサーや内閣官房、経済産業省の担当者等とも議論を重ね、万博担当大臣を始め各分野の専門家にも意見を聞きながら、大阪・関西万博のテーマ、サブテーマと整合するよう、編集や表現を試行錯誤しました。その結果、サブテーマ「いのちを救う」の観点から「文化」<コミュニティとモビリティ><食と暮らし>を、「いのちに力を与える」の観点から「健康とウェルビーイング」<学びと遊び>を、「いのちをつなぐ」の観点から「平和と人権」<地球の未来と生物多様性>を定め、最後に万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」の観点から「SDGs+Beyond」を加え、全部で8つのテーマを定めました。さらに、各テーマには幅広い課題が包含されるため、主な課題をテーマ領域として併記することとしました。加えて、多彩なプログラムが行われる中で議論の焦点が拡散しないよう、それぞれのテーマに「問い」を設けることとしました。また、これらのテーマと直交する切り口として、<経済・イノベーション><人口動態・少子高齢化><次世代・インクルージョン>の3つのクロスカッティングイニシアチブを設けました。テーマの設定にあたっては様々な議論を重ねてきましたが、特に

難しかったのは、日本と真逆の課題に直面している国や対立の当事者となっている国などが存在している中で、どのようなテーマ設定が万博の場において行う対話としてふさわしいかを判断することでした。たとえば人口問題について見ると、日本は少子化に伴う人口減少が社会課題となっていますが、世界全体で見ると人口は増加を続けており、グローバルサウスには人口増大が課題となっている国も多くあります。「平和」をテーマに加えることについては、現実に紛争に晒されている国同士が互いの主張をぶつけ合ってさらなる対立を生むリスクもありました。こうした懸念については特に慎重に捉え、専門家の意見に耳を傾けながらテーマの設定に取り組んできたのです。

事業化に向けた取り組み

テーマの設定が終わると、次は事業化に向けた取り組みに着手しました。まずはテーマウィークの事業構造についてのフレームワークを行い、次にそれを実現するための協賛プロモートに取り組まれました。ドバイ万博のテーマウィークは、「文化」や「社会の発展」「持続可能性」「ビジネス」「建国100周年」など、事業の目的別にトラックを分けていました。これに対し、大阪・関西万博では、プログラムの実施主体別にトラックを設定しました。トラック1は万博の公式参加者、トラック2は政府や自治体等、トラック4はTEAM EXPO 2025、トラック5は万博の出展企業とし、主催者はトラック3に位置づけました。さらに、万博会場外で行うプログラムとしてテーマウィークコネクトを設けました。トラック3以外はそれぞれの実施主体が独自に企画し、場所や予算を確保して行うことになるので、テーマウィーク全体の広報や事務局業務と、トラック3で行うプログラムの企画、運営、またそれらに必要な財源の確保が私たちの役割となりました。テーマウィークは遅れてスタートしたこともあり、博覧会協会の予算はほぼゼロの状態であったため、テーマウィークに賛同して協力してくれる企業を求めて協賛プロモートを行う必要があったのです。この当時、すでにパビリオン出展企業は決まっており、その他にも未来社会ショーケースやテーマ事業協賛などで万博を支援してくれる多くの企業の受け入れ先が決まっている状況にあり、テーマウィークへの協賛活動は困難を極めることを覚悟していました。ところが、こうした予想に反して、日経新聞社とポストンコンサルティンググループが早々に全体協賛者へ

の参加を表明していただき、さらに、Astemo、アズビル、出光興産、小野薬品工業、コスモエネルギーホールディングス、JERA、電源開発、東京エレクトロン、富士電機、三菱ロジスネクストの各社が相次いで全体協賛者としての参加を表明してくれたのです。このようにテーマウィークの意義についてたくさんの企業から支持をいただいたことは、私たちにとって何よりの励みとなりました。

アジェンダ2025

トラック3で実施する主催者によるプログラムは、「アジェンダ2025」と名づけました。アジェンダ2025は、全てのテーマにおいてクロスカッティングイニシアチブを切り口とする対話プログラムを実施することとし、主催者自身が企画・実施する主催プログラムと、外部の団体と連携して行う共創プログラム、企業や団体がテーマを選んで個別に協賛参加する参加プログラムの3つのカテゴリで構成しました。主催プログラムの企画においては、博覧会協会と全体協賛者が連携して取り組むことで、各協賛者が持つ専門分野の知見やネットワークを取り入れることができました。中でもポストンコンサルティンググループには、企画づくりの実務においても支援していただき、各テーマに定めた「問い」に沿って目指すべき将来像を描き、それを実現するためのプロセスを導くシナリオプランニングの手法によって対話プログラムのシナリオ設定と登壇者候補の選出を行うといった、質の高いプログラム企画を支援していただきました。また、共創プログラムについては、「世界経済フォーラム」の20-30歳代の若者により構成されたグローバル・シェイパーズ・コミュニティの日本のメンバーが中心となって立ち上げたシェイプ・ニューワールド・イニシアチブと連携し、大阪商工会議所の支援もいただきながら、8つのテーマ全てにおいて、世界の若者による対話を実現しました。

テーマウィークスタジオ

テーマウィークの拠点として会場内にテーマウィークスタジオを設けることとしました。元々計画されていなかった施設のため、会場内でスペースを確保できるかが課題となりましたが、幸いにして営業施設用に確保していたスペースの一部をテーマウィークスタジオに転用することができました。テーマウィークスタジオは、博覧会協会が主催するアジェンダ2025のプロ

グラムを行うことはもちろんのこと、パビリオン等自らの拠点にこうしたプログラムを実施するスペースを持たない公式参加者や万博参加企業、政府・自治体等も利用できるようにしました。スタジオの計画にあたっては、一般来場者がリアルで聴講できるよう105席の客席を設け、リアルタイムでのオンライン配信、アーカイブ用の撮影、登壇者のオンライン参加、日英同時通訳等が可能となる設備を備えることとしました。建物自体は仮設の倉庫仕様であったため、防音性を確保するためにスタジオは二重の空間構成とし、ステージ背面には大型のLEDディスプレイを配置しました。また、バックヤードには、前後のプログラムの登壇者の人数に対応できる十分な数の楽屋も備えました。同時通訳については、一般的な同時通訳設備と同様の通訳者ブースを設けましたが、観客や登壇者が用いるレシーバーには専用機器を用いず、利用者自身のスマートフォンを利用できるようにしました。スタジオ内に掲示してある二次元コードをスマートフォンで読み取ると、専用アプリを用いずに通常のブラウザから専用サイトにアクセスして翻訳された日本語或いは英語の音声を自身のイヤホンで聞く仕組みです。また、これとは別にステージ脇に自動翻訳したテキストの表示も行いました。これは未来社会ショーケース事業デジタル万博としてTOPPANの協賛による自動翻訳システムを用いたものです。情報通信機構（NICT）を中心としたコンソーシアムが開発した国産の翻訳エンジンをを用いたシステムで、話者の話す言葉を音声認識技術によってテキスト化し、機械翻訳して表示してくれます。少ない遅延で精度の高い翻訳を実現してくれました。

協会職員と事務局スタッフの奮闘

テーマウィークスタジオは、できるだけ多くのプログラムを実施できるよう、1日あたり3枠を設けることとしました。テーマウィークの期間中毎日、3つのプログラムを入れ替えながら、ステージ進行、登壇者対応、観客対応、画面投影やオンライン登壇の準備、撮影・配信、記録等の業務を行うことは、担当する協会職員や事務局スタッフにとって、とても負荷の大きいたいへんな作業でした。加えてプログラム実施者は海外の参加者が多く、言語や文化の違いも障害となりました。本番実施後には、速やかに記録映像を編集し、字幕を付けてオンライン公開を行い、テーマウィーク専用サイトには対話の要約や開催時の写真を公開する

必要がありました。毎日実施する新たなプログラムに対応しながら、同時進行で実施済みのプログラムの公開に対応していくことも大きな負担となっていました。しかしながら、こうした困難を乗り越えて会期中400以上のプログラムを実現できたことは驚くべき成果であり、大阪・関西万博として誇ることでできる実績だと思えます。改めて関係者の皆さまに敬意を表したいと思います。

400以上のプログラムを実現

前述の通り、テーマウィークは万博会期中に400以上のプログラムを実施しました。ドバイ万博の229を大きく上回る対話を実現できたことは、その数自体に大きな意味を持つ訳ですが、同時に一つ一つのプログラムが残してくれたメッセージにも重要な意味があると言えます。たとえば、ウクライナで戦争体験をされたオスタップ・スリヴィンスキーさんが紹介してくれた戦争避難者の声にまつわるストーリーは、今起きている戦争に対する私たちの印象を、より現実感のあるものへと引き寄せてくれました。ノーベル平和賞を受賞された被団協代表理事の金本弘さんと被爆者の近藤紘子さんの言葉は、私たちに核兵器の恐ろしさ、残酷さを改めて認識させてくれました。カナダの先住民族の血を引くレストラン経営者のアイネス・クックさんは、先住民族の食事を公共の場で提供することに未だに制限が課されているという現状を教えてくださいました。私たちは、テーマウィークがあったからこそこうしたことを知ることができたのです。

テーマウィークは、何を残したのか

10月13日、大阪・関西万博の閉幕日に、テーマウィークスタジオ入口のガラスには大勢の来場者による万博を讃える声や閉幕を惜しむメッセージがびっしりと書かれていました。彼らは単なる見学者ではなく、万博に自らが参加して盛り上げる"盛り上げ手"となっていたのです。これは青森のねぶた祭の跳人（ハネト）や徳島の阿波おどりのにわか連のような、誰でも自由に参加して一緒に祭りを盛り上げる伝統的な祭りの構造によく似ています。祭りは見るだけでも楽しさを感じられますが、自ら参加すれば何倍もの楽しさや充足感を得ることができます。大阪・関西万博の来場者はまさにこうした状態を体現していたと言えます。分断や閉塞感が増している世界において、市民一人一人が自らの意思で行動することで社会を明るくし、未

来への希望を感じられる風景を創り上げていたのです。そうした大阪・関西万博の成功の一端をこのテーマウィークは確かに担っていたと思います。万博開催地に立候補した際に、日本は「SDGsの達成と未来社会の実現に向けた共創の機会の創出」を世界に約束しました。テーマウィークで掲げてきた"世界と共に創るいのち輝く未来社会"の取り組みは、まさにこの約束を具現化したものとなったのです。閉会式の直前に、公式参加者や国内出展者らが登壇するフォーラムにおいて私がモデレーターを務めさせていただきました。このフォーラムにおいて「大阪・関西万博宣言」を取りまとめ、世界に向けて発信しました。この宣言には、テーマウィークにおいて積み重ねてきた対話の成果が大きく反映されています。

私は2020年7月に会場運営プロデューサーに就任した直後に基本計画の策定に取り組みました。この基本計画の前文に「いのち」をテーマとした万博としての使命を綴りましたが、テーマウィークはまさにこの使命を実現する機会になりました。万博は170年の歴史の中で変化を繰り返しながら、開催目的を人類共通の課題解決とするステージに辿り着きました。そうした中で生まれたテーマウィークは、万博170年の歴史における一つの到達点と言えます。テーマウィークが今後の万博に受け継がれていくことを心より願います。

はじめに

この基本計画を発行した2020年は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が猛威を振るい、人類は未曾有の危機に直面することとなった。世界中で多くの命が失われ、経済も激しいダメージを受け、先行きの見えない不安感が世界を覆い包んだ。世界が等しく経験した災禍により、国家や人々の交流の分断、「いのち」を取り巻く環境や様々な社会制度の再構築、価値観や生活様式の変化等、新たな課題にも私たちは直面することとなった。しかしながら、こうした状況だからこそ、世界の知恵を結集し、速やかに解決へと導くことが求められている。大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」について考え、行動することは、まさにこの時代を生きる我々に課せられた使命となった。2030年をゴールとする持続可能な開発目標（SDGs）1への取組は、世界共通の課題の解決を目指すものであり、本万博を開催する意義である。

SDGsの本質は、いのちを起点に様々な課題を紡いでいく試みである。これは、一人一人のいのちが輝くとともに、世界が、自然界が持続可能であることを望み、未来を共に創る営みである。1970年、アジア初の国際博覧会（万博）開催となった日本万国博覧会（大阪万博）では、第2次世界大戦の焼け跡から高度経済成長を成し遂げたことを背景に、当時の最先端技術の展示を行い、技術がもたらす豊かな明日を示し、来場者に強烈なインパクトを与えた。その後の「自然と人間との共生」をテーマにした1990年国際花と緑の博覧会、「自然の叡智」をテーマにした2005年日本国際博覧会（愛・地球博）等、日本で開催した国際博覧会はその時代の課題に向き合い、世界と共に解決を目指してきた。

2025年大阪・関西万博は、この時代に、「いのち」をテーマに掲げる万博として、世界が一つの「場」に集う機会となる。本万博を契機として世界の多様な価値観が交流しあい、新たなつながりや創造を促進していく。世界的な危機を乗り越え、一人一人のいのちを守り、いのちの在り方、生き方を見つめ直すことで、未来への希望を世界に示す万博となることを目指す。

大阪・関西万博 基本計画



万博開幕4年半前に発表した「基本計画」。新型コロナウイルス感染症の世界的流行の最中に執筆した前文では、「いのち」をテーマとした万博としての使命について言及しました。基本計画発表直後に1年遅れて開幕したドバイ万博でのテーマウィークとの出会いによって、この前文に掲げた想いを具体的な事業として実現する手段を得ることができました。



大阪・関西万博宣言

大阪・関西万博宣言フォーラムは、2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）の成果を広く世界に発信し、
ていくため、閉幕日である2025年10月13日に、「大阪・関西万博宣言」を発表しました。

世界各地からの参加者と出展者が、「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマのもと、大阪・関西に結集して184日間の登録博覧会を開催し、世界中から2,800万人を超える来場者を迎え入れた。

会期前のパビリオン建設や展示準備における様々な制約、そして会期中の運営における困難などを乗り越え、関係者は一貫して密接に連携し、日々、改善・進化を続け、会期を全うした。国際社会が多様な課題に直面し、将来に向けた展望に不確実性が高まる中、165の公式参加者とホスト国はナショナルデー・スペシャルデーを称え合いながら、それぞれの独自の文化とアジェンダを力強く表現し、大阪・関西をはじめ日本中、世界中からの来場者とともに万博を共創しつつ、大屋根リングに体现される「多様でありながら、ひとつ」とのメッセージを世界に発信した。

この万博では、コロナ禍が克服された中、訪れた人々はつながりの重要性を再認識し、偶然の出会いがもたらす喜びや恵みを楽しむことができた。分断という言葉がより強く語られ始めている中、様々な文化が一つの場に集いつながるリアルなイベントとしての万博が多くの人々を魅了し、非日常の大きな熱狂を生み出し得ることを見せた。これは、外交、ビジネス、学術、文化など多様な分野での新たな交流が促進されたことと併せ、万博が相互理解と対話を促す重要な公共財であることを改めて示し、次の時代に向けた弾みを付けるものである。とりわけ、公式参加者やホスト国の地域コミュニティ、学生、非営利団体、ビジネス・学術・文化関係者など様々な関係者が、多様なプロジェクトを協同して準備し、万博会場の内外において相互の関係者や来場者との交流を進め、新たな活動を生み出し、更には様々な課題に対して関係者が自発的に動き、対話し、協力してきた姿は、将来の万博や国際交流の道しるべとなりうる。

会場では、生態系である「静けさの森」を中心に据え、それを取り囲むシグネチャーパビリオン、公式参加者や国内関係者のパビリオンの展示やイベントにおいて、自らの国や事業の魅力を訴求するだけでなく、「いのち輝く未来社会のデザイン」という問いに対するそれぞれの解釈を示した。半年という限られた期間だからこそその実験的なパビリオンを舞台に、遊びやアートなどを駆使しながら子どもや若者たちが未来を選択していくにあたっての学びの機会を提供するとともに、郷土文化を踏まえつつ前衛的なものもあつた踊りや音楽、食など五感に訴える体験を広く共有し、多くの感動をもたらした。

同時に、「SDGs+Beyond」で締めくくられた8つのテーマウィークを軸とする様々な議論の場において、国内外の有識者や政府・企業関係者から来場者までを含むステークホルダーが、「いのち」の本質的な在り方への根源的な探究から持続可能な将来の生活の在り方まで、多くの問いについて複層的な議論を重ねた。あらゆる「いのち」の固有の輝きを解き放つ未来社会とはどうあるべきか、この世界に脈々と受け継がれてきた貴重で多様な「いのち」を未来に残すために我々は何をすべきか、といった問いについて活発な対話がなされた。

また、展示や議論に加えて、デジタル、モビリティ、AI・ロボットといった分野における未来社会の在り方や、循環経済やライフサイエンス・ヘルスケア、ダイバーシティなどの現代的な課題への取組は、各パビリオンにおける活動や、万博自体のインフラや日々の取組においても実践された。例えば、デジタルの観点では、来場予約システムの導入などによって得られたデータを分析し毎日の運営改善に活用することで、安全で快適な会場運営に活かしたほか、循環経済の観点からは、パビリオンや大屋根リングなど会場内の様々な施設において練られているリユースなどの計画は、万博の理念が具体的に実践された表れと捉えられる。こうした試みが、世界が直面する課題に向き合うすべての関係者にとって、行動のきっかけや示唆となることが期待される。

大阪・関西万博では、関わったすべての人々が、多様でありながらも、ひとつにつながり、対話し、共働し、それぞれの文化を共鳴させ合う中で、いのち輝く未来社会に向けたメッセージを発信してきた。そうした議論や実践が、今後の万博に継承されるとともに世界の人々が未来社会をデザインしていくことに資することを願い、本宣言とする。

大阪・関西万博宣言フォーラム 2025年10月13日(月) EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」



[登壇者] 石川勝 会場運営プロデューサー (モデレーター)、宮地純 ウーマンズパビリオン in collaboration with Cartier カルティエ・ジャパン・プレジデント&CEO、西尾章治郎 「いのち会議」事業推進協議会議長 国立大学法人大阪大学 前総長、ローリー・ピーターズ カナダ陳列区域代表、藤本 壮介 会場デザインプロデューサー、アルビナ・ファリア・デ・アシス・ペレイラ・アフリカーノ アンゴラ陳列区域代表、佐久間 洋司 シェイプ・ニューワールド・イニシアティブ代表理事、モーリン・スミス ジャマイカ陳列区域代表

万博の歴史から

1851年に最初の万博がロンドンで開催されて以来、万博は世界の主要都市において数多く開催されてきました。19世紀半ばからおよそ100年間開催された初期の万博は、産業と貿易を中核とした国家の威信を披露し合う場として発展を遂げましたが、2度の世界大戦を経て世界は大きく変容しました。代わって現れたのは科学技術によって豊かな未来を築く時代です。万博もこれに合わせて企業が大きな存在感を発揮するようになりました。しかし、成長一辺倒の文明は地球環境に深刻な被害を及ぼすようになり、世界は再び新たな時代を迎えることとなりました。1994年のBIE総会決議はこうした時代の変化を背景としたものであり、万博を人類共通の課題解決の場とすることを目標に定めました。21世紀に入ってから大阪・関西万博までに4回の登録博覧会が開催され、それぞれにおいて地球的課題の解決に向けた取り組みが工夫されてきました。中でも、直前のドバイ万博において初めて登場したテーマウィークは、万博の歴史が積み重なって築き出された万博の意義を示す象徴とも言える存在として世界中から注目が集まりました。

2025 OSAKA, KANSAI, JAPAN

2020 DUBAI

2015 MILAN

2010 SHANGHAI

2005 AICHI

2000 HANNOVER

1994 BIE総会

万博は人類共通の課題解決の場に

1992 SEVILLE

1970 OSAKA

1900 PARIS

1873 VIENNA

1867 PARIS

1851 LONDON



主催

公益社団法人2025年日本国際博覧会協会

関係省庁

内閣官房
経済産業省

協力 (テーマウィーク プログラムサポーター)

アジア太平洋トレードセンター株式会社
大阪商工会議所
シェイプ・ニューワールド・イニシアティブ

企画

石川 勝 (会場運営プロデューサー)
宮田 裕章 (テーマ事業プロデューサー)
石黒 浩 (テーマ事業プロデューサー)
中島 さち子 (テーマ事業プロデューサー)
落合 陽一 (テーマ事業プロデューサー)
福岡 伸一 (テーマ事業プロデューサー)
河森 正治 (テーマ事業プロデューサー)
小山 薫堂 (テーマ事業プロデューサー)
河瀬 直美 (テーマ事業プロデューサー)
稲田 誠士 (アジェンダ2025アドバイザー)
蟹江 憲史 (アジェンダ2025アドバイザー)

監修

橋爪 紳也 (テーマウィークアドバイザー)

スタッフ

岩田 泰
畠山 一成
河本 健一
吉田 健一郎
池谷 巖
島上 聖司
西本 敬一
佐藤 毅
高見 明伸
竹本 林官
合田 克彰
斎藤 正治
増田 智子
西口 潤
川端 匡
榎木谷 達人
笹井 政則
清水 康平
中村 洋平
齋藤 光祐
土井口 諭
早藤 直哉
武田 史織

サポートスタッフ

(赤塚由香理、今田裕子、妹尾純子、橋本文代、
松浦紗弥香、向真佐枝、芳富恵子、和田香織、
他)

テーマウィーク事務局

株式会社博報堂
(石川慶二郎、奥村知己、中尾直人、内田利昌、
原智彦、小村啓介、島田祐、塩谷明治、
鈴木広美、益子博之、多田千香子、中島優紀、
横山健太、川田神奈、石橋聖、栗田敬子、
原田尚美、古山典之、東圭介、白井信之、
三本木啓、中野智子、尾野恵介、井坂篤史、
渡邊彰宏、藪内新太、他)

協賛

ブロンズパートナー



パートナー

株式会社IHI	オムロン株式会社	一般社団法人 関西イノベーションセンター	独立行政法人 国際協力機構	国際ロータリー 第2660地区
サントリーホールディングス株式会社	JR東海	世界がん撲滅サミット 2025実行委員会	株式会社竹中工務店	ダイキン工業株式会社
公益財団法人 地球環境センター	DMG森精機株式会社	東京海上日動火災保険 株式会社	日本ロレアル株式会社	株式会社 フォーラムエイト
株式会社文化資本創研	三井住友信託銀行 株式会社			



Bureau
International
des Expositions

本書に掲載されている文章・写真・図版等の著作権をはじめとする知的財産権は、日本博覧会協会に帰属します。
権利者の許可なく、無断にて複製・転載・改変・配布等を行うことを固く禁じます。
また、本書の内容を引用する際には、著作権法で定められた要件を遵守し、出典を明示のうえ適切に行ってください。
引用の範囲を超える利用については、事前に権利者の許諾を得てください。